

## 第九章 神戸の遺跡



遺跡の現地説明会（北区宅原遺跡）

第一節 六甲山地南麓の遺跡

第二節 明石川流域とその周辺地域の遺跡

第三節 六甲山地北部地域の遺跡

## 第一節 六甲山地南麓の遺跡

この章では、市内の主な遺跡を紹介する。遺跡の配列は地域別とし、まず市域を六甲山地南麓、明石川流域とその周辺、および六甲山地北部という三地域に大別し、さらに各地域を数地区にわけて叙述する方法をとった。

六甲山地南麓は、大阪湾に面して東西に細長く延びた平地地域で、東は大阪平野に続き、西は鉢伏山で明石海峡に達している。

六甲山地の南斜面は、かなり急傾斜になっているが、数多くの谷に刻まれてひだの多い山容となり、その麓には所々に段丘がみられる。

川は、菅屋川・住吉川・石屋川・都賀川・旧生田川・旧湊川・旧苅藻川・妙法寺川など、いずれも比較的短小で、山麓の段丘を分断して流れ、下流域に複合扇状地を形成して海岸に至っている。したがって平地は砂礫質で、海岸や川ぞいに砂堆が形成され、生活の場として利用されてきた。市域で最も早く市街化した地域である。

1 東灘区の遺跡

深江北町遺跡

深江北町遺跡は、大阪湾に面した海岸砂堆上およびその後背湿地に存在している。現海岸線からの距離はわずかに五〇〇メートルである。昭和六十一年（一九八六）に兵庫県教育委員会によって調査が行われたが、この時に発見された遺構は弥生時代中期から後期の溝、弥生時代末から古墳時代初めにかけての円形周溝墓、古墳時代後期の竪穴住居址や土坑、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物址、水田址などである。

弥生時代末から古墳時代初めにかけての円形周溝墓は計一一基発見されている。周溝墓の規模は、四号墓以外は直径七～一〇メートル程度であり、墳丘の高さは上部が削られているため明確ではないが、本来は数十センチ程度の盛土が施されていたものと推定される。調査範囲内では、周溝が完全に一周回るのはなく、いわゆる陸橋部を有している。周溝の底や斜面で供献土器が多数出土した。

一一基の周溝墓のうち、五基で埋葬施設が確認できたが、五基とも各墳丘に

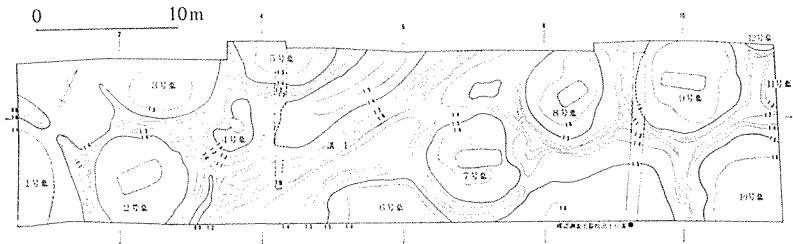


図 160 深江北町遺跡円形周溝墓全体図

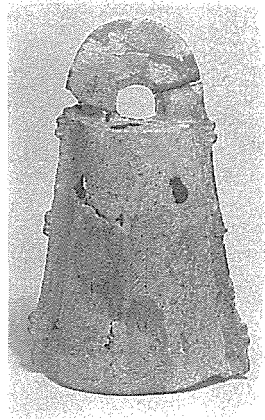


写真 133 森銅鐸A面

一つずつの埋葬施設がなく、当遺跡の周溝墓が基本的には単葬であることを示している。どの埋葬施設からも遺物は出土しなかった。

出土した供献土器には、在地産と讃岐など他地域からの搬入品とがあり、当遺跡が海辺に位置していることとあわせて、遺跡の性格を考える上での手掛りとなるであろう。

#### 森銅鐸出土地

森銅鐸は昭和三十三年（一九五八）七月、旧広岡邸跡の宅地造成中に発見された外縁付鈕式四区袈裟禪文銅鐸で、現在、東京国立博物館に所蔵されている。

出土地は六甲南麓の南向き斜面で標高約五〇メートルほどの地点である。近くには、弥生時代後期の遺跡で、竪穴住居四棟が検出された高地性集落の坂下山遺跡がある。出土時の状況は、造成工事がブルドーザーでおこなわれていたため、地表下約一メートルから出土した、ということ以外は明らかではない。

銅鐸は破損がはなはだしいため文様など不明な点が多いが、高さは三三・〇センチメートル、重量約二二・七キログラムで、鈕は四つの文様帯で構成されており、B面の外側に内行鋸歯文帯、菱環部が荒い斜格子文帯と判断できるほかははっきりしない。身は縦三条、横三条の粗い斜格子文帯で四つに区画され、A面の上の二区画とB面の四区画には四頭渦文が配されている。残るA面の下二区画には、二段の重弧文が鋳出されているようで、右の区画にはその上に三人の人物らしい文様も認められる。さらに裾近くは横帯には一列の

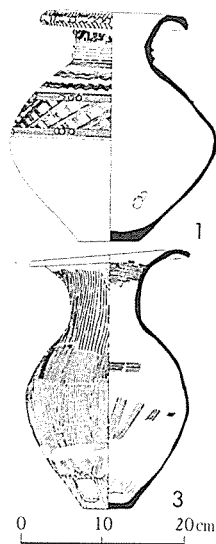


図 161 森北町遺跡出土土器

重弧文がある。鱗にも内行鋸歯文帯があり、上端、中央部と下方に三対の飾耳が付けられている。内面凸帯は一条認められ、出土地のわからない琴陵光重所蔵銅鐸と同范である。

#### 坂下山遺跡

坂下山遺跡は、神戸市の東端に近い六甲山地南麓の標高七〇〜九〇メートルを測る尾根部に立地している。昭和三十九年（一九六四）の宅地造成によって消滅してしまったが、その時採集された土器、石器類が残されている。土器は、弥生時代第Ⅲ・Ⅳ様式のもので、広口壺、無頸壺、甕かぶなどがある。石器は石鏃、石錐、不定形刃器のほか、磨製石庖丁が含まれている。ほかに堅穴住居址が四棟検出されており、高地性集落の一つとみられる。

#### 森北町遺跡

森北町遺跡は、東灘区森北町の標高三〇メートルを測る丘陵裾部に位置している。昭和二十年代以来、この周辺で遺物が採集されていたが、同三十九年森北町四丁目で浄化槽建設時に、厚い遺物包含層が検出され、完形の長頸壺を含む遺物が出土した。

さらに同五十七年（一九八二）、日本放送協会世帯寮新築に伴う調査でも、弥生時代中期中葉の溝や平安時代の溝などが検出された。弥生中期の溝にはL字形に曲がるものがあり、コーナ―付近で穿孔せんこうのある完形の土器が出土したこと

からみて、方形周溝墓の可能性がある。また、六十年度に実施した調査では、弥生時代末～古墳時代初頭と、古墳時代中期末～後期の竪穴住居が各一棟と、自然流路が検出された。住居址は、二棟とも南半が破壊されていたが、一つは東西六・四メートルを測り中央に土坑を持つ推定四本柱の方形の住居址で、他の一つも東西七メートルを測る方形の住居址である。

遺物では、弥生時代終末～古墳時代初頭の住居址を覆う薄い遺物包含層の上面で検出された銅鏡片が特筆される。鏡片は、現長四・二センチメートル、幅二・八センチメートル、最大厚三・六五ミリメートル、最小厚一・六ミリメートルを測る。中央突帯を挟んで内側に二、外側に一の陽鑄された文字が認められ、重圈銘帯鏡の一部と考えられる。外圈の文字は不明だが、内圈の方は、この型式の鏡の銘として一般的な「心忽揚而願忠」の章句が刻まれているとすると、その「心」および「忽」にあたる。鏡の製作年代は、中国前漢時代の後半と考えられる。住居址から出土した遺物は少ないが、自然流路中から韓式系土器を含む古墳時代中期後半の遺物が多く出土し、土師器・須恵

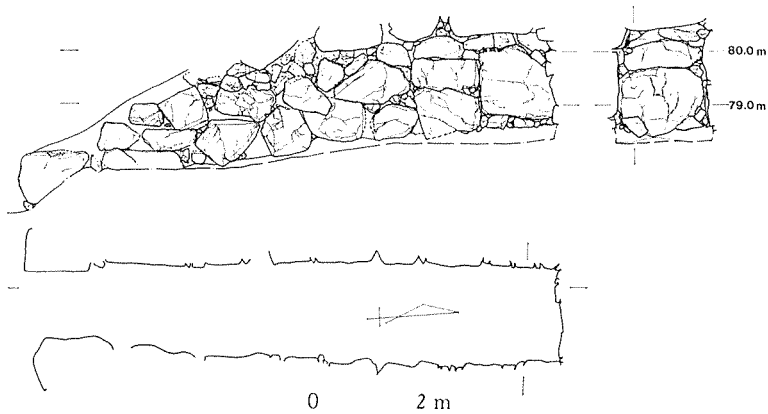


図 162 生駒古墳横穴式石室実測図

器が集中して出土する個所も認められた。

生駒古墳

生駒古墳のある、旧本山村の六甲山地南麓一帯にはかつていくつかの後期古墳が存在していたといわれるが、現在残っているのはこの古墳一基のみである。古墳は、六甲南麓に派生する尾根の中腹、標高七八メートルの地点に位置し、現在は、神戸女子薬科大学の構内に保存されている。墳形は、周囲の削平が著しいため明確にはできないが、直径一五メートル前後の円墳と考えられる。現存する墳丘高は四メートルである。埋葬施設は無袖式の横穴式石室で、石室の規模は奥壁部で幅一・七メートル、高さ二・〇メートル、残存長は一〇メートルで、その平面形はほぼ長方形である。奥壁、側壁はともに三段積みで、花こう岩を使用している。

神戸女子薬科大学に、この古墳より出土したと伝えられる遺物が保存されている。その内訳は、須恵器の坏身二点、坏蓋二点、長頸壺一点、平瓶一点、高坏片(脚柱部)一点、ほかに甕片が若干存在する。また、刀子などの鉄器も若干出土している。

生駒銅鐸出土地

生駒銅鐸は、昭和三十九年(一九六四)十二月二十二日、神戸女子薬科大学の薬草園造成中に発見された扁平鈕式の六区袈裟襷文銅鐸で、現在、文化庁(国立歴史民俗博物館)に所蔵されている。

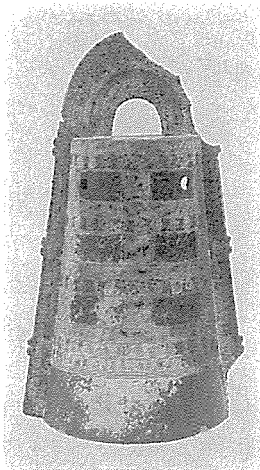


写真 134 生駒銅鐸

六甲山地南麓の生駒山南向き急斜面中腹、標高約一一〇メートルの地点から出土した。西に銅戈が出土した保久良神社遺跡、東に森銅鐸出土地が谷一つ隔てて位置している。出土時の状況は、地表下約五〇センチメートルで鈕がやや上向きに、また鐸身を斜めにして埋納されていたらしい。

銅鐸は高さ五三・二センチメートル、身の高さ三八・三センチメートル。鈕は外側から内行鋸齒文帯、連続渦文帯、綾杉文帯(菱環部)、そして内縁にも連続渦文帯が施されている。身は縦三条の斜格子文帯、横四条の斜格子文帯と連続渦文帯の組合せで六区画をつくり、その下の横帯には内行鋸齒文帯がある。鱗は内行鋸齒文帯が二列施され、上端、中央部と下方に三対の飾耳がつけられている。内面凸帯は二条で、鈕と鱗の一部が欠けているものの全体に漆黒色で铸上がりが良い。

#### 北青木遺跡

東神戸の海岸部は、これまで遺跡の存在がほとんど知られていなかった地域である。この遺跡は、縄文海進以後の海退に伴い形成された沿岸の砂堆上および後背湿地に位置している。昭和五十九年(一九八四)に兵庫県教育委員会が調査した地点では、砂堆上で弥生

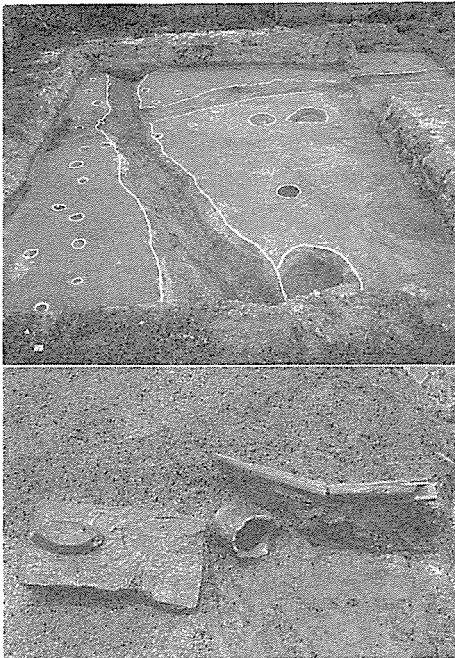


写真 135 上 北青木遺跡全景  
下 同遺跡出土土器



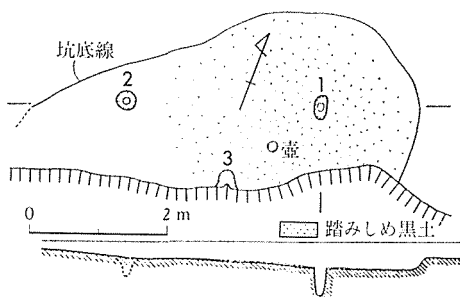


図 163 金鳥山遺跡竪穴状遺構

時代前期の溝と時期不明の柱穴が発見された。溝には東西と南北に延びるものがあり、相互に関係をもった遺構と推定される。また、この溝に土器を人為的に一括して投棄した場所が確認されており、おそらくその投棄の時期が溝としての機能を終えた時期と考えられる。遺構が検出された砂堆面と後背湿地にあたる流路との境の傾斜角度の変わる地点には、約一メートルの間隔で護岸のための杭が打ち込まれている。また流路内からは、多量の弥生時代前期前半に属す壺・甕・鉢などの土器や石鏃・石錐などの石器、さらに木製鋏の未製品などが出土している。

### 金鳥山遺跡

六甲の南斜面山地には、芦屋市西部から神戸市灘区にかけていくつかの弥生遺跡が確認されている。これらの遺跡は一般の平地の遺跡と対比して、その位置が高所にあることから高地性集落と呼ばれている。

金鳥山遺跡もこのような遺跡の一つで、六甲山地を構成する一支脈の頂部、標高三五〇メートルの金鳥山から中腹の保久良神社へ至る尾根筋を中心に広がっているものと推定されている。昭和三十七年（一九六二）、標高二一五メートル付近の二地点で調査が行われ、住居址と推定される遺構が二基確認され、弥生時代中期後半（第Ⅳ様式）の土器がそれに伴って出土している。

保久良神社遺跡

金鳥山中腹の標高約一八〇メートル辺に存在する保久良神社付近には、比較的広い平坦面が存在し、弥生土器(中期中葉のものを中心に後期におよぶ)や石器(太型蛤刃石斧・石鏃・石錘など)の散布が認められ保久良神社遺跡として古くから知られていた。

この遺跡を特徴づけているのは、磐境・磐座と呼ばれる巨石を人為的に配したらしい遺構のあることで、祭祀遺跡とみられている。昭和十六年にこのような巨石付近から樋に複合鋸歯文を施した大阪湾型銅戈が一点出土した。さらに土師器・須恵器・奈良時代の古瓦類・鎌倉時代の懸仏などの遺物も出土していて、弥生時代の高地性集落が、後に祭祀に関する遺跡に変遷したものと推定される。

へボソ塚古墳

阪急電鉄岡本駅の南西に、かつて、前方部を西北西に向けた全長約六五メートル、後円部径約三五メートルの前方後円墳があつて、昭和四十年ころまでは、住宅地内になお後円部が残されていた。

明治二十八年(一八九五)乱掘に遭つたが、出土した遺物の一部は、現在東京国立博物館に保存されている。その内訳は、三角縁二神二獸鏡一面、三角縁三神二獸鏡一面、夔鳳鏡一面、画文帯神獸鏡一面、

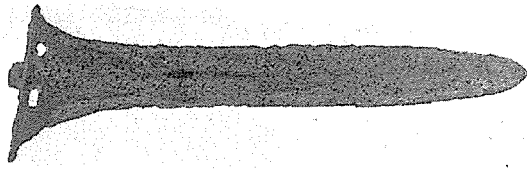


写真 136 保久良神社遺跡出土銅戈



写真 137 へボソ塚三角縁三神二獸鏡

平縁二神二獸鏡一面、獸帯鏡一面の計六面の鏡と、硬玉製と琥珀製の勾玉各一の計二個、琥珀製瓊玉一個、碧玉製管玉一三個、ガラス小玉一二〇個、硬玉製小玉一個、碧玉製石釧二点、土器一点である。このうち、三角縁二神二獸鏡には、「天」「王」「日」「月」の銘文がある。

埋葬施設は、板石を積んだ竪穴式石室で、板石の側面には朱が塗られていた。棺床には礫が敷かれていたようで、その礫にも朱が塗られていた。墳丘斜面には葺石があったが、埴輪の存在は確認されていない。

これらのことから、この古墳は古墳時代前期に造られた古墳と考えられる。

#### 本山遺跡

本山遺跡は、東側の芦屋川と西側の住吉川という二本の南北に流れる河川によって形成された複合扇状地の末端にあたり、北西から南東に向かってかなりの傾斜がみられる場所に存在している。

昭和五十八年に、田中町一丁目と本山中町四丁目のたがいに近接した地点で発掘調査が行われ、田中町の調査地点からは、弥生時代中期の自然流路が発見され、本山中町の調査地点からは、弥生時代中期の自然流路や土坑、および中世の井戸や土坑などが検出された。

これら二カ所の調査地点は、町名も異なっているが、ともに近接しており、同一の遺跡と考えられるため、ここでは名称も本山遺跡に統一し、一遺跡として記述する。

田中町側の調査地点では、自然流路中から弥生時代中期の土器、石器が出土した。その出土状況からみて、これらの遺物は、付近にあった住居地から洪水によって流され、当地点に堆積したものと推定される。

また本山中町側の調査地点では、調査地のほぼ中央部を北から南に流れる、最大幅約八メートルの自然流

上層の遺物に磨滅しているものは少なく、一個体がまとまって出土する例も多いことから、すぐ近くに集落が存在したことをうかがわせる。また、石庖丁が多く出土していることより、水田址が付近にある可能性が高いと考えられる。

渦ヶ森銅鐻出土地

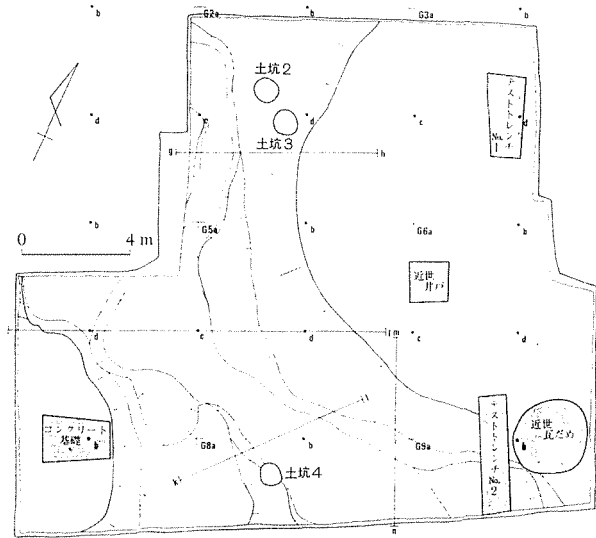


図 164 本山遺跡自然流路実測図

路が発見された。その流路の埋土は、ほぼ三層に大別できる。弥生時代中期の半ばから終わりの土器が出土する上層、中期の初めから半ばのものが出土する中層、そして弥生時代前期の土器が包含されていた下層である。さらに、流路の最下層では弥生時代前期の土器に混じって、縄文時代晩期の土器が出土している。

この流路の埋土堆積状況より、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての時期には、比較的よく水が流れていたが、その後は水が停滞して湿地のような状況下で埋土が堆積し、弥生時代中期末葉には流路としての機能を失ったものと推定される。

また土器、石器の出土状態をみると、最下層やその

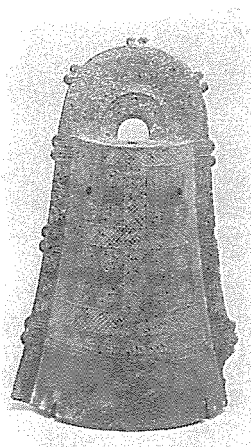


写真 138 渦ヶ森銅鐸B面

この銅鐸は昭和九年（一九三四）二月七日、住吉村水道高層配水池築造工事中に発見された扁平鈕式四区袈裟鐸文銅鐸で、桜ヶ丘銅鐸・銅戈出土地から東へ約一キロメートル、六甲山地南麓南斜面の標高約二四〇メートルの地点から出土し、現在東京国立博物館に所蔵されている。

出土時の状況から、地表下約三〇〜四〇センチメートルのところで鐸を上下にして、西向きにした鈕部を少し持ち上げたような傾いた形で埋納されていたと推定される。

銅鐸は高さ四〇・九センチメートル、重量約四・二一キログラム。鈕は外側から内行鋸歯文帯、連続渦文帯、綾杉文帯（菱環部）、そして内縁A面には二つの車輪状文、B面は無文となっている。身は縦三条、横三条の斜格子文帯で四区画をつくり、各区画内には四頭渦文を配している。また、裾近くは横帯には内行鋸歯文帯がある。鐸も内行鋸歯文帯で飾り、飾耳がその上端、中央部と下方に三対、さらに鈕に三つ付けられている。内面凸帯は二条で、銅鐸裾部が研磨されているのが認められる。

この渦ヶ森銅鐸の特徴の一つに、舞内側に舌をつりさげるための環がつくりだされていることがあげられる。

荒神山遺跡

荒神山遺跡の発見は、昭和十年（一九三五）ころにさかのぼる。その後、昭和四十二年宅地造成工事に際し、神戸大学の調査によって弥生時代遺物包含層が確認され、同四十四・四十五両年に兵庫県教育委員会によって発掘調査が行われた。

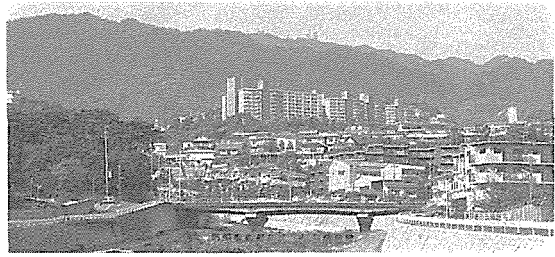


写真 139 荒神山遺跡あとに建つ住吉台の住宅

保存案も出されたが、遺跡の大半はとりこわされた。遺跡は、六甲山から派生した標高一七〇メートルから二二六メートルの尾根の先端に位置する高地性集落である。

住居址は、尾根東北の斜面に等高線に沿って上段に八棟、下段に七棟、また尾根南西部で一棟が確認されている。その他石組遺構・祭祀遺構・土坑が検出された。

出土遺物には、少量の弥生時代中期の土器と、同後期に属す土器・石鏃・砥石などがある。

森岡秀人の周辺遺跡との詳細な比較研究によると、当遺跡では、周辺の高地性集落に比べ河内産の土器が比較的多く含まれていることが指摘されており、荒神山遺跡と他地域との交流について、示唆に富んだ資料が提示されている。

#### 住吉宮町遺跡(坊ヶ塚遺跡)

住吉宮町遺跡は、住吉川と石屋川によって形成された扇状地上に立地し、標高約二〇メートルの国道二号沿いに広がっている。早くから市街化が進んでいたため、埋蔵文化財の存在は知られていなかったが、昭和六十年(一九八五)のマンション建設工事中に初めて発見された。以後一〇回以上におよぶ発掘調査が行われ、弥生時代中期から鎌倉時代に至る大きく分けて五時期の複合遺跡であることがわかってきた。また、近接する住吉駅北側の住吉本町に所在する坊ヶ塚遺跡も同一の遺跡と考えられる。

第一節 六甲山地南麓の遺跡

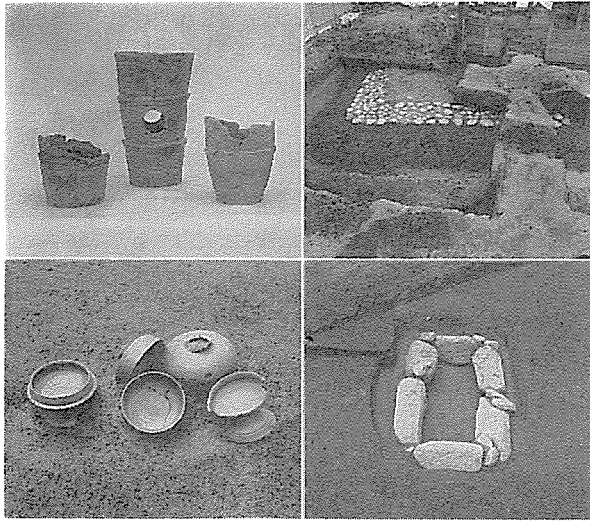


写真 140 右上 住吉宮町1号墳全景, 右下 箱式石棺  
 左上 3号墳の円筒埴輪, 左下 8号墳出土須恵器

まず、弥生時代中期では、竪穴住居址などが確認されている。続く古墳時代前期初頭には、遺物包含層と土坑などが確認されている。そこから生駒山地西麓で製作された土師器甕が出土しており、当時の人々や物の動きを示す資料として興味深い。また、坊ヶ塚遺跡では、この時期の方形周溝墓三基と水田址が確認されている。

次の古墳時代後期初頭から後期後半までのものは、これまでに住吉川の洪水による黄色砂で埋もれた合計一一基におよぶ小型の方墳が発見されている。古墳の規模は一辺六〜一三メートルとさまざまであるが、いずれも周溝を巡らしており、その周溝が相接して所狭しとばかり築造されている。墳丘に葺石をもつものも四基ある。これらの中でも、三号墳は一辺一三メートル、高さ二・五メートルを測る最大の規模で、構造は二段築成、外部施設として人頭大の葺石と幅三メートル、深さ一メートルの周溝を巡らし、直径二七センチメートル、器高四五センチメートルの土師質の円筒埴輪を墳丘の小段に立てている。また埋葬施設では、七号墳が木棺直葬、九号墳

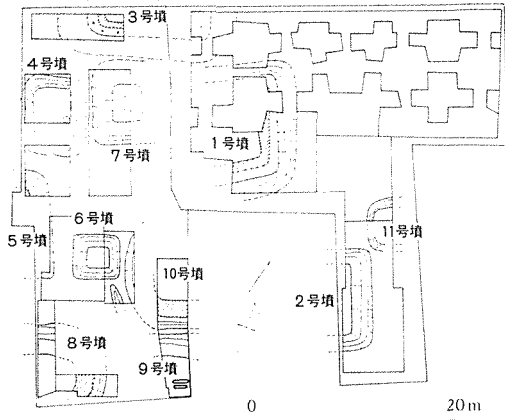


図 165 住吉宮町古墳配置図

が箱式石棺二基並列、四号墳が須恵器甕直葬などさまざまである。副葬品には須恵器(坏・高坏・甕・甕)や鉄製太刀などが出土している。また、古墳の周溝の外側では、わずかな盛土をもつ箱式石棺三基や畦畔状遺構も確認されている。

この住吉宮町遺跡の古墳群は、先述した坊ヶ塚遺跡でも小型方墳が一一基確認されていることと考えあわせると、住吉本町坊ヶ塚にあったと伝えられる坊ヶ塚古墳(前方後円墳全長四〇メートル)の南側一帯に広がる、さまざまな大きさの小形方墳を主体に構成されるかなり大規模な古墳群であったと考えられる。そして、この古墳群に葬られた人たちは、西側に近接する御影町の郡家遺跡で検出された时期的に併行する豎

穴住居を数多く営んだ集団の人々と推定できる。

続く古墳時代後期末から奈良時代にかけての遺構には、柱穴・土坑や旧河道などが確認されており、多量の須恵器・土師器に混じって漁網錘や飯蛸壺なども出土している。

#### 住吉東古墳

住吉東古墳は住吉宮町遺跡の東端に近い住吉東町五丁目において、昭和六十三年(一九八八)に発見された、古墳時代後期の帆立貝式古墳である。古墳は住吉川や石屋川によって形成された複合扇状地の末端、標高二



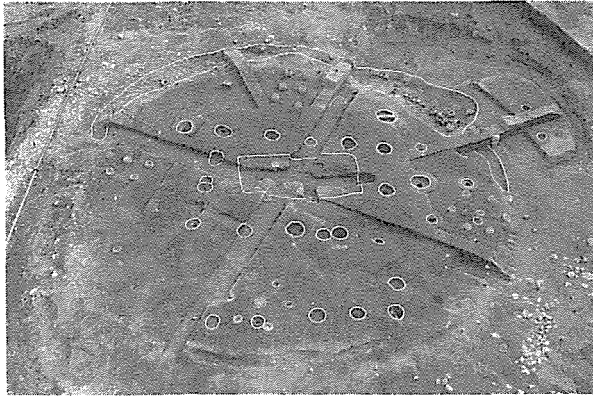


写真 141 住吉東古墳喪屋

一メートル付近に在り、全長は二四メートル、円丘部の径一八メートル、造出部の長さ六メートルを測る。この古墳を特徴づけているのは、その築造過程を明確にできる点にある。まず、古墳の築造に際しては、その築造場所を選び、溝を掘り地割りをする。ついで盛土をする前に祭祀を行う。この際に使用したとみられる土器や埴輪が溝の中に投棄されていた。

その後、約八〇センチメートル程度の盛土を行い（下部盛土）平坦面を造り、喪屋や目隠し屏を建て、遺骸を安置する。ある期間、遺骸を喪屋の中に安置した後に、木棺に入れ埋葬し、さらにその上に盛土を行う（上部盛土）。この盛土を行う際にも祭祀を行っているらしく、盛土内より多数の玉類が出土している。

盛土が完了したのちに、墳頂部に石列を、墳丘斜面に埴輪列を巡らし、祭祀を行っている。

地山面から検出された溝は幅一・七〜〇・四メートル、深さ〇・四メートルで、円丘部の南半部を古墳の裾より一回り小さく孤状に巡っている。これが古墳の企画と一致していること、出土した溝内の土器と墳頂の土器とが同一時期であることから古墳築造の際の地割りと考えられる。溝内の出土遺物には、須恵器のほか、円筒埴輪と家型埴輪（入母屋式建物）が出土している。喪屋は、



写真 142 同墳復元埴輪列

埋葬施設の外を取り囲むようにあり、南北三間（五メートル）×東西四間（六・四メートル）のもので、一三本の柱穴より切妻式の掘立柱建物に復元できる。この建物の西側の一間（二・八メートル）×二間（三メートル）の建物は祭壇、北側の五個の柱穴からなる柱列（六メートル）は、目隠し扉と推定される。

埋葬施設は円丘部の中央にあり、幅一・九メートル、長さ四・三メートルの長方形の墓壙の中に、幅〇・七メートル、長さ三・二メートルの木棺を収めたもので、棺内に鉄製直刀と棺外に鉄鏃が副葬されていた。

埴輪列は円筒埴輪約一六〇本、朝顔形埴輪約一〇本、人物埴輪三体、馬形埴輪一体により構成されている。埴輪の配列は円筒埴輪を巡らし、くびれ部や前丘部などに朝顔形埴輪を点々と配置している。出土状態から朝顔形埴輪は円筒列の外側に立て並べられており、形象埴輪は円筒列の内側に配置されている。人物埴輪二体は南側くびれ部に、人物埴輪一体と馬形埴輪は円丘部南側に配置されていた。馬形埴輪は、ほぼ完全に復元することが可能で、高さ約六二センチメートル、長さ約八五センチメートルのものである。鞍とその下に敷く障泥しやうでいや、鐙あぶみ、手綱などの装具は丁寧しんじやうに表現されている。

人物埴輪は三個体とも巫女で、二個体は頭部、一個体は衣装の裾部である。頭部は島田鬚まきふうに結髪し、目を透し孔、鼻を粘土で隆起させ、口は篋くわ描き、耳は粘土紐を用いて表現している。

墳頂部の石列は人頭大の花こう岩の川原石を用いて、直径一四メートルの円形に巡らせたものである。

また、この古墳が良好に残った原因は、築造後まもなくおこった洪水により地中に埋没したためと考えられ、周溝内には砂が厚く堆積していた。洪水で埋まった砂の上からは六世紀後半の土器が出土している。

この古墳の周辺には、一辺が一〇メートル内外の三基の小型方墳が築かれているほか、ほぼ同時期の堅穴住居が数多く造られている。堅穴住居と古墳の関係についてはまだ不明である。

この古墳では、古墳の企画構想や築造過程が明らかになり、喪屋が確認されるなど極めて重要な発見がいくつかある。また、埴輪や祭祀に関連する多くの出土品もあり、当時の葬送儀礼を考えるうえで貴重な資料といえる。

#### 東求女塚古墳

東求女塚古墳は、東灘区御影塚町の処女塚古墳、灘区都通の西求女塚古墳とともに、葦屋の苑名負処女の悲恋伝説にゆかりのある古墳として古来有名である。

東求女塚古墳は、明治の中頃までは墳丘が残存していたが、壁土に適していたため土取りが行なわれた。その際三角縁神獸鏡、内行花文鏡、画文帯神獸鏡などの銅鏡六面、車輪石、刀、玉、人骨、木片などが出土した。その後明治三十三年（一九〇〇）ころ、後円部から三角縁神獸鏡と内行花文鏡の二面の銅鏡片が出土している。後円部からは石材が出土し、埋葬施設は堅穴式石室であったと推定されている。その後も明治三十



写真 143 東求女塚古墳前方部掘

七年前ころ阪神電鉄軌道敷の土取場となり、古墳の前方部は削り取られ、その跡地に遊喜幼稚園が設立されて現在に至っている。後円部は昭和三十年ころまでは残されていたが、それも削られ、その跡地は現在東求女塚公園となっている。このように東求女塚古墳は地上にほとんどその痕跡をとどめなくなっていた。昭和五十七年遊喜幼稚園の園舎改築に伴う調査によって、七〇年ぶりにその姿が明らかになった。

調査の結果、古墳は基底部から一メートル程の高さまでは残存しており、前方部の北側及び西側の墳丘裾と周濠および外堤が検出された。

古墳は前方部を北西に向けた前方後円墳で、水をたたえた周濠をめぐらせており、濠幅は西側で一〇メートル、北側では一〇メートル以上、深さ〇・八〜一メートルを測り、外堤には何ら施設を設けていない。

前方部は主に花こう岩の川原石を使用した葺石で葺かれており、根石から七〇〜八〇度の傾斜角度で積み上げられ、調査時で〇・八〜一メートルの高さまで残存していた。

遺物としては、周濠上面から中世の黒色土器、須恵器、土師器が、周濠内から古墳時代後期の須恵器、ま

た墳丘盛土内から弥生時代中期の土器が出土したが、埴輪は出土していない。

東求女塚古墳の築造時期は、周濠の存在や前方部の形態からみて、四世紀後半でもやや新しい時期と考えられる。

明治の地籍図によると古墳の全長は約八〇メートル、後円部径約四七メートル、前方部の幅四二メートル、同長さ約四二メートルを測るが、今回の調査ではそのうち前方部については幅三六メートル、長さ三一メートルであることが明らかになった。なお、調査後埋め戻され、遊喜幼稚園園舎の下に保存されている。

#### 郡家遺跡

一般的に遺跡発見の契機は、遺物を採集することに始まる。しかし、当遺跡の場合は異なる。今も地名として残る「郡家」は、古代の郡衙の存在を暗示するものであり、小字として残る「大蔵」は、郡衙の正倉をさすのではないかと考えられてきた。そこで、昭和五十四年度大蔵地区で初めて発掘調査を行い、郡衙に関連すると思われる掘立柱建物やその下層から弥生土器が出土したことが、当遺跡確認の最初であった。現在までにその調査は、四十数次を重ね、遺跡の実態は明らかになりつつある。

当遺跡の開始は弥生時代後期である。この時期は、遺構の分布密度が低く、居住域と墓域は近接して存在し、墓域の中も円形周溝墓や集石墓が存在するにすぎない。この集石墓は、四・〇×四・五メートルの土坑のなかに、木口穴を有する木棺を納め、その上を多量の土器や花こう岩礫で覆ったもので、特異な墓の形態である。

また、この時期はまだ地形が安定していなかったようで、大きな流路が幾筋も流れ、その堆積土中から多

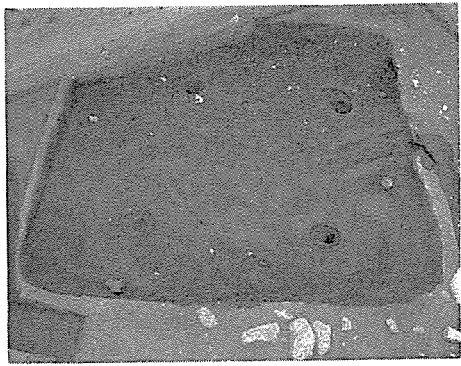


写真 144 郡家遺跡L字形煙道のある  
竪穴住居

量の弥生土器が出土している。

古墳時代前期には、居住人口が希薄になったとみえて、遺構は数少ない。しかし、中期・後期にはかなりの数の竪穴住居や掘立柱建物を検出しており、継続的に居住していたようである。この時期の竪穴住居の大部分は、段丘斜面に位置するが、規則正しく並ぶ掘立柱建物は段丘の高所に位置している。

竪穴住居の中には特異な煙道をもつものが存在する。一般に住居内に設けられたカマドの煙道は真っ直ぐ外へ延びるが、この遺跡の竪穴住居ではL字形に屈曲するものがみられる。それが五世紀末のものでは住居内にあり、六世紀中ころのものは外にある。

この発展形態と考えられるものが、七世紀ころ京都府北部に分布し、青野型住居と呼ばれている。この青野型住居は、渡来系氏族の居住域の分布と重なり、その関連が指摘されている。当遺跡でも韓式系土器が少なからず出土していることから、渡来系氏族との関連は十分に考えられる。ただ、今日までのところ他にそれを証する資料は見当たらない。

また、この時期の墓域は当遺跡内には存在せず、北方段丘上にかつて存在した鴨子ヶ原群集墳や南東の沖積地上に立地する住吉宮町遺跡・坊ヶ塚遺跡に見られる古墳群との関連が考えられる。

なお、郡衙遺構については、奈良・平安時代の遺構の出土するのがほぼ大蔵地区に限られ、その柱穴規模



写真 145 処女塚古墳の箱式石棺

と合わせ考えると、摂津国菟原郡衙である可能性は高い。

#### 処女塚古墳

処女塚古墳は、六甲山麓の石屋川が形成した、標高八メートルの砂堆上に立地している。現在の海岸線で直線距離でわずか一・五キロメートルしかなく、古墳を造った当時は、すぐ近くまで砂浜が広がっていたと考えられ、著しく目立っていたであろう。このことは『万葉集』にも、東西求女塚古墳とともに歌に詠まれ、以後も『大和物語』や『太平記』などの文学に、たびたび登場していることからうかがえる。

大正十一年（一九二二）に国の史跡に指定されたが、現在では市街地化が進み、周囲を道路で囲まれている。昭和五十四年から、史跡整備事業に伴い三次にわたる発掘調査を行い、昭和六十年には整備が完成した。

発掘調査の結果、前方部を南側に向けた、全長約六メートルの前方後方墳であることが判明した。後方は、不整形形で一辺約三メートル高さ七メートル、前方部は長さ約三メートル、前方部最大幅三メートル高さ四メートルの規模であったと推定できる。前方部は二段築成、後方は三段築成で、斜面全体に葺石をはりめぐらせている。葺石の石材は、その大半が黒雲母花こう岩である。墳丘はすべて砂と粘土を順序よく交互に積み上げており、この盛り土の中には弥生土器（前期以降）が含まれている。墳丘の周りに、濠があったかどうかはわかっていない。

後方部中央の埋葬施設の内容は不明だが、墳頂部で南北約

一三メートル、東西約二・五メートルの範囲の周囲に、花こう岩円礫と粘土が認められる。これは埋葬施設の上面と考えられるが、通常の竪穴式石室ではなかったようである。前方部東側の中段には箱式石棺一基が追葬されていた。長さ一メートル、幅〇・二五メートルの大きさで、板石と円礫からなり、蓋石の直上から滑石製勾玉が一点出土している。棺内では、遺物を検出していない。この古墳は、通常の埴輪を立てずに、小段上に壺形埴輪を数点置いている。壺形埴輪には特徴的な紋様が施されていた。これら出土遺物などから、この古墳は四世紀中ごろに築かれたと考えられる。

#### 東灘区その他の遺跡

六甲山南側山脚部には、多くの群集墳があったと伝えられているが、早くから宅地化が進んだために、今に残存するものは極めて少ない。

御影町西平野にあった伊賀塚は、墳丘の形状も不明であるが、かなりの規模をもっていたようで、巨石を用いた横穴式石室を埋葬施設とする古墳であったらしい。江戸時代に書かれた『撰津志』や『撰津名所図絵』にも登場し、今も地名として残っている。

岡本梅林内の群集墳も、すでに破壊されてしまったが、ここからは石棺の出土することが多い。そのうちの一つ、横穴式石室内に安置されていたものが現存している。棺身長一・二メートル、くり込み部の長さ〇・九七メートル、同幅〇・四メートル、蓋長一・二八メートルを測る小形のくり抜き家形石棺で、棺内から骨片や、武具が出土したと伝えられるが明らかではない。他にも南北に長い石室内に、その主軸に平行して置かれた小形のくり抜き石棺があるが、詳細は不明である。これらとは別に昭和二十五年ころ、家形石棺の蓋



が出土したと伝えられている。群集墳は、岡本梅林西側の丘陵、本山町野寄の方にも広がっていたらしく、横穴式石室をもつ、下の御前・上の御前と名付けられた古墳が知られている。

天上川をさかのぼった八幡神社の北東にあった八幡谷古墳は、その墳形および墳丘規模が不明であるが、紅野芳雄の残した記録によると、埋葬施設は、右片袖の横穴式石室で、玄室長約三・八メートル、同幅約二・三メートル、玄門幅約一・三メートル、袖幅約〇・九メートル、石室残存長約八・二メートルで、玄室右側壁沿いには、内法長さ約一・八メートル、同幅〇・九メートルの組み合わせ式箱形石棺があったとされている。遺物は主として玄室内の棺外から出土したもので、須恵器、鉄斧頭一、鉄鏃約一五〇、槍身一、雲珠六(うち一は鍍金大形雲珠)、杏葉二、轡三、輪鏡二、鏡軛一、銀金具などがあげられている。これらの一部は現在東京国立博物館と京都大学に保管されているが、後者の収蔵品には、断面が台形の鉄覆輪や、磯金具の縁金具が含まれており、鞍も副葬されていたことが知られる。杏葉は鉄地金銅張りの棘葉形杏葉で、内部に地板とは別作りで忍冬文が表わされている。

## 2 灘区の遺跡

### 桜ヶ丘銅鐸・銅戈出土地

昭和三十九年(一九六四)十二月十日、土取り作業中に偶然一四個の銅鐸と七本の銅戈が発見された。昭和四十五年一括して国宝に指定され、現在、神戸市立博物館に所蔵されている。

六甲山地南斜面の通称神岡と呼ばれる標高約二四〇メートルの岡上、尾根線から北にやや下りたあたりから出土したといわれ、発見後の発掘調査で一・六×〇・九メートルの土坑に埋納されていたことがわかった。ただ、各々の銅鐸・銅戈がどのような配列で、どのような組み合わせであったかは不明であるが、銅鐸に付着した錆の状態から二群に分けて埋納されていたと推定される。

出土した銅鐸は流水文銅鐸三、袈裟禪文銅鐸一で、4号銅鐸と5号銅鐸の身の両面四区画内に線描きの絵が鋳出されている。魚、水鳥、トンボ、カマキリや鹿といった動物のほかに狩りをする人物、脱殻をする人物などが描かれているが、狩猟・漁撈のいわば弱肉強食の世界

表 52 桜ヶ丘出土銅鐸一覧

番号	形 式	高さ	重量	絵画・飾耳	同 範 鐸
1	外縁付鈕式流水文	42.9	5.88	身の中央やや上に絵画帯	鳥取県泊鐸・滋賀県新庄鐸
2	外縁付鈕式流水文	42.4	4.85	鈕内側・身中央に絵画	大阪府神於鐸
3	外縁付鈕式流水文	44.5	4.64		鳥取県上屋敷鐸
4	扁平鈕式四区袈裟禪文	42.0	3.34	区画内・裾に絵画	
5	扁平鈕式四区袈裟禪文	39.2	2.62	区画内に絵画	
6	扁平鈕式六区袈裟禪文	63.7	14.10	区画内に四頭渦文	
7	扁平鈕式六区袈裟禪文	41.9	2.96		
8	扁平鈕式六区袈裟禪文	42.2	3.30		
9	扁平鈕式六区袈裟禪文	42.9	3.72		
10	扁平鈕式六区袈裟禪文	42.8	3.23		
11	扁平鈕式四区袈裟禪文	45.3	4.13	鱗に三対の飾耳	
12	外縁付鈕式四区袈裟禪文	31.4	2.60		
13	扁平鈕式四区袈裟禪文	21.9	0.72		
14	扁平鈕式四区袈裟禪文	21.05	0.48		

から、農耕を主要な生産手段とする社会への転換をたたえた農耕讃歌だと解釈する説が有力である。

絵画銅鐸は、この4号銅鐸・5号銅鐸のほか伝香川県出土銅鐸（大橋旧蔵、現在東京国立博物館所蔵）と、谷文晁旧蔵とされる銅鐸（拓本のみが東京大学に保存されている）の四個が知られているが、描かれている絵の内容や描き方の特徴から、同一の工人または同一の工人集団によってつくられたものと推定されている。

七本の銅戈は長さ二七・一〜二八・九センチメートルで、ほぼ大きさがそろっていて、すべてが樋に複合鋸歯文を鑄出した大阪湾型銅戈である。

このように多くの銅鐸・銅戈が一カ所に埋納されていたことについては、桜ヶ丘より西の約二〇キロメートルにわたる地域の村々で、農耕の祭りに使用されていたものが、ある段階で村々が統合されたのを機会として集められたのではないかという説がある。しかし、桜ヶ丘の西にある伯母野山遺跡の北方、大月山から出土したと伝えられる外縁付鈕式四区袈裟襷文銅鐸の存在は、もし桜ヶ丘銅鐸・銅戈が一時期に埋納されていたとすれば、この従来の説に大きな疑問をなげかけることとなる。

#### 桜ヶ丘遺跡B地点

桜ヶ丘遺跡B地点は、銅鐸が発見された桜ヶ丘遺跡から直線距離にして、南へ五〇〇メートルの尾根上に存在している。銅鐸が発見された後に、標高一二五メートル前後の尾根上から土器が表面採取されたため、「桜ヶ丘遺跡B地点」と命名された。この遺跡が発見された当時から、銅鐸を埋めた人々が生活していた集落を、発見できるのではないかと期待されていた。

昭和五十二年になって、当該地にマンション建設が予定されたため、試掘調査が実施された。調査の結果、

弥生時代中期の遺物包含層が確認され、発掘調査を実施した。

発掘調査によって発見された遺構は、住居址二四、埋葬施設三五、溝二、斜面に石を置いた遺構三が確認された。出土した遺物には、弥生土器（中期の壺・甕・高坏・器台）、土錘、石鏃四〇、石錘一、砥石二、石錐一、石斧二、環状石斧片一などがある。この調査では、桜ヶ丘遺跡と桜ヶ丘遺跡B地点の関係を、明らかにすることはできなかった。

#### 伯母野山遺跡

伯母野山遺跡は、六甲山地の一峰である長峰山の南麓斜面上に立地する高地性集落である。昭和二十二年（一九四七）弥生時代の土器が採集され、当遺跡の存在が明らかになった。

その後昭和二十八年ころから、当遺跡周辺で土取り作業が始まり、多くの遺物が採集されるようになった。こうしたことから注目されるようになり、昭和三十三年トレンチ調査が実施され、昭和三十四年には発掘調査が行われた。

この遺跡は、牛小屋山の山頂および東麓・南麓の牛小屋山地区、その東方勝岡山南麓の勝岡山地区、勝岡山北方の伯母野山地区という三つの地区に及んでいる。いずれの地区も、土取りなどにより著しく地形が改変され、現在ではほとんど旧状をとどめていない。

遺構としては、弥生時代中期の住居址が検出されている。出土遺物としては、弥生時代中期中葉から後期にかけての土器、石器、鉄器などがある。

弥生時代中期中葉のものとして、壺・甕・高坏・蓋形土器があり、中期末のものとして、壺・甕・高坏・

鉢・蓋形土器・器台があり、後期のものとして、壺・甕・高坏・鉢・飯蛸壺形土器がある。

打製石器には、石鏃、石槍、石匙、石庖丁などがあり、いずれもサヌカイト製である。

磨製石器には、粘板岩製磨製石剣をはじめ、凝灰岩製環状石斧、緑泥片岩製柱状片刃石斧のほか、扁平片刃石斧、大型蛤刃石斧、磨製石庖丁、大形曲玉状石器などがあり、凹石、敲石、石錘、砥石なども出土している。

また、鉄器としては、鉄鏃が出土している。

#### 篠原遺跡

篠原遺跡は六甲山地南麓を流れる六甲川と柚谷川が合流して都賀川となる付近を中心とする標高五〇〜八五メートルの丘陵扇状地の上の広い範囲に立地する、縄文時代から平安時代までの複合遺跡である。

昭和四年小林行雄により学会に紹介された著名な遺跡であったが、その後、住宅街として宅地造成が進み、多くはすでに消滅したと考えられていた。しかし、昭和五十八年にマンション建設が計画されたため試掘調査を実施したところ、多くの部分に現在もなお遺跡の残っていることが再確認された。

縄文時代の主な遺構としては、中期末葉の竪穴住居と石組遺構、

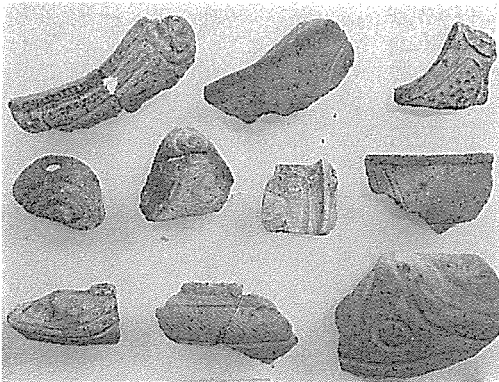


写真 146 篠原遺跡出土縄文中期末の土器片

後期の土坑、晩期中葉の甕棺墓群と石棒の製作址などがある。竪穴住居は方形のもので中央付近の床面が火熱をうけ堅く焼けており屋内炉を備えていたものと推定される。

特に石棒製作址では未製品を含む多量の遺物が発見されており、甕棺墓群の存在と共に、当時の祭祀や埋葬の風習を知るための貴重な資料といえる。

遺物は、中期末葉の北白川C式土器や、後期前半の北白川上層式土器、後期後半の土器、晩期中ごろから終末にかけての土器が、石鏃などの石器を伴って多量に出土している。この中で特に注目されるものとしては、晩期中ごろの土器群の中に、東北地方で主として分布する大洞式土器(亀ヶ岡式土器)の土偶・注口土器・甕形土器などのセットが含まれていたことである。大洞式土器は近畿地方の他の遺跡でもしばしば発見されているが、セットとなつて出土する例は極めてまれなことであるし、当遺跡がその分布の西の端に位置していることから、貴重な資料である。

弥生時代では前期および後期の土器の出土が知られているが、明確な遺構を伴っているのは後期のみに限定されるようである。後期の主な遺構としては竪穴住居址や溝・土坑などがある。後期には比較的長く集落が続いたらしく、前葉から終末まで土器を伴って広い範囲に遺構が分布している。

弥生時代以降も遺跡は継続することが古墳時代の土器の出土から知られるが、その分布範囲や性格については今後の資料の増加をまたなければならぬ。

#### 西求女塚古墳

西求女塚古墳は旧海岸線から約二〇〇メートル(現在では海岸から約三〇〇メートル)のところの砂堆上に位置



写真 147 西求女塚古墳全景

し、前方部を東に向けた前方後円墳である。

この古墳は、東求女塚古墳、処女塚古墳と共に万葉集の時代から悲恋伝説にまつわる古墳として、古くから、その名を知られていた。現在は市街地の中の公園として保存されている。

昭和六十一年と六十二年に試掘調査を行った。その結果、まず、現在見られる古墳の形は戦後の区画整理を行った時に造られたもので、実際は後円部の直径が推定約七〇メートル（現在は約六〇メートル）全長一一〇メートル以上（現在は約一〇〇メートル）の古墳であることがわかった。墳丘の斜面には葺石が存在したが、埴輪は確認されず置かれていなかったようである。

埋葬施設は後円部中央に存在し、調査区内で結晶片岩を含む板石や小円礫群、黄色粘土が確認されたが、公園造成時か、それ以前にかなり動かされていたようで、現在残っている石も原位置を保っているかどうかわからない。しかし板石の側面に朱（ベンガラと水銀朱）が塗られていることなどから、竪穴式石室であったことは間違いないようである。

墳丘の最下段は削り出されその上に付近の砂土を盛って、二段ないしは三段に築成されていたと考えられる。周濠については、

これまでの調査で確認できなかった。

遺物は埋葬施設の付近から、獸帯鏡の破片と山陰系土器の小形丸底壺や鼓型器台が出土した。これらの出土遺物のほかに以前からこの古墳出土と伝わっているものはない。

出土遺物や埋葬施設の形状から、この古墳は古墳時代前期に造られたものと考えられる。

#### 灘区その他の遺跡

灘区内には、すでに消滅して形をとどめない古墳がいくつかある。

篠原南町には、かつて鬼塚と呼ばれる小規模な円墳があった。この古墳の埋葬施設は、玄室の長さ約三メートル、幅約二メートルの片袖式の横穴式石室であり、内部からは、人骨や土器、刀、釘、勾玉などが出土したという。

また、石屋川上流部にある、一王山十善寺西側の尾根付近には、多くの群集墳が存在していたようであるが、その一基からは銅鏡、多数の玉類、鉄製武器、工具などが出土している。このうち、銅鏡には卍字形鏡と四獸鏡があり、いずれも小型の仿製鏡である。

その他、いくつかの古墳が存在していたようであるが、宅地造成や市街地化のためにほとんど消滅してしまい、詳細は不明である。



図 166 滝ノ奥遺跡出土有茎尖頭器

さらに滝ノ奥遺跡は、六甲南麓の都賀川東岸、坊主山より南へ派生する丘陵部の標高一五〇メートル付近に位置し、これまでも平安時代の寺院址や弥生時代の遺跡としても知



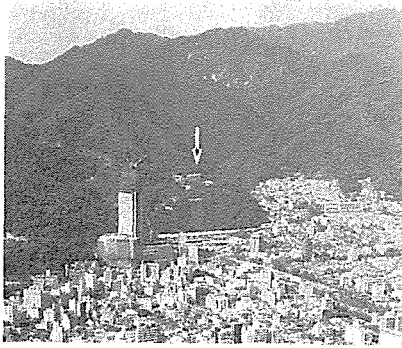


写真 148 布引丸山遺跡遠景

られていたが、昭和五十五年および六十年の発掘調査では、旧石器時代終末期のサヌカイト製大形有茎尖頭器が、両度とも出土している。しかしこれに伴う時期の遺構は検出されなかった。

### 3 中央区の遺跡

#### 布引丸山遺跡

布引丸山遺跡は、布引の滝の東、新神戸駅の北側に位置する弥生時代の遺跡である。

その範囲は徳光院の境内、およびその南側の通称丸山あるいは砂山と呼ばれていた独立丘（標高約一四〇メ

ートル）一帯とみられる。大正年間より粘土採掘や納骨所の工事など

によって幾度か遺物が出土し、現在も徳光院には数十片の弥生土器が

保管されている。土器には壺・甕・台付鉢・高坏・器台などがあり、

ほかに石鏃なども出土している。

この遺跡も、その位置から荒神山遺跡、伯母野山遺跡などと同様、

六甲山地南麓部の丘陵上に点々と存在する高地性集落の一つと考えら

れる。

小林行雄はこの遺跡から発見された弥生土器を、「凹線文を有する

土器」として昭和十年に『考古学』に発表した。以後、弥生時代中期

の遺跡として知られるようになり、神戸を代表する遺跡の一つとなっているが、発掘調査が行われておらず詳細は不明である。

#### 生田遺跡

生田遺跡は、下山手通一丁目の市街地再開発のための、建設工事に伴う発掘調査によって確認された遺跡である。かつて生田の森と呼ばれていたであろうこの付近に、遺跡の存在することは予測されていた。

調査地は、約一八〇〇平方メートルで、現在では平坦に造成されているが、旧生田川の沖積地であり、遺構面は標高一一〜一四メートルでかなりの傾斜をもっている。この遺構面は、現地表より一メートルほど下であるが、おびただしい数の焼夷弾が突き刺さっていた。おそらく昭和二十年六月五日の空襲で、生田神社付近が焼土と化した時のものであろう。

発見された遺構は、五世紀末葉から六世紀末葉のものである。そのうち、五世紀末葉の遺構は、方形の竪穴住居で、北辺にはカマドを設けている。カマドの周辺からは、甕・高坏・コシキなどの土師器や製塩土器の細片が出土した。製塩土器の細片は、カマド内や吹き出された灰の中にも含まれており、おそらく散状塩（焼いて乾燥させた塩）にするために用いたものと考えられる。この時期、一般的



写真 149 生田遺跡カマドのある住居址

には須恵器も使用されているが、住居内からはまったく出土しなかった。

同時期の竪穴住居と考えられる遺構がもう一基存在し、床面には灰・炭が堆積していたが、後世の攪乱で明確ではない。

次に、六世紀代の遺構にも竪穴住居が存在するが、後の遺構によって大きく削られ、全体の形は方形で、北辺にカマドをもつこと以外は確認できなかった。この時期の主要な遺構は、掘立柱建物で、二時期にわたって構築されている。柱掘形は、いずれも大形で、四〇～七〇センチメートルの方形ないしは長方形である。また、柱穴も径三〇センチメートルと大型である。

建物は、二間×三間あるいは三間×四間で、整然と配置されており、柱規模と考え合わせると、居館に伴う倉庫群と考えられる。

出土遺物のうち特殊なものとして、掘立柱建物の柱穴の一つから白玉、有孔円板、紡錘車などの滑石製品が出土している。先の五世紀末葉の竪穴住居址のカマド内や、攪乱で明確でなかった遺構内の炭・灰の中からも、製塩土器とともに白玉が出土している。最近では、五・六世紀の竪穴住居址内から滑石製白玉が出土することはさほど珍しいことではないが、カマド内からの出土は、その使用方法から考えて特殊である。カマドにおける焼き塩と滑石製品の取り合わせから、何らかの祭祀が予想できよう。

『日本書紀』神功皇后の条に、生田神社の創祀に関連して「活田長峽国」という記事がみえるが、それとの関連については全く不明である。

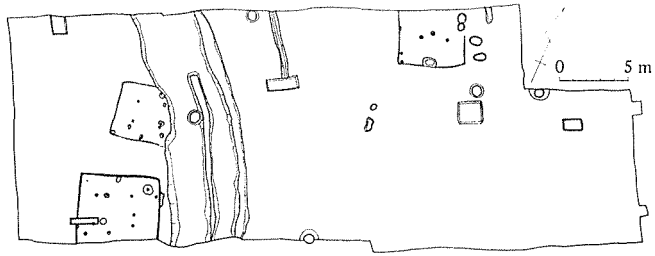


図 167 日暮遺跡遺構配置図

### 日暮遺跡

日暮遺跡は従来、遺跡の分布が明確でなかった市街地内で発見された遺跡で、日暮通一丁目の海岸に近い段丘上に位置している。

昭和六十一年度に、市営住宅建設に伴って実施した発掘調査では、古墳時代中期の竪穴住居二棟、竪穴住居状遺構一カ所、土坑、ピットなどを検出した。また、平安時代後期から末期の掘立柱建物一二棟、土坑、溝、鎌倉時代から室町時代、近世から明治初めにかけての溝などを確認した。

古墳時代の竪穴住居址は、一部を中世の河道で削られたり、調査範囲外に延びたりしており、完全な形で検出できたものはないが、一辺四メートルから六メートルの方形状を呈している。柱はいずれも四本柱である。なお、住居址内には竈は確認されなかった。住居址内の堆積土中には、土師器甕、壺、高坏などが多く出土した。また、竪穴住居状遺構は、一辺四メートルから五メートルの方形で、内側にピットを検出したが、まとまりはみとめられない。しかし、遺物の出土状況が先述の竪穴住居址に似ていることや、その形状に

より、竪穴住居址であった可能性が高い。

### 雲井遺跡

雲井遺跡は六甲山地南麓を流れる生田川によって形成された扇状地上の、標高一〇〇〜一二メートルの緩や



写真 150 左 雲井遺跡弥生時代木棺  
右 同縄文晩期土器棺

かな傾斜地に位置する縄文時代前期から弥生時代中期までの複合遺跡である。

遺跡は、昭和六十二年、市街地再開発事業に先立つ試掘調査により発見されたものである。引き続き本格的な発掘調査を実施し、数多くの遺構を検出するとともに、多くの遺物が出土した。

発見された遺構は、縄文時代前期の屋外炉四基、縄文時代後期の集石遺構一基、縄文時代晩期から弥生時代前期までの落ち込み遺構や柱穴・土坑、それに弥生時代中期の方形周溝墓六基である。

縄文時代の屋外炉は楕円形に地山を掘りくぼめたもので、周辺部は赤く変色したものがあほほか、底の付近には、焼け残った木材が炭化して遺存していた。

集石遺構はこぶし大から人頭大の河原石を積み重ねるようにして組んだもので、使われた石には火熱による変色や煤の付着などは認められなかった。

また、縄文時代前期の土器や石器は、数メートルの範囲に密集して発見され、この付近に当時の集落が存在したものと考えられる。

縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構群は、同一の状況で発見されており、時期的に分離することは不可能である。しかし、土器がまともに出て出土した落ち込み遺構では、弥生時代前期後半のものだけを出土して



写真 151 雲井遺跡周溝墓全景

おり、時間的な幅があるものと思われる。

縄文時代の遺物は主に土器と石器類である。縄文土器は前期初頭の羽島下層Ⅱ式土器、中期の船元式土器、後期中葉の北白川上層式土器や晩期終末の突帯文土器などである。縄文時代の石器としては石鏃のほか、異形石器、磨製石斧、打製石斧、スクレイパーなどが出土している。

弥生時代中期の方形周溝墓は、周溝の一部を共有して、相接して構築されている。周溝墓は一辺数メートルから一〇メートル前後の方形または長方形のもので、周溝に囲まれた中央部には各一基に一つの墓壇があり、木棺をおさめている。木棺はすでに腐り、多くは痕跡をとどめるのみとなっていたが、一部には底板が遺存するものもあった。また、周溝にも小型の木棺を埋めたものがあるほか、埋葬の際の祭祀に使用されたと思われる土器が、各溝に二、三個供えられていた。

弥生時代前期の土器の多くは、その後半期に属するものであるが、前半期と思われる木葉文で飾られる壺形土器の破片が二点出土している。

周溝墓に供えられた土器は総数で五〇個を少し越える。时期的にはすべて中期後葉に属するもので、長頸壺形土器が最も多く、広口壺形土器、甕形土器、高坏の順になる。

これらの土器の中には西播磨地域からの搬入品があるほか、多くのものに西播磨的な技術や装飾的共通点をもつものが含まれている。

#### 宇治川南遺跡

宇治川南遺跡は、六甲山地南麓を南に流れる宇治川の右岸段丘上の、標高一〇〇〜一五メートルに位置する縄文時代早期から鎌倉時代に続く複合遺跡である。遺跡周辺が市街地のなかにあるためその広がりについては不明である。

遺跡発見の契機は、昭和五十七年市営楠住宅四号棟の建設に先立つ試掘調査によるものである。主な遺構としては、弥生時代中期の小型木棺墓群と前期の平地式住居、古墳時代中期の溝などがあげられる。

遺物は段丘裾の旧河道から発見された縄文土器と弥生前期の土器である。これらの土器は、出土状況から三つのグループに分けることができる。一つは段丘崖下に沿うように流れる小河川の中から弥生時代前期の土器と混在して出土するもの、次に旧宇治川の河道内の中洲上から発見されたもの、そして旧宇治川の堆積層に含まれて出土するものである。堆積順位は小河川内のものが最も新しく、旧宇治川河道内のものが最も古くなる。小河川内のは、主に晩期末の突帯文で、弥生時代前期の土器と混在して出土しており、遺存

状態は良い。中洲上から発見される土器は、晩期前半の時期のもので、石器類などの生産用具を伴って発見されている。旧宇治川河道内からの出土遺物は早期から晩期までのものが発見され、遺存状態も悪く摩耗をうけている。

これらの土器のうち最も古いものは早期前半の押型文土器である。これに続く早期末から前期の土器の出土はないが、中期以降は後期・晩期までほぼ連続して遺跡は継続したものと思われ、各時代の土器が出土している。

多くは近畿地方の特徴を備えた土器であるが、後期初頭から中葉と晩期の前半期に、関東地方や東北地方の土器の特徴をもつものが混じって発見されている。また、晩期前半の時期には大分県姫島産と思われる黒

曜石が出土している。

特に、晩期後半の突帯

文土器は出土量も多く、

三ノ四型式に分類ができ、

時期や地域性を表わすもの

と考えられる。この時期

の土器には生駒山地西

麓地域で制作されたもの

が搬入されている。また、

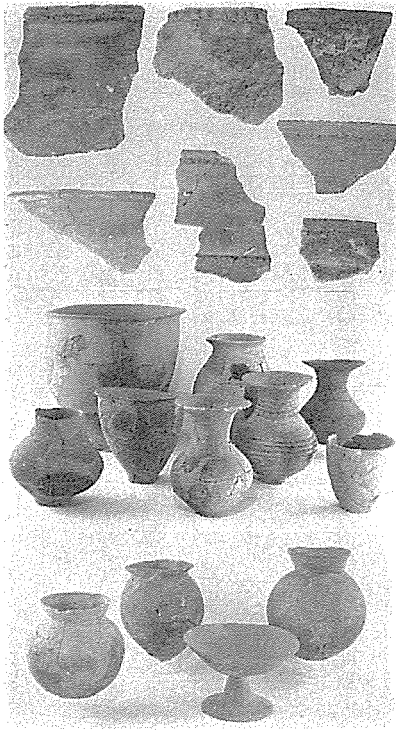


写真 152 上 宇治川南遺跡出土縄文  
時代晩期土器片  
中 同弥生時代前期土器  
下 同古墳時代土器



突帯文土器とともに出土した土偶や石棒は、当地域の縄文時代の祭祀にかかわる遺物とみられ、縄文文化の研究上、貴重な資料が多く含まれている。

弥生土器は、すべてが前期に属するもので、前半期から後半期のものまでであるが、量的には後半のものが多し。弥生土器にも、生駒西麓地域から搬入された土器があるが、その量はわずかである。

こうした遺物の状況から、縄文時代に関東地方から九州地方にまで及ぶ広い地域との交流があったことは明らかである。

また、縄文時代晩期の突帯文土器と、弥生前期の土器の中に占める生駒西麓地域の土器の比率の変化は、採集社会から農耕社会に変化する中で、社会変化の表われとも考えられ、当遺跡の発見の重要性を示している。

#### 中央区のその他の遺跡

中央区は、早くより市街地化が進み、すでに消滅してしまった遺跡も少なくないため、実態が明らかになっ  
っているものは数少ない。

まず、弥生時代の遺跡としては、布引丸山遺跡のほかに旧三ノ宮駅構内遺跡や浜町遺跡などがあげられる。また、神戸大学附属病院内より、工事中に大型蛤刃石斧が発見された。その後、神戸大学や兵庫県教育委員会により発掘調査が実施され、弥生時代の石鏃なども出土している。

一方、古墳に関しては、すでに大半が消滅しているが、その存在が伝えられているものに次の古墳がある。現在の山本通五丁目一帯には、横穴式石室を埋葬施設とする中宮古墳をはじめ、その他三基の古墳のあっ

たことが知られている。北野町三丁目には、南に開口する横穴式石室をもつ三本松古墳が存在していた。また、旧生田川周辺にも、数基の古墳が以前に存在していた。脇浜町周辺にも、前方後円墳である脇浜乙女塚をはじめ、横穴式石室をもつ後期の円墳である割塚古墳など、数基の古墳が存在していた。いずれの古墳も後世の削平を受け、消滅したものが多く、周辺の地形も著しく改変を被っており、ほとんど旧状をとどめていない。

#### 4 兵庫区の遺跡

##### 楠・荒田町遺跡

六甲山地南麓には、所々に段丘がみられる。この遺跡も標高一〇〇～一六メートルの中位段丘面上に立地している。段丘の東西両側は緩扇状地性低地で、遺跡の広がりには認められない。また、緩やかな傾斜地を南に下ると、海岸までさほど遠くはなかったであろう。

遺跡の発見は、神戸大学医学部付属病院内で、工事中に大型蛤刃石斧が採集されたことに始まる。その後、神戸市営地下鉄建設やビル建設に伴う昭和五十三年以降の発掘調査によって、遺跡の実態は明らかになりつつある。

現在までの発掘調査の成果から、この遺跡は縄文時代後期に開始することが確認されている。遺構の密度は希薄であるが、宮滝式期の良好な資料が出土している。

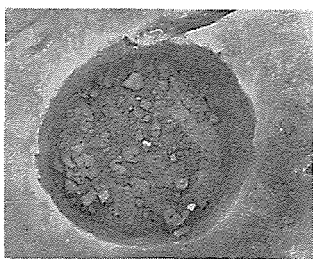


写真 153 楠・荒田遺跡貯蔵穴

この遺跡を最も特徴づけるのは、弥生時代前期末および中期初頭の貯蔵穴である。これまでに四十数基が検出されているが、断面形がフラスコ状のものは存在せず、円筒形が主流である。またその規模は、径・深さともに一メートル前後で、関門地方のそれらに比べ小形である。貯蔵穴内からは、土器類のほか、廃棄された鹿・猪などの獣骨、タイ・ハモ・サバ・スズキなどの魚骨、ドングリ類、炭化米粒など当時の食生活復元に貴重な資料が出土している。

方形周溝墓や木棺墓がみられる。したがって、前期末から中期初頭にかけては貯蔵穴の群集する地区、中期中葉には居住区、中期後葉には墓地区へと変質していったことがうかがえる。しかし、その後また居住区となり、弥生時代末や古墳時代後期の竪穴住居もみられる。

奈良・平安時代の遺構は確認されていないが、平安時代末から鎌倉時代にかけての掘立柱建物が認められ、福原京や平氏一門との関連が考えられている。

出土遺物の中で最も多いのは弥生土器である。これらの土器は、その形態・文様などの特徴から、播磨地方の影響を受けた西摂地方の土器であることが判明している。しかし、これも時期によってその影響の受け

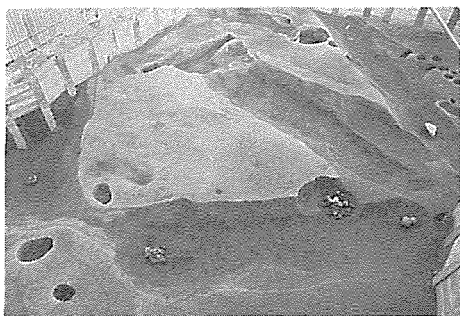


写真 154 同遺跡方形周溝墓

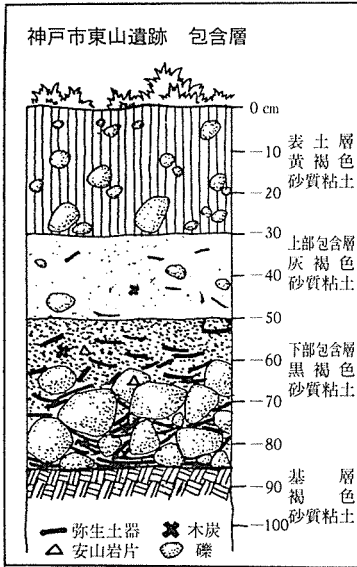


図 168 東山遺跡遺物包含層  
「神戸市東山遺跡弥生式土器研究一」  
一部改変

方が異なり、前期から中期初頭では播磨的色彩が濃く、中期後半には薄くなっている。また、紀伊産の甕、和泉産の壺、生駒西麓産の壺・鉢などが搬入され、当時の交流の広さを物語っている。

石器では、石鏃・石錐・石槍・石庖丁などが出土している。石鏃は、前期で小さく中期になると大きくなり、中期末になるとさらに大型化している。

### 東山遺跡

この遺跡は、六甲山地から派生した会下山二本松を頂部とする、標高三〇メートル前後の丘陵上に位置している。東側三〇メートルには、かつて旧湊川が南流していた。遺跡の存在は古くから知られており、石鏃などの採集がすでに明治三十年（一八九七）に報告されている。昭和三年に小林行雄らによる試掘調査が行われ、昭和八年にその結果が報告されている。遺構は未確認であったが、遺物包含層が広い範囲にわたって

確認されている。この遺物包含層は、上部と下部の二層に分けられ、弥生土器や安山岩の細片が出土している。両層は下部包含層の土器が石塊とともに出土していることや、出土土器の量や大きさを別にすれば、遺物そのものに内容的な変化は認められないようである。

遺物には多量の弥生土器と若干の石器類

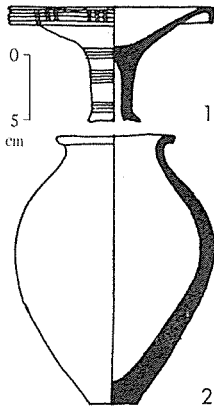


図 169 河原遺跡出土具輪を入れた壺

この遺跡が注目されるのは、この壺の中に四〇個余りの南海産の大形巻貝の一種テングニシ・アカニシ（現在はゴホウラ貝と考えられている）を切断して造った具輪が納められていたためである。この遺跡は、この二点の土器と納められた具輪が出土したのみであったため、小林行雄は遺跡中の特殊地点と意義付けている。

河原遺跡は、東山遺跡の北西六〇〇メートル熊野神社の西側にあり、段丘上に位置している。大正七年（一九一八）に住宅建設に伴い発見され、浜田耕作によって報告されている。出土したのは、弥生時代中期後半のほぼ完形の壺と脚部を欠損した高坏で、この高坏は壺の蓋として用いられていたものと推定されている。

#### 河原遺跡

弥生土器は中期中葉のもので、櫛描文や各種浮文で飾られた漏斗状の口縁を持つ細頸の壺を主体とする第一類（櫛目式文様土器）、広口壺を主体とし鉢や水差を含む第二類（精製無文土器）と第三類に分類し、この第一類土器と第二類土器が各地で共存する事実から、両者を弥生土器の一単位相と考察している。以後この遺跡の土器は、西撰地方の弥生時代中期を代表するものとされている。

石器は打製石鏃のほか、石槍が採集されている。採集品の石鏃のなかには、縄文的な特徴のある石鏃も含まれており注目されている。



写真 155 夢野丸山古墳出土重列神獸鏡

#### 夢野丸山古墳

六甲山地の西部、兵庫区北山町の西から延びる山丘の突端に位置する。標高は一一〇メートルを測り、南に神戸市街が広がる景勝の地にある。大正十二年（一九二三）に発見、調査された。

古墳は径二〇メートルほどの円墳で、埴輪の類は存在しないが、墳丘裾にはこぶし大の川原石を二、三段重ねた列石がめぐらされていた。さらに約二メートル下った墳丘の南側すなわち平野部に面する山丘の傾斜に同様の列石が確認されている。墳丘を大きく見せようとするために築かれたものであろうか。

埋葬施設としては長さ約七メートルの竪穴式石室一基が検出された。石室の壁面には板石を用い、控え積みには川原石が用いられている。

副葬品には、重列式神獸鏡・銅鏃・鉄鏃・直刀・剣・鎌・斧・鉞などがあり、土師器も出土している。副葬品の組み合わせは、古墳時代前期でも古い様相を示している。

#### 会下山二本松古墳

会下山二本松古墳は、標高約八五メートルを測る、兵庫区会下山の丘陵上にある。昭和二年（一九二七）の配水池建設工事に伴いその存在が知られ、竪穴式石室が調査された。石室は現長五・八メートル、最大幅一・三メートル、高さ一・〇八メートルで、粘土棺床上から銅鏡一、滑石製琴柱形石製品一、直刀三以上、



写真 156 会下山二本松古墳二段の葺石

劍身二、刀子二以上、鉄鏃二、鉄斧二が出土した。

昭和五十九年、配水池改築に伴い周辺を試掘した結果、南西部から古墳前方部と考えられる墳丘残存部が発掘された。葺石の残存状態は悪く、わずかに墳丘西下縁に巡る根石と、段築部に施された葺石が検出されたのみであった。この調査と、昭和二年当時作製された測量図とからみれば、古墳は全長五五メートル程度の前方後円墳と判断される。

#### 湊川遺跡

湊川遺跡は、旧湊川右岸の砂堆上に立地する遺跡である。昭和五十八年十二月、下沢通一丁目のマンション建設に伴って調査を実施した結果、土坑などが発見されたほか、古墳時代の須恵器、中世の土器多数が出土し、遺跡の存在が明らかになった。当時土器の出土状況と遺構の検出状況などから、遺跡の中心部は当地になく、むしろ北側にある弥生時代遺跡として知られた東山地区を中心とする地にあるものと推定されてきた。

昭和六十年四月、さきの調査地の西側にあたるマンション建設に伴う調査において、地表下一・六メートルから掘立柱建物四棟、竪穴住居七棟が新しく検出された。

掘立柱建物址には、東西棟建物二棟、南北棟建物二棟があり、南北



写真 157 湊川遺跡古墳時代遺構

棟建物は東柱をもつ総柱建物であると考えられる。このように棟方向の違う掘立柱建物があることについては、おそらく建物用途の差違によるものか、または時期的なずれによるものかであろう。

竪穴住居址七棟の方は、掘立柱建物が廃絶した後に造られている。それは竪穴住居址2が、掘立柱建物址4の柱掘形を切って、竪穴を掘り込んでいる点から明らかである。竪穴住居の時期は、原位置を保つ竪穴住居址1の石組遺構内から出土した須恵器碗および竪穴住居址7のかまど内出土の須恵器高坏・蓋の形態から六世紀後葉から七世紀前葉と考えられる。

一方、掘立柱建物の時期は、掘形内から遺物の出土がないため不明であるが、掘立柱建物の方が竪穴住居より古く、遺物包含層からは六世紀中葉に比定される須恵器蓋片が出土していることから、おそらく六世紀中葉をくだらない時期と推定できる。

こうした掘立柱建物が、竪穴住居に先行して集落内で用いられるという例は、この湊川遺跡だけでなく、長田区の神楽町遺跡や中央区の生田遺跡でも確認されており、何らかの理由によるものとも考えられる。しかし、この古墳時代における比較的早い時期での掘立柱建物採用の理由となると、各集落の性格に起因するものか、この地域の地理的条件によるものかは、なお不明で、今後の検証をまたねばならない。



第一節 六甲山地南麓の遺跡

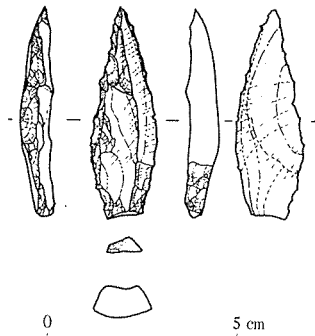


図 170 会下山遺跡出土ナイフ形石器

兵庫区その他の遺跡

河原遺跡の西方、標高七〇メートル前後の丘陵斜面に、昭和六年（一九三一）小林行雄によって確認された熊野遺跡がある。この遺跡は、道路工事の際に弥生時代中期後半（第Ⅲ様式～第Ⅳ様式）の遺物包含層が確認されたもので、その広がりには河原遺跡にまで続くものと推定されている。遺物包含層からの土器の出土量は、多くはなかったが、遺構としては堅穴群が検出されており、住居址の可能性のあるものも含まれている。

この遺跡の南、標高七〇メートルの会下山の丘陵上に位置する会下山一本松遺跡では、弥生時代第Ⅳ様式の土器と石鏃が採集されている。同じ丘陵上の会下山遺跡からは、旧石器時代のサヌカイト製国府型ナイフ形石器が採集されている。

平安時代に平清盛の雪の御所が存在していたと伝承のある、湊山小学校内の調査では、平安時代の遺物とともに弥生時代終末ごろの土器と古墳時代後期末ごろの土器が出土している。遺構などは確認されなかったが、付近に集落が存在していたものと推定されている。

旧湊川流域の沖積地では、湊川遺跡・三川口町遺跡などが調査されている。三川口町遺跡は、兵庫津遺跡に隣接した中世から近世にかけての遺跡であるが、調査された中世から近世の旧河道内から、縄文時代晩期後半の深鉢片が出土している。また、弥生時代前期から中期の土器も出土しており、付近の集落遺跡から流れ込んだものと推定されている。

また、湊川河口に近い兵庫津遺跡からも古墳時代の遺物の出土が知られており、いち早く市街地化された地域にも多くの遺跡が埋没していることを物語っている。

## 5 長田区の遺跡

### 林山古窯跡

現在までに、神戸市内において確認された古墳時代の須恵器窯跡は、長田区林山町の林山古窯跡と西区押部谷町の藤原橋古窯跡の二カ所にすぎない。

林山古窯跡は『日本書紀』に記載のある長田神社の北西で、苅藻川右岸の高取山東麓の尾根中腹に位置している。古窯跡の実態は発掘調査が実施されていないためはっきりしないが、かなりの数の須恵器破片とともに、炭や窯壁と考えられる粘土塊が採集されており、窯跡と考えられる。採集された須恵器には、坏・甕はらなどがあるが、広い口径と短く斜め内側に立ち上がる受け部をもつ坏の特徴から六世紀後半に操業した古窯跡と推定される。この時期には周辺に観音山古墳をはじめ多くの古墳が築造されているし、やや時期はさかのぼるが、柵に囲まれた建物群址の松野遺跡、竪穴住居数棟を検出した神楽町遺跡などが知られており、この林山古窯跡との関連が注目される。

### 長田神社境内遺跡

長田神社境内遺跡は、会下山から西へゆるやかに広がる丘陵の末端近く、苅藻川左岸沖積地に位置してい



写真 158 長田神社境内遺跡弥生時代六角形住居址

る。大正十三年（一九二四）に神社が焼失し、その再建工事の際、この遺跡は発見された。

その後昭和六十二、三兩年度の市街地再開発事業に伴う調査では、弥生時代の自然河道を挟んで北と南の両側で遺構が検出された。

南側では、弥生時代後期後葉の六角形竪穴住居・隅円長方形竪穴住居各一棟、壺棺墓一基、溝一条が検出された。六角形住居址は径九メートルに達する大形のもので、床面壁沿いに幅一メートル、高さ一五センチメートルのベッド状遺構が設けられていた。隅円長方形住居址は、東西五メートル、南北四メートルのもので、この住居址が完全に埋まる直前に投棄されたとみられる焼成後に穿孔された完形の壺を含む土器片が出土した。壺棺墓は二重口縁壺を棺に転用したもので、蓋に高坏が用いられていた。溝は、住居址の北方約二メートルにあり、幅五メートル深さ〇・八メートルで、中から完形の土器が多数出土した。この溝の北は荻藻川旧河道で、縄文土器・弥生土器が出土し、この河道が埋まる途中では弥生時代後期中葉以降の土器がいくつかの小群を成して投棄されていた。

この河道の北側からは、縄文時代後期後葉の土坑一基、弥生時代後期後々末葉の方形竪穴住居二棟、掘立柱建物三棟、溝一条およびピット多数が検出された。縄文時代の土坑は四×三メートルの不整楕円形で、土器片と焼土塊が出土した。弥生時代の方形竪穴住居址は二棟とも一辺に

方形の張り出し部を付設するもので、うち一棟はベッド状遺構をもち、二回拡張されている。住居址の南西約十数メートルを隔てた南北溝からは、全長四・〇センチメートル、最大幅一・二五センチメートルの銅鏃が出土している。

### 三番町遺跡

三番町遺跡は、荻藻川左岸の標高約六メートルを測る沖積地上に立地している。

昭和六十二年の市営住宅事業に伴う発掘調査で、堅穴住居址、土器溜り、大溝などが検出された。堅穴住居址は、いずれも方形を呈し、そのうち、一边約四メートルを測る1号住居址からは、床面から少し浮いた状態で完形の土器類が出土している。大溝は幅三メートル、深さ一メートルのものと、幅四メートル、深さ一・五メートルのもの二条が検出され、溝中埋土内からは、多量の土師器類とともに、木製品、木の実、種子類や銅鏡なども出土した。銅鏡は、直径約五センチメートルの小型仿製鏡で、内側に四乳と鋸歯文が鋳出されている。また大溝埋没後の表面からは、牛馬や人の足跡が検出された。

住居址や大溝から出土した土器類は、須恵器出現以前の土師器類で、古墳時代中期のものと考えられる。

### 神楽遺跡

神楽遺跡は、六甲山地西部を南流する旧荻藻川（新湊川）の下流西岸扇状地上の標高約四メートルの微高地に立地している。

昭和五十四年（一九七九）、神戸市高速鉄道建設工事に先立つ遺跡確認調査で発見された。その後、保育所改築工事などに伴う発掘調査により当遺跡は、古墳時代中期後半から後期および平安時代中期の集落址であ

第一節 六甲山地南麓の遺跡

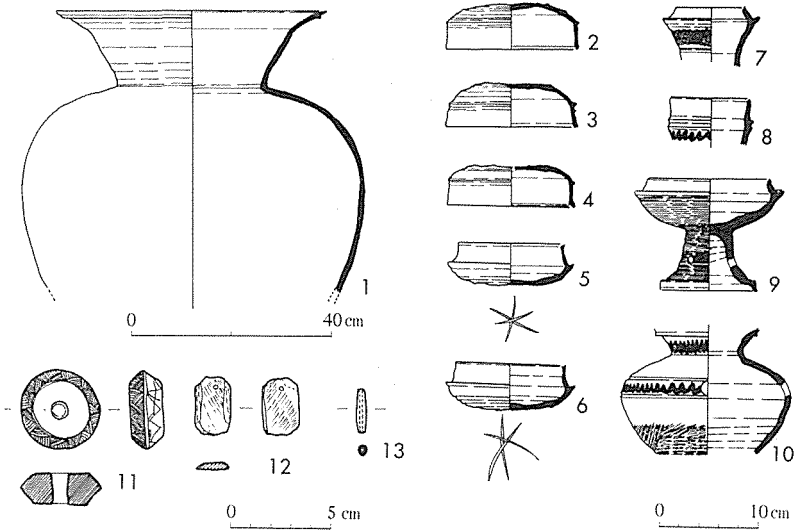


図 171 神楽遺跡出土土器・石製品

1～10須恵器 11滑石製紡錘車 12滑石製裝身具 13滑石製管玉

ることが判明し、その実態は、次第に明らかになりつつある。

これまでの発掘調査で、古墳時代中期の掘立柱建物一棟、竪穴住居一棟、古墳時代後期の掘立柱建物一棟、竪穴住居五棟が検出されている。その他、弥生時代中期から後期の溝をはじめ、古墳時代中期から後期にかけての土坑・溝・ピット、さらに平安時代の溝・ピットなどが検出された。

出土遺物は、弥生時代中期後半から後期の土器、古墳時代中期後半から後期の須恵器・土師器のほか、滑石製紡錘車や結晶片岩製紡錘車、滑石製管玉、滑石製装身具などが出土している。

また、平安時代中期の須恵器、土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器なども出土しており、これらの土器の中には「東福」と書かれた墨書土器が数点みられる。

特筆すべきものとして、古墳時代中期後半から

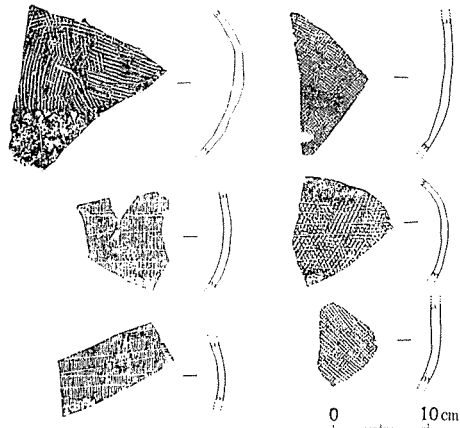


図 172 韓式系土器拓影

中期末にかけての掘立柱建物および土坑・溝などから出土した約五〇点の「韓式系土器」がある。

「韓式系土器」とは「朝鮮半島からもたらされた土器、あるいは、その影響下で渡来人および在地の者が日本で製作した土器」をさす。

神楽遺跡で出土した韓式系土器は、二種類あり、一つは、青灰色を呈する硬質の「陶質土器」で、もう一つは、赤褐色を呈するやや軟質の「軟質土器」である。

土器の外面には、格子目叩き、たた平行叩き、縄蓆文などの叩き目が施されている。

韓式系土器は、神戸市内では神楽遺跡のほかに、吉田南遺跡、吉田第4地点遺跡、念仏山古墳、郡家遺跡、森北町遺跡から出土している。

また、古墳時代中期後半から中期末の溝状遺構から出土した滑石製紡錘車は、断面形がソロバン玉形を呈し、外面に鋸歯文を施している。

ソロバン玉形紡錘車は、八尾南遺跡(大阪府八尾市)、長原遺跡(大阪市)、陶邑・深田遺跡(大阪府堺市)、土師の里遺跡(大阪府藤井寺市)、宮山窯址(香川県)などからいずれも初期須恵器に共伴して出土しているが、すべて材質が須恵質であり、滑石製のものは、現在のところ類例がない。

弥生土器には、壺、甕、高坏、鉢などがある。須恵器は、坏蓋、坏身、高坏、大甕、甕、器台、大形甕、長頸壺などがある。土師器は、壺、甕、高坏、甗こしき、皿、坏、土釜、鍋などがある。

また、黒色土器の碗、緑釉陶器の碗・皿、灰釉陶器の碗・皿のほか、土錘や多量の製塩土器も出土している。

長田区その他の遺跡

苅藻川左岸の段丘上に名倉遺跡がある。ここには平盛俊塚があるが、この付近から縄文土器片が一点採集されたことが、昭和五年直良信夫により報告されている。この土器は、関東地方の土器の影響を受けて製造されたと考えられ、縄文時代中期末ごろの土器と推定されている。その後、縄文土器の出土は知られていないが、土器とともにサヌカイト製の石鏃も採集されており、この付近に縄文時代の生活の場があったことがうかがわれている。

名倉遺跡から苅藻川をやや下った左岸の沖積地に五番町遺跡・長田神社南遺跡がある。この両遺跡は、神戸市高速鉄道の建設に伴い確認された遺跡である。五番町遺跡では、縄文時代晩期後半の土器が土坑内などから出土している。五番町遺跡の西方に位置する長田神社南遺跡では、弥生時代後期の土器が出土している。旧苅藻川河口には、念仏山古墳が存在していた。一説によると、全長一八〇メートルの古墳時代中期の前方後円墳であったといわれている。埋葬施設などは不明であるが、外部施設として埴輪列を巡らせていたことが、出土した罎付の円筒埴輪などから推定されている。また、この周辺には雀塚・櫟塚くわんぼなどの後期古墳が存在していたことが知られている。雀塚の埋葬施設は木棺直葬であったと推定され、金環やガラス玉などが

出土している。これらの後期古墳の特徴は、海岸に近い低地に造営されている立地の点にある。このほかにも、後期古墳は苅藻川中流斜面地の大塚町の古墳や池田町の古墳群が知られているが、いずれも現在は市街地化の波にのまれてしまい、その痕跡をとどめていない。

## 6 須磨区の遺跡

### 松野遺跡

松野遺跡は、六甲山地から発する妙法寺川によって形成された、緩扇状地の一つに立地している。わずかに南へ傾斜しているが、標高は約八メートルである。遺跡の広がりにはさだかではないが、地形的には東側は緩やかな谷によって、南側は海岸線までそう遠くない距離であり、これらによって画されていたのであろう。昭和五十六年（一九八一）、市営住宅建設に伴う試掘調査によって、発見された遺跡である。同五十七年度に発掘調査を行った結果、柵に囲まれた六世紀初めの掘立柱建物群を検出した。

柵は二時期に分けることができる。時期によりその大きさは変わるが、第一次は東西約四八メートル、南北約四〇メートルの長方形区画である。第二次は東西約三九メートル、南北約三四メートルの長方形区画で、東側と北側が二重になっている。この区画の東と西の辺に並行して、幅二メートル前後の浅い溝が設けられている柵の南辺で、柵列が食い違っている部分が、入口と考えられる。

第一次の柵の中に掘立柱建物が四棟と竪穴住居一棟、第二次の柵の北側に掘立柱建物が三棟以上建てられ



第一節 六甲山地南麓の遺跡

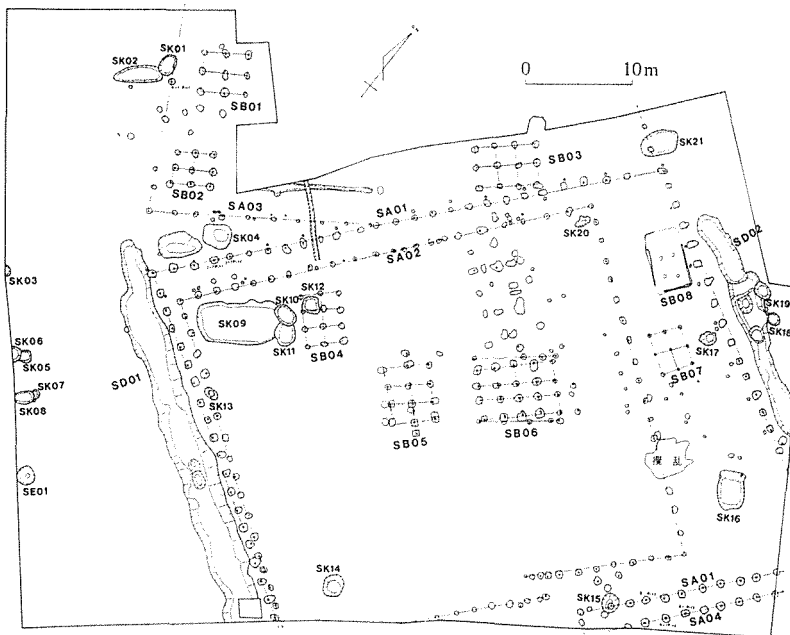


図 173 松野遺跡遺構配置図



写真 159 同柵西辺と区画溝

ていた。掘立柱建物はすべて総柱建物で、棟持柱をもつ建物が一棟ある。棟持柱をもつ高床建築は、他ではほとんど見つかっておらず、その建築様式は伊勢神宮本殿の祖型ともいえるもので、この遺跡の性格を考えるうえで重要な意味を持っている。

これら古墳時代の遺構とは別に、弥生時代前期の土器や、同後期の土坑・井戸など

も見つかっている。

#### 得能山古墳

得能山古墳とくのうやまは六甲山地横尾山から東にのびる山稜の突端に位置する。標高は五〇メートルを測り、南に平野部をのぞむ景勝の地である。大正十二年（一九二二）に発見、調査された。

本墳は明確な型の墳丘を造り出さず、山稜の突端に営まれた埋葬施設上に、低く土を盛っただけの古墳であつたという。埴輪や葺石は発見されていない。

埋葬施設は南北方向に主軸をもつ堅穴式石室である。工事中の発見であつたためそのほとんどが破壊され、調査の行われたのは北部分のみであつた。この部分の粘土床には被葬者の遺骨が残存しており、この被葬者は北枕で葬られていたことが確認された。頭骨の左右に接して画文帯神獸鏡と内行花文鏡が出土している。破壊された部分から出土した副葬品は鉄刀片以外は散逸してしまつたという。

#### 戎町遺跡

戎町遺跡は昭和六十二年三月、山陽電鉄板宿駅前で発見された遺跡である。妙法寺川の左岸、現地表で標高一四メートルを測る沖積地に立地している。

発掘調査の結果、現地表下〇・六〜二メートルの間に、次のような弥生時代の四時期にわたる遺構面が確認された。

弥生時代前期後半以前では、上層の河道によって東半が削平されているものの、畦畔による小区画の水田址が確認された。水田区画は三六枚あり、一区画の規模は最小一・三×二・五メートル、最大二・二×四・



写真 160 戎町遺跡水田址

三メートルで、平均面積は五・一五平方メートルである。この水田址は近畿地方でも最古の時期に属するもので、古代の稲作を考えていくうえで興味深い資料といえる。なお、プラント・オパール(植物の硝子質細胞)の分析調査報告によると、約三〇年間にわたって水稲耕作が行われていたとされる。

弥生時代前期後半では、土坑やピット、河道が確認された。河道の中からは、多量の弥生土器とともに未製品を含む広鋏などの木製品や磨製石庖丁などが出土している。また、河道の埋没が中断した時期に作られた円形杭列遺構が六基ある。この遺構は、各地での検出例から木製品を貯蔵しておく施設と考えられる。

さらに、弥生時代中期では竪穴住居址、溝、ピットなどの遺構密度が非常に高くなる。遺物も豊富で、多量の弥生土器とともに磨製石庖丁、磨製石斧、石鋏や軽石製浮子などの石製品が出土した。

弥生時代後期末では、土坑やピットが若干確認されている。

#### 鷹取町遺跡

鷹取町遺跡は、妙法寺川下流の東岸に位置し、標高約四メートルを測る、妙法寺川によって形成された扇状地先端の微高地に立地している。

昭和六十二年に郵便局建設に先立って、実施された発掘調査で古墳時代前期・後期の集落址が検出された。

調査地点のほぼ中央には幅約一〇メートルの川が流れており、遺構



写真 161 鷹取町遺跡全景

面を二分している。この川の中からは、古墳時代後期の製塩土器などが出土している。

古墳時代前期には、川の東岸に土器棺墓や柱穴があつて、集落の縁辺部にあたるとみられ、川の西岸には水田が広がっていたと考えられる。

続く、古墳時代後期では、川の西岸の微高地上に堅穴住居四棟と土坑などが営まれている。四棟の堅穴住居はいずれも方形で、カムドをもつものも一棟ある。このうち、最も規模の大きい2号堅穴住居址は、南北六・六メートル、東西五・四〇五・八メートルあり、多量の土器とともに、鋳型状の土製品や砥石などが出土した。また、川の東岸では、顕著な遺構は確認されていないものの、さらに同時期の集落の範囲が広がるものと予想される。

#### 須磨区その他の遺跡

六甲山地の西端にあたる鉢伏山の中腹や山麓で、これまでに石鏃や須恵器が採集され、調査は行なわれていないが、鉢伏山遺跡と呼ばれている。

境川遺跡も、かつて、縄文時代早期の石鏃・石槍などが採集されたところである。

このほか、遺物散布地として、須磨浦公園、関守町、北町、若木町、神撫町、永楽町などが知られている。

第一節 六甲山地南麓の遺跡

また、盗人塚、名倉塚、潮見台、鉢伏山、牛塚、妙興寺境内、東須磨ゆうこう病院内などの名称のみを残す古墳や遺物の出土だけが知られる古墳もあるが、その位置や内容については不明である。

## 第二節 明石川流域とその周辺地域の遺跡

この地域は、六甲山地の西に続く標高一五〇メートル前後の丘陵地一帯で、比較的小規模な数本の河川が南流して、流域に平地を形成し、明石海峡に注いでいる。旧播磨国明石郡に属していた地域である。

明石川とその支流榎谷川・伊川はほぼ平行して流れ、それぞれの流域には河流に沿って平地が、丘陵裾には段丘が形成され、押部谷・平野、榎谷、伊川谷の各地区が成立している。明石川は河口付近の玉津地区で、榎谷川・伊川と合流し、やや広い沖積平地を構成して播磨灘に入る。この流域が西区の大部分を占めている。

明石川の西岸丘陵は、印南野と呼ばれた段丘に続いていて、神出地区はこの段丘上に位置し、雄岡山・雌岡山がある。

塩屋谷川・福田川・山田川は、三〜六キロメートルほどの小河川であるが、いずれもその流域には谷底平地が形成され、この地区が現在垂水区に属している。

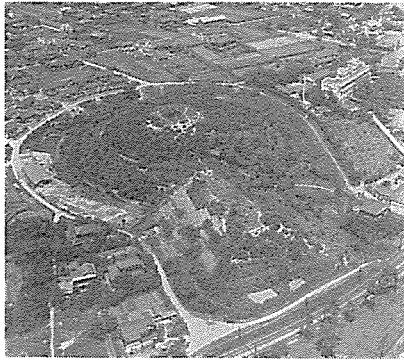


写真 162 復元整備前の五色塚古墳

1 垂水区の遺跡

五色塚古墳・小壺古墳(史跡)

五色塚古墳、小壺古墳は、須磨から明石にかけての海岸線が最も南に突出した地域に存在しており、垂水丘陵南麓の台地突端に造られている。五色塚古墳の墳頂上からは、近くに明石海峡と淡路島を、遠くに大阪湾や紀伊半島を望むことができる。

五色塚古墳は、県下最大の前方後円墳で、小壺古墳は、県下最大の円墳である。この二つの古墳が、国の史跡に指定されたのは、大正十年十月三日である。戦争中、戦後に二つの古墳が畑として使用されたため、墳丘は著しく傷められていると考えられていた。昭和三十年代には五色塚古墳の濠を埋め、建物を建てようとする動きが起ころなど、古墳の周辺にも開発の波がおよぶようになってきた。昭和四十年(一九六五)になって、国と神戸市が史跡環境整備事業の一環として、遺跡の公園化を図る目的で、全国で最初の大形前方後円墳の復元に着手した。昭和五十年三月に復元工事は完成し、現在では、全国から見学者が訪れる古墳公園として有名になっている。

復元に必要な資料を得る発掘調査を実施した結果、五色塚古墳は、予想に反して残存状態がよく、小壺古墳の方が、畑を造る際に著しく傷められていることがわかった。

五色塚古墳は、墳丘の全長一九四メートル、後円部径一二・五メートル、くびれ部幅六六メートル、前方部幅八一メートル、後円部の高さくびれの堀底の高さを基準にして一八メートル、前方部先端の高さ一一・五メートルの前方後円墳である。墳丘は、三段に築かれ、各斜面には、石が葺かれている。上二段の斜面に葺かれている石は、径一五～三〇センチメートル程度の円礫で、花こう閃緑岩が多く使用されている。この石がどこから運ばれてきたか、現在、明確になしえていないが、『日本書紀』には、赤石（明石）に墓を造るとき淡路島から船で石を運んだという記事があるところから、淡路島の石を運んだという人もいる。しかし、垂水海岸の護岸工事の際に、この石が採取されているので、古墳築造当時には、垂水海岸で採ることのできた石であった可能性もある。下の段に葺かれている石は、径五～一〇センチメートル程度の円礫で、垂水礫層に含まれる礫を使用したものと考えられる。

墳丘全体で使用されている石の数量を推定するため、数カ所で一平方メートル当りの個数と重量を計測した結果、上二段の平均値は、個数七〇個、重量二二〇キログラムで、下の段は、個数二四〇個、重量八〇キログラムであった。この結果から古墳全体では、個数二二三万三五〇〇個、重量二七八四トンと推定できる。また、墳丘上には、埴輪が立て並べられている。埴輪は斜面と斜面の間の小段と墳頂に、一〇メートルに一八本の割合で立てられている。墳丘全体では、二二〇〇本になると推定される。五色塚古墳に使用されている埴輪は、円筒埴輪、鱗付円筒埴輪、鱗付朝顔形円筒埴輪、蓋形埴輪である。





写真 163 復元整備中の五色塚古墳

五色塚古墳の周囲を巡っていた堀は、その一部を埋めて道路が造られているため、幅を明確にすることはできていないが、空堀であったことがわかっている。堀を含めると二〇〇メートルを超える規模の大型前方後円墳となる。堀の中には、東のくびれで一カ所と後円部の東側で一カ所、島状に造られたものが発見されている。また前方部の南側では、堀を埋め陸橋状に造った遺構、すなわち墳丘と周濠の外とを結ぶ通路のよ

うな遺構が、発見された。東のくびれのは、埋葬施設もなく祭壇のような機能をもっていたものと考えられる。後円部の東側のものは、埴輪を転用した棺が埋められ、埋葬することを考慮して造られたと考えられる。前方部の通路状のものは、堀を埋めて造られていることから、築造後に造ったと考えられ、祭祀に関する施設の可能性が高い。

復元に伴う調査で得られた成果の概略は、以上のようなものであるが、調査の目的が復元に必要な外部施設のみの調査であったため、埋葬施設の調査は行われなかった。そのため、築造年代を明らかにするには、資料不足であるが、墳形や埴輪などから四世紀の終わりにあつた五世紀の初めに造られたと考えられる。

小壺古墳は、五色塚古墳に接して西側に造られており、直径六七メートル、高さ九メートルの円墳である。墳丘は、二段に築か

れているが、五色塚古墳の斜面のように、石は葺かれていない。墳丘上には、五色塚古墳と作りがよく似た埴輪が、斜面と斜面の間の小段と墳頂の二段に立て並べられている。立てられていた埴輪の数は、二三〇本と推定される。埴輪の種類は、五色塚古墳と同じであるが、五色塚古墳で見つからなかった家形埴輪が三體体分出土している。小壺古墳の築造年代は、埴輪から見るかぎり、五色塚古墳とほぼ同じ時期に造られたと考えられる。この二つの古墳の、どちらがさきに造られたかは、開発に伴うそれ以後の調査でも明らかにすることができていない。

復元整備は、これらの調査結果をもとにして、実施されたが、小壺古墳は、墳丘が道路敷まで広がっている部分が多く、二段の斜面を復元することはできなかった。そのため、墳丘を保護するように土を盛り、一段の斜面で仕上げた。

#### 歌敷山東古墳・歌敷山西古墳

五色塚古墳から西へ約五〇〇メートルの台地突端に存在していた古墳である。東古墳、西古墳とも、宅地造成によって昭和六年（一九三二）破壊され、現在は、見ることができないが、造成に先立ち調査が実施されており、記録によって知ることができる。

東古墳は、直径三五メートル、高さ三メートルの円墳であった。墳丘の上縁に円筒埴輪が立て並べられていたようである。埋葬施設は、長さ四・八メートル、幅一・二メートルの粘土槨で、副葬品は、棺の外から鉄製の剣、斧、刀子が出土している。粘土槨の中央部に既掘穴があり、盗掘にあった可能性はある。立て並べられていた埴輪の中には鱗付円筒埴輪が存在していた可能性が高い。また、粘土槨の南端にあたる墳丘上

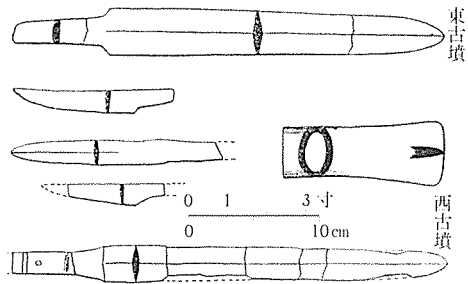


図 174 歌敷山西古墳出土鉄剣

から蓋形埴輪が出土したと記されている。

西古墳は、直径二〇メートルの円墳であった。埴輪は、墳丘の裾と墳頂に二重に立て並べられていたようである。埋葬施設は、長さ四・八メートル、幅八五センチメートルの粘土槨で、副葬品は、棺の中から鉄製の剣が一点見つかった。この古墳からも埴輪の鱗の破片や蓋形埴輪片が発見されているので、鱗付円筒埴輪や蓋形埴輪が立て並べられていた可能性が高い。

二つの古墳の造られた年代については、東西二古墳とも粘土床や埴輪の状態からみて、五色塚古墳とほぼ同時代のものとみてよかろうと、考える研究者もいる。

舞子浜遺跡

舞子浜遺跡は、五色塚古墳から西へ一キロメートルの舞子公園がその遺跡である。縄文時代の土器が発見されているが、表面採取によるもので、その実態は不明である。

また、昭和三十五年（一九六〇）に埴輪を棺に転用した円筒棺が発見され、中から四〇歳ぐらいのほぼ完全な男性の人骨が見つかった。その後、公園内から円筒棺が二つ発見され、また公園内に円筒棺が埋まっているものと考えられる。この円筒棺の年代は、五色塚古墳とあまりかわらない時期のものと推定される。

### 舞子古墳群

舞子古墳群は、舞子浜から北へ一・五キロメートル、山田川東岸の舞子丘陵上に存在する古墳群である。舞子丘陵は花こう岩の基岩が露頭する標高九〇メートル前後の丘陵で、南側に石谷、矢谷の二つの谷が入りこみ、その谷に向かっていくつかの小さな尾根が張り出している。

古墳は、この尾根上の東西一・五キロメートル、南北〇・八キロメートルの範囲に点在し、東から星陵台、舞子台、山田台、尼ヶ谷、東石ヶ谷、毘沙門、西石ヶ谷、東市ヶ坂、西市ヶ坂、大歳山の一〇支群に区分される。かつては、六〇基前後の古墳が存在していたが、現在は十数基残存するにすぎない。

舞子古墳群の発掘調査は、開発にともなって、昭和三十六年（一九六二）以降、大歳山、尼ヶ谷、東市ヶ坂、西石ヶ谷、東石ヶ谷、毘沙門の各支群の古墳について実施されており、これまでに調査された古墳の総数は一六基を数える。

これらの調査の結果、次のようなことが明らかになった。

舞子古墳群は、山田川に面する舞子丘陵の西側斜面と石谷に面する南側斜面に立地し、弥生時代の遺跡の上に築かれた古墳群もある。たとえば、大歳山、東石ヶ谷、毘沙門、舞子台の各支群の古墳群がこの例にあ



写真 164 西石ヶ谷 4号墳石室

## 第二節 明石川流域とその周辺地域の遺跡

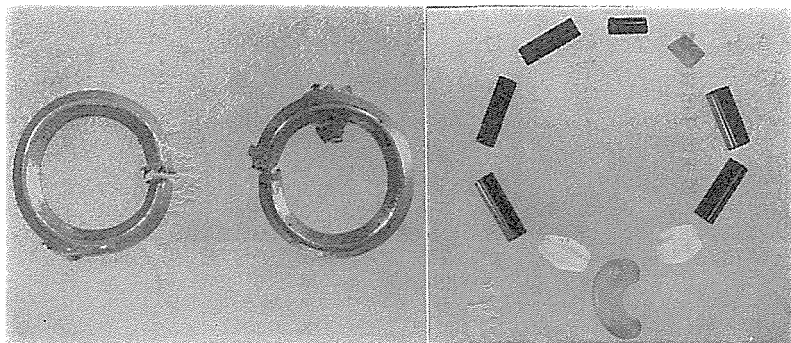


写真 165 舞子古墳群出土装身具 左 金環 右 勾玉管玉切り玉

たる。

墳形は直径一〇〜一五メートルの円墳が多いが、中には大蔵山2号墳のように全長三五メートルの前方後円墳もある。また、東石ヶ谷2号墳も未調査ではあるが、全長約二八メートルの前方後円墳の可能性が高い。

埋葬施設は、基本的には右片袖式の横穴式石室であるが、毘沙門1号墳のようにT字型の石室を持つものや西石ヶ谷2号墳のように無袖式石室もみられる。

舞子古墳群の築造時期は、これまでの調査によると毘沙門1号墳、西石ヶ谷4号墳が六世紀中頃、西石ヶ谷1号墳、東市ヶ坂2号墳、毘沙門2号墳などが六世紀後半で、この時期の古墳が最も多く、舞子古墳群築造の最盛期といえる。そして六世紀末〜七世紀初頭には終息に向かう。西石ヶ谷2号墳、東石ヶ谷1号墳などがこの時期の古墳である。

横穴式石室に埋葬された被葬者数は、西石ヶ谷2号墳が石室規模から二人、西石ヶ谷3号墳、4号墳が木棺痕跡・人骨の存在から三人、尼ヶ谷3号墳は五人、東市ヶ坂2号墳が出土した金環の数から四人以上と推定される。

舞子古墳群から出土した副葬品には、装身具の金環、碧玉製管玉、供献土器の須恵器、土師器、武具（胡籙、鉄鎌、刀）、馬具、棺飾金具などがある。特徴的なものとしては、大蔵山2号墳、毘沙門1号墳、西石ケ谷4号墳から人物や動物をめぐらした装飾壺が出土し、西石ケ谷3号墳、4号墳、毘沙門1号墳、尼ケ谷2号墳からは馬具が出土している。また、副葬品がとくに豊富な毘沙門1号墳、西石ケ谷4号墳の被葬者は、有力者の一族と推定される。

舞子古墳群は、山田川をはさんで西の多聞古墳群と対しており、また北側で本多聞古墳群と接している。これらの古墳群を比較すると、第二神明道路北側の本多聞古墳群、多聞古墳群西脇支群は、五世紀後半～六世紀初頭の木棺直葬墳が主流であるのに対し、舞子古墳群や多聞古墳群（大塚ケ平、帝釈、たつか、朝霧、深谷支群）は、六世紀中葉～後半の横穴式石室墳が主流であり、規模、内容とも非常に類似している。これらの点から舞子古墳群は、多聞古墳群を含めた山田川流域の古墳群という広い視野の中でとらえる必要がある。舞子古墳群の築造者については、近年、明石川中、下流域の集団に求める見解が提起されている。山田川流域で、古墳時代集落址がこれまでに未発見であることを考えると、舞子古墳群の築造者を他所に求めることもありうることであろう。ただし最近、福田川流域の垂水日向遺跡で古墳時代後期の遺物が出土しており、明石川流域のみならず、福田川流域も舞子古墳群築造者集団の本拠地の一つに加える可能性が生じている。

#### 舞子東石ケ谷遺跡

舞子丘陵上では、昭和四十年代前半から弥生土器や石鏃が採集され、弥生時代遺跡の存在が推定されていたが、遺構の存在が具体的に明らかになったのは、昭和五十七年（一九八二）に東石ケ谷1号墳の発掘調査に

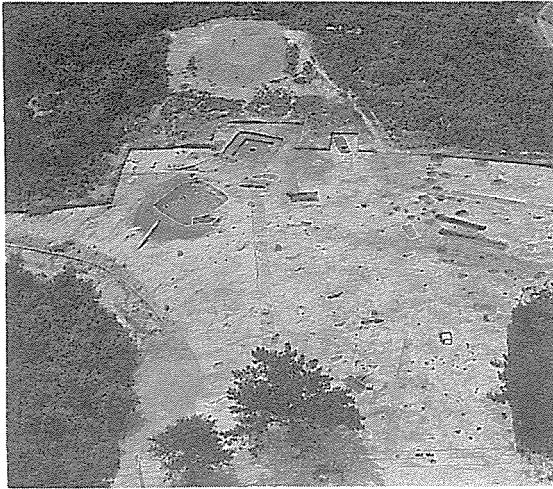


写真 166 舞子東石ヶ谷遺跡全景

伴って、弥生時代後期の竪穴住居が二棟発見されてからである。

その後、昭和五十九年に同一尾根上でさらに弥生時代後期の竪穴住居三棟が発見され、昭和六十一年にも毘沙門1号墳によって削平された弥生時代後期の竪穴住居一棟が発見された。

さらに最近の調査では、毘沙門1号墳の北で弥生時代中期の竪穴住居四棟、後期の竪穴住居四棟、平地式建物一〇棟、高床建物六棟などの存在が明らかになっている。

東石ヶ谷遺跡の東方三〇〇メートルにある舞子台の尾根上からも弥生土器、石鏃が採集されており、集落の存在が推定される。

舞子丘陵上の弥生時代集落は、中期に集落が形成され、後期になって増大する。低地との比高が約五〇メートルあり、いわゆる高地性集落の一つと考えられる。山田川をはさんで対岸の狩口台にも丘陵上に弥生時代後期の集落址が発見されており、同時期の舞子丘陵上の遺跡群との関係で注目される。

#### 投ヶ上銅鐸出土地

投ヶ上銅鐸は昭和三年（一九二八）十一月二十日ころ、瓦製造工場建設のための地ならし作業中に発見された、

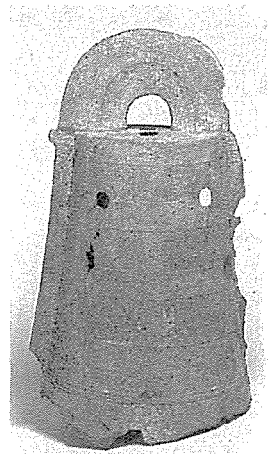


写真 167 投ヶ上銅鐸

扁平鈕式六区袈裟襷文銅鐸で、現在、東京国立博物館に所蔵されている。

がある。出土時の状態は、地表下約三〇〜六〇センチメートルに、底部を上鈕を下にして約三〇〜四〇度傾いていたという。

銅鐸は高さ五〇・九センチメートル、重量約三・四五キログラム。鈕は外側から二条の内行鋸歯文帯、綾杉文帯（菱環部）、内縁に連続の渦文帯を配置している。身は縦に三条、横に四条の斜格子文帯があり六区画につくられ、裾近くの横帯には内行鋸歯文帯が施されている。幅の広い鱗にも内行鋸歯文帯が施され、上端には一對の飾耳がある。また、内面凸帯は一条で、わずかに磨滅しているようにみえる。

#### 大蔵山遺跡

東西を丘陵に囲まれた山田川の下流部、明石海峡を広く望む標高三〇メートル余りの丘陵上に位置している。もとは東の舞子丘陵から西に延びる舌状の丘陵であったが、道路によって分断され現在は独立丘のようになっている。この丘の頂上部分を中心に旧石器、縄文・弥生、古墳時代におよぶ複合遺跡が営まれている。

大蔵山遺跡は大正から昭和初年にかけて、直良信夫によって調査研究され著名になった遺跡である。直良





写真 168 大歳山遺跡の方形竪穴住居址

は丘陵の頂上平坦部を中心に一〇年にわたり遺物の採集につとめ、また発掘調査を行って、大量の縄文土器と石器を収集、この縄文土器を「大歳山式土器」と名付けた。

大歳山式土器は口縁部や体部に粘土紐を貼りつけて特殊な爪形文を刻んだ深鉢形土器で、小林行雄や山内清男らによって縄文時代前期末の土器として位置づけられ、大歳山遺跡は近畿地方を代表する縄文時代の遺跡となっている。

直良の調査以後、昭和三十年代から四十年代にかけて発掘調査が数回実施され、この遺跡が旧石器時代から古墳時代まで続くものであることが明らかになった。これらの調査では旧石器時代のナイフ形石器、縄文時代早期末の条痕文土器、大歳山式土器より一時期古い北白川下層Ⅲ式の土器、そして縄文時代中期および晩期の土器とともに弥生時代前期の土器が出土し、丘陵の頂上部付近からは弥生時代後期の集落址や古墳が発見されている。しかしながら、縄文時代の遺構は全く検出されておらず、弥生時代以降に破壊されてしまったのであろう。

弥生時代後期の竪穴住居は頂上平坦部の縁辺を中心に五棟以上発見されている。そのうちの棟は大歳山遺跡の公園整備に伴い完掘された。一辺六・五メートルの方形住居で、ベッド状の遺構が四周に巡らされていた。四隅からは壺、甕、鉢、高坏、器台などの土器が五〇点以上も出土している。

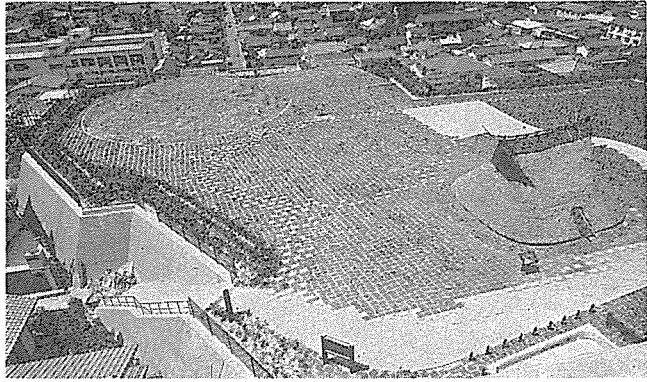


写真 169 大歳山遺跡あとの公園

る。このほかの住居も同様の方形住居と考えられている。また、西側の斜面からも堅穴住居一棟が発見されている。

平坦部南辺からは前方部を西に向けた後期の前方後円墳（全長約三五メートル、後円部径約二三メートル）が発見されている。後円部の中央部は盗掘を受けて大きくくぼんでいたが、埋葬施設は片岩系の偏平な石材と花こう岩礫を用いた横穴式石室と考えられ、付近から須恵器の裝飾付土器片が出土している。一メートル前後の盛土が残存しており、盛土には縄文、弥生土器を含む包含層が用いられていた。

この丘陵の最高所にも横穴式石室を埋葬施設とする直径約二〇メートルの円墳が築かれていた。この古墳の周辺部にはいくつかの埋葬施設があったようで、宅地造成工事中に木棺直葬墓の痕跡と考えられる遺構が発見され、鉄釘や裝飾付土器片が出土している。

また、この古墳の東側では封土を全く失った粘土礫の埋葬施設が発見されており、小形鏡、石釧、勾玉のほか多数の管玉とガラス小玉が発見されている。出土遺物などから四世紀後葉～五世紀初めごろの古墳と考えられている。

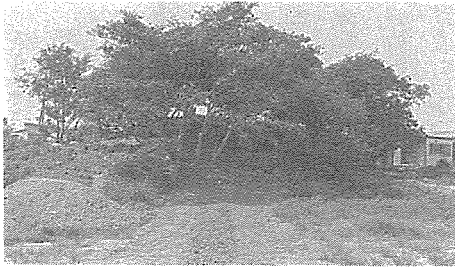


写真 170 狐塚古墳

このように神戸の代表的な遺跡である大蔵山遺跡は、残念なことに宅地造成による破壊を受け、頂上平坦部にある竪穴住居群と前方後円墳を残すだけとなっている。現在は遺跡あとが公園として整備され、一般に公開されている。

#### 狐塚古墳

狐塚古墳は、明石海峡を見下ろす標高四二メートルの丘陵上に築かれた古墳である。明舞団地のある多聞丘陵上には、かつて大塚ケ平15号墳、深谷1号墳など六〇基を越す後期古墳が存在したが、現存しているのは、この狐塚古墳を含め二基のみである。

狐塚古墳の調査は、昭和五十四年（一九七九）以降数回実施されており、その結果、両袖式の横穴式石室を埋葬施設とする直径二五メートル、高さ約四メートルの円墳で、二重の周濠をもつ古墳であることが明らかになっている。外側の濠を含めると大きさは、径約五〇メートルにおよぶ。

墳丘は二段築成と考えられ、段上からは破砕された須恵器大甕が出土している。

石室は南西方向に開口し、規模は羨道長四メートル、羨道幅一・四メートル、玄室長推定四メートル、玄室幅二・二メートル、袖幅〇・六メートルを測る。羨道、玄室とも盗掘のため高さは不明である。玄室内から須恵器甕、甕、埴、坏蓋などが出土している。古墳の築造時期は、出土遺物からみて六

世紀中ごろと考えられる。

狐塚古墳の墳丘盛土内から弥生時代中期、後期の土器や石庖丁が出土しているが、最近の調査の結果、弥生時代後期の集落址が狐塚古墳の周辺に存在することが明らかになった。

#### 垂水区のその他の遺跡

六甲山地の西に続く丘陵地を南流する福田川の中流、名谷町からはサマカイト製の大形有茎尖頭器が発見されている。

また近年、福田川下流の垂水駅前再開発にともなって、垂水日向遺跡があらたに確認された。調査の結果、平安時代の漁業を営む集落の遺跡であることが確認され、当時の漁村生活の一端があらわになった。さらにこの下層からは、古墳時代後期の

土器が出土したほか、縄文時代中期・後期・晩期の土器が出土した氾濫原が検出されている。

## 2 西区玉津地区の遺跡

### 居住・小山遺跡

居住・小山遺跡は、玉津町のほぼ西北端に位置し、明石川中流域左岸の標高三四〇～三六メートルを測る段丘平坦面に立地している。居住・小山住宅街区整備事業に伴う昭和五十六年度からのA・B二地区の発掘調

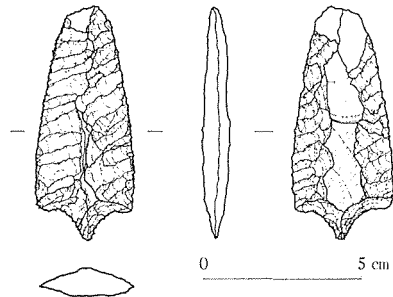


図 175 名谷出土有茎尖頭器

## 第二節 明石川流域とその周辺地域の遺跡



写真 171 居住・小山遺跡

査によって、はじめてその存在が明らかになった。

明石川に近いA地区では、弥生時代中期ごろの竪穴住居一棟などを検出した。住居址からは、管玉、貝殻も出土している。住居址の周辺からは、蛇紋岩製の石庖丁(大形のものを含む)が出土している。おそらく、明石川沿いで農耕を営んでいたものと考えられる。

次に遺構が確認できるのは、古墳時代後期前半の五基の古墳である。二基は円墳、三基は方墳である。五基の古墳は、南北方向にほぼ直線的に並んでいる。

これらの古墳は鎌倉時代ころには墳丘を削り取られており、周溝だけが残されていた。そのため、埋葬施設は検出できなかったが、いずれも木棺直葬墳であったと推定できる。

1号墳をのぞく古墳の各周溝内から供献土器群が出土している。供献状態は様々であるが、主に須恵器坏と高坏が用いられている。須恵器は六世紀前半に属しており、五基の古墳が相前後して築造されたことがわかる。これらの古墳は、背後丘陵の横穴式石室墳と木棺直葬墳が混在する慶明古墳群に含まれると考えられる。

古墳が削平された鎌倉時代の遺構は、A地区で掘立柱建物四棟を検出している。建物群は東西方向の溝で二分されており、溝の北側では三棟の建物がL字形に配置されており、一つの館として機能し

ていたと考えられる。この区画の中には五基の土壇墓も含まれている。B地区でも同時代の建物址の一部や溝を検出した。

#### 玉津田中遺跡

明石川流域には、大規模な弥生集落がいくつか知られている。なかでもこの田中遺跡は、明石川中流の沖積平地に立地する遺跡で、その実態がかなり判明している。遺跡の範囲は、二五ヘクタールを超えるといわれている。

この地に人々が住み始めたのは、弥生時代前期前半で、吉田遺跡とともに明石川流域では最も古く鉄の入れられた集落である。このころは小規模な集落で、竪穴住居三棟、平地式住居一棟が知られるのみで、一つの世帯共同体だけが居住していたようである。このような状態は、中期初頭にまでも継続する。

中期中葉になると、大きな微高地の上に竪穴住居を営み、同時期に存在した数は明らかでないが、計六〇棟以上が検出されている。居住域周辺のやや低い部分には水路をひき、畦で二×三メートル前後に区画した水田を営み、また墓域をも形成している。墓域を形成したのはこの時期からで、中期初頭段階では居住域内に点々と方形周溝墓を営んでいる。しかし、中葉になると、規則正しく並んだ方形周溝墓群を形成する。その数は五〇基になろうかと予想されている。この方形周



写真 172 玉津田中遺跡の弥生中期水田址



写真 173 同弥生中期方形周溝墓群

溝墓群に葬られた人々は、様々な形態の木棺に納められている。中には、戦いに敗れた人であろうか、銅剣の先が骨に刺さったかのような状態で出土した人骨もある。

中期後半、明石川が氾濫し大洪水が襲った。その際に六〇センチメートル以上の砂を堆積させ、住居だけでなく水田や方形周溝墓をもその下に密封した。この時、人々は何も持ち出せず、土器・石器だけでなく鍬・鋤など多くの木器を残している。この木器は、当時の木工技術の優秀さを示すだけでなく、生産用具の実態を明らかにするうえでも貴重な資料である。また、このころの一般的な集落にはみられない石廬丁生産を行っている。

洪水に襲われた人々は、やや高い段丘上に住居を移した。そして、微高地の連続で起伏の多かった低地は、砂の堆積によって平坦化し、水田として利用された。

弥生時代後期以降、古墳時代も段丘上に住居を営み続けた。水田として利用された低地には大規模な水路が引かれ、井堰が設けられ、また農耕に関わる祭り事をしたのであろうか、多量の土器・木器・滑石製品が一カ所からまとまって出土している。

七世紀以降、人々が居住した痕跡は見られない。再び確認できるのは、平安時代も末期のころである。

### 出合遺跡・亀塚古墳

出合遺跡は、住宅公園による宅地造成計画に伴い、昭和五十二年（一九七七）より瀬戸内考古学研究所が調査を行い確認された。この調査は昭和五十九年まで行われ、古墳時代の竪穴住居址群、帆立貝式古墳（亀塚古墳）など多くの遺構が発見された。

また、その後、道路建設に伴う発掘調査が行われ、前述の調査地の北方で弥生時代後期の遺構が検出されるなど、しだいにこの遺跡の範囲、様相が明らかになってきた。

遺跡は明石川の下流域西岸、標高一二～一五メートルの沖積地とその西側の台地上におよんでいる。弥生時代後期の遺構も古墳時代中～後期の竪穴住居址群もともにこの沖積地に広がっているが、両時代の遺構は、近接しながらも異なった所があり、時代により集落立地の異なっていたことがうかがえる。

古墳時代の遺構としては、竪穴住居址群のほか、溝、旧河道が検出されている。竪穴住居址は方形で、その大半は五世紀のもので、この集落は、五世紀に始まり、六世紀前半まで継続したとみられる。

また、遺構からは豊富な遺物が出土し、なかでも、初期須恵器や陶質土器、韓式系土器など、朝鮮半島の



写真 174 耕地下から発掘された出合遺跡



## 第二節 明石川流域とその周辺地域の遺跡



写真 175 出合亀塚古墳遠景

土器やその影響を受けて作られた土器があり、注目される。そのほか、埴輪、製塩土器、玉類、石製紡錘車や、下駄、馬鋤などの木製品も出土している。

この遺跡を特徴づけているのは、明石川下流域において、古墳時代の集落址としては最大規模のひとつであることと、同時期に台地上では五世紀後半に古墳が築かれはじめ、六世紀になると帆立貝式古墳が造られていることである。

発掘調査は今後も予定されており、弥生時代遺構の様相なども明らかになるであろう。

出合亀塚古墳は明石川右岸の台地上に位置し、台地下は古墳時代の住居址が検出された沖積地に続いている。この台地上で帆立貝式古墳一基、方墳一基、円墳三基の合計五基の古墳が見されたがいずれも墳丘は後世に削平されており、周溝だけが確認されている。

亀塚古墳(出合1号墳)は帆立貝式古墳で、全長二九メートル、円部径二一メートル、前方部長さ九メートル、前方部幅一三・三メートルで、主軸は東西方向である。埋葬施設は削平されているため不明である。

出土遺物には、埴輪(円筒・家・太刀・盾・人物・動物)や須恵器



真写 176 王塚古墳全景

がある。築造時期は古墳時代後期初めと考えられる。

また、同じ台地上には奈良時代後半の掘立柱建物四棟と井戸があり、明石郡衙と推定される吉田南遺跡と密接な関係が考えられている。

#### 王塚古墳

王塚古墳は、明石川右岸の標高約二〇メートルの段丘上に立地する前方後円墳である。現在は、王塚台の住宅地に囲まれて、王塚公園として整備されている。もとは陪塚と考えられる三基の古墳が周囲にあったが、消滅しており、その面影を見ることができない。

古墳の大きさは全長約九三メートル、後円部径約四二メートル、前方部幅約三六メートルで、水をたたえた馬蹄形の周濠を

もつ。

欽明天皇の皇女舎人姫王の墓に比定され、陵墓参考地として宮内庁の管理下にあるため、詳細については不明である。

ただ、墳形や馬蹄形の周濠をもつ点から、古墳時代中期に築造されたと考えられる。明石川流域では瓢塚古墳に続く首長墓として知られている。

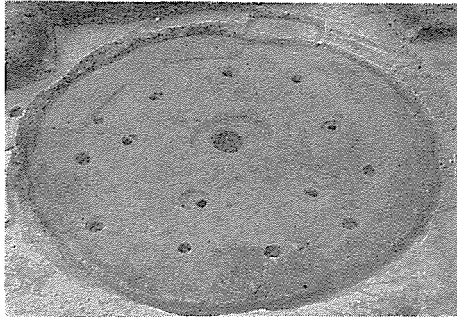


写真 177 高津橋・岡遺跡の円形堅穴住居址

高津橋・岡遺跡

高津橋・岡遺跡は、櫛谷川と天上川にはさまれた、標高三二メートルの中位段丘上に立地する弥生時代後期、古墳時代後期、平安時代末期にわたる複合集落遺跡である。

昭和五十四年（一九七九）宅地造成工事に伴って実施された発掘調査によって発見された。

検出された遺構は、弥生時代後期の火災にあったと考えられる堅穴住居一棟、古墳時代後期の堅穴住居八棟、平安時代後期の掘立柱建物四棟である。

弥生時代後期の堅穴住居址は、直径八・八メートルの円形で、南西部に入口部と考えられる方形の突出部が付いている。堅穴の壁体は西側で損われているものの、その深さは五センチメートルで、堅穴内には、長方形のベッド状遺構が堅穴壁体にそって段状に六カ所造り付けられている。段状部と段上部の床面で、甕形土器の完形品が二個出土している。床面中央部には漏斗形の断面をもつ土坑が検出されている。この中央土坑を囲むように七つ、さらにその外側には九つの支柱穴がめぐって、これら一六本の支柱によって、上屋が支えられたと考えられる。

この大形円形住居址の時期は、床面出土の土器の形態から弥生時代後期前葉と考えられる。

古墳時代の堅穴住居址は、一辺が五メートル前後の小形の方形堅穴住

居址(五棟)と、一辺が七〇八メートル前後の大形の方形竪穴住居址(二棟)に大別される。大形の住居址が廃絶した後に、小形の住居址がつけられたことが、その切り合い関係からわかる。いずれの住居址にも、壁にカマドをつくりつけており、とくに小形住居址のカマドの周辺には、原位置を保った状態で、須恵器碗・杯身・坏蓋が発見されている。これらから、古墳時代の集落の廃絶時期を後期後葉の遅い時期とすることができ。

この遺跡の北側にある玉津中学校でも、造成時に、弥生時代終末期から古墳時代初頭の壺形土器が出土している。

#### 今津遺跡

明石川と楡谷川の合流部東側、西の明石川と東の南北に延びる段丘とに挟まれた沖積地に立地している。



写真 178 上 今津遺跡調査地全景  
下 同弥生時代土器棺

この遺跡はこれまで二次の調査が行われ、弥生時代中期の集落の存在が明らかになった。東西五〇〇メートル、南北一五〇〇メートルに広がると考えられる遺跡の範囲のうち、発掘調査が行われたのは一部分であるが、住居址、墓址などの遺構が密に存在しており、遺跡の規模の大きさをうかがい知るこ

とができる。

これまでの調査では、弥生時代中期の円形竪穴住居四棟のほか木棺墓、土壙墓、壺棺墓などの墓址、土坑溝が、さらに古墳時代後期の大溝一条が検出されている。

遺物は、弥生時代前期から中期にいたる土器、石器が出土している。弥生土器には和泉地方、紀伊地方から搬入された甕が見られ、石器では石斧や多くの磨製石庖丁のほか、瀬戸内地方に見られるサヌカイト製の打製石庖丁も出土している。これら出土遺物の多くは中期中葉から後半に属するものであり、遺跡の存在していた中心はこの時期とみられる。

弥生時代の住居と墓の関係やその分布域、時期差などいまだ不明な問題もあり、周辺地の調査による資料の増加を待たなければならぬ。また、近隣の新方遺跡、高津橋・岡遺跡などとともに、明石川下流域の弥生時代集落の変遷を考えるうえで重要な遺跡である。

#### 新方遺跡

新方遺跡は明石川とその支流伊川の合流点付近、標高八〇メートルの沖積平野に立地する弥生時代から室町時代に続く複合遺跡である。遺構・遺物の分布範囲は、東西一・五キロメートル、南北二キロメートルの広い範囲に認められている。

昭和四十五年（一九七〇）、山陽新幹線の敷設工事に先立つ調査により発見された遺跡である。この時は明確な遺構は発見されなかったものの、大量の弥生時代中期から鎌倉時代にかけての遺物が発見された。その後、遺跡範囲確認調査や周辺での開発に先立つ発掘調査を繰り返し多くの成果が得られている。

当遺跡は近畿地方に稲作技術が伝播して間もなく成立していたと思われる、弥生時代前期中葉の土器が出土している。前期の遺跡規模はさほど大きくはなかったようで、発見される土器の量も少なく、出土する範囲も限定されるようであること以外、その内容は不明である。中期には遺跡の規模が急激に拡大したらしく、堅穴住居なども築かれ、広い範囲から遺物が出土し、墓地の形成も認められる。特に中期中葉の周溝墓は一边二〇メートルを超える大形の方形周溝墓や、斜面にこぶし大の河原石を張り付ける特殊な墓が検出されている。

後期になると遺跡の規模は縮小したらしく、発見される遺構・遺物の量は中期に比べて著しく少なくなり、その分布範囲も狭くなっている。

古墳時代に入ると弥生時代後期に始まった遺跡の縮小傾向は顕著となり、前期には遺物がわずかに出土する程度となり、遺構は発見されていない。当遺跡が再び活発な状況を示すのは中期も終わりに近い五世紀の終末になってのことである。五世紀末ごろから六世紀代には、まとまって堅穴住居が築かれており、その中には勾玉や管玉などの玉製品を制作した工房と考えられる建物も検出されている。

遺構とともに発見される遺物は、各時代を通して質・量ともに豊富である。弥生時代中期の土器には遠く紀伊地方や河内地方からもたらされたものがあり、当時の人々の交流を知るうえでの貴重な資料となっている。さらに木製品の出土も多い。また、鑄造の鉄斧が発見されているが、これは弥生時代中期の遺物としては近畿地方で唯一のものである。

そのほか、当遺跡では弥生時代中期から古墳時代中期まで継続して玉造りを行っており、多くの関連資料

第二節 明石川流域とその周辺地域の遺跡

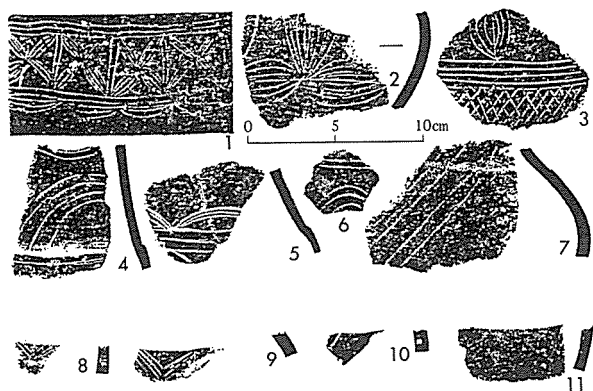


図 176 吉田遺跡出土弥生土器拓影

が出土している。特に古墳時代の玉造りは工房より発見された原石から製品にいたる、各段階の遺物が出土している。材料は碧玉・グリーンタフ・滑石の三種類でどれも当地域には産出しないものであり、交易によりもたらされたものと考えられる。

当遺跡は弥生時代前期中葉に成立し、中期には明石川流域の中核をなす集落として発達したものと考えられる。このことは張り石をもつ特殊な円形周溝墓や各地との交流を示す土器の豊富さ、玉造り工房の存在などからも知られるところである。

後期には中核的な集落の地位を明石川の対岸に位置する吉田南遺跡に譲るものの、その後も単なる一般集落とは異なる位置を占める集落として存続したものと考えられる。

吉田遺跡

吉田遺跡は、明石川下流右岸の標高約二〇メートルの段丘上に立地している。

大正末期から昭和初期に、直良信夫らによる調査が行われ、弥生時代前期のみの遺物包含層と炉址が一カ所確認されていた。その後、調査されることはなかったが、昭和四十二年（一九六七）に確認調査が実施された結果、弥生時代前期の遺跡は、すでに破壊

されていたことが明らかになった。

出土遺物には弥生土器の他に石器や鉄器の出土も報告されている。この遺跡を特徴づけているものは、弥生時代前期の土器である。壺・甕を主体としており、とくに壺頸部と胴部に段をもつもので、文様には木葉文・重弧文・山形文などがある。これらの壺の特徴は、九州地方の弥生時代前期の最古段階のものと同じくあり、近畿地方においても弥生時代最古段階の遺跡とされている。

#### 吉田南遺跡

吉田南遺跡は、明石川下流右岸の沖積地に広がる、弥生時代から鎌倉時代に至る複合遺跡である。遺跡の範囲は、まだ明らかではないが、東は明石川に接し南へは明石市域に大きく広がっている。

玉津環境センター建設に伴い昭和五十一年度から五十五年にかけて発掘調査が実施され、その後昭和五十六年度には明石市域で、成人病センター建設などに伴う発掘調査が行われた。

遺跡のはじまりは明確でないが、弥生時代中期には水田化され、後期に至って集落が営まれている。これらの集落は、沖積地を走る大溝や自然状河川に画されたいくつかの微高地上に、まとまりをもって築かれた堅穴住居址の形で検出された。遺物には当時の日常容器である土器類や木器などのほか出土例の少ない銅鏃、鉄斧なども出土している。

この時代以後も、堅穴住居は検出され、微高地を移り住みながら、古墳時代後半まで集落は存続している。おそらく集落が消滅するほどの自然災害もなく、比較的安定した環境であったものと考えられる。

古墳時代の集落は、ほとんど方形堅穴住居址からなっている。これらは、東部微高地に四一棟、西部微高



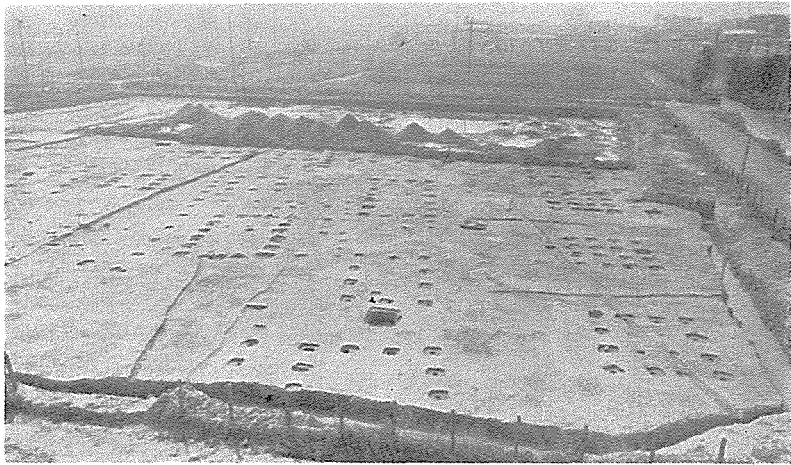


写真 179 吉田南遺跡掘立柱建物址

地に四棟、北部微高地に二七棟、総計七二棟を検出している。そのうち前期の住居址一八棟と、中期の住居址二二棟は東部微高地にあり、後期になると住居址三五棟が北部微高地に建てられており、時期によって集落の中心が移動している。その理由については様々な要因が考えられるが、河川など自然環境の変化もその一つに考えられる。明石地域の部分でも古墳時代中期の住居五棟が検出されており、弥生時代同様、広範囲に住居址群が点在していたことがうかがえる。

各時期とも大量の遺物が出土しており、当時の生活状態をよく残している。前期の遺物では、小型仿製内行花文鏡の破鏡に孔をあけ、紐をとおした懸垂鏡が目をひく。中期では、勾玉、管玉、ガラス玉などの玉類や、朝鮮半島で生産され、持ち込まれた陶質土器や軟質土器のほか初期須恵器が出土している。後期では、土器類のほかに円筒埴輪が数本出土している。

古墳時代の各時期を通して製塩土器・蛸壺などの海の生

産用具や、海水性貝類なども出土しており、海と深くかかわっていたことを示している。

その後、奈良時代前半から平安時代前期におよぶ掘立柱建物が、規格性をもって建てられていた遺構が検出され、さらに木簡・墨書土器・陶硯・帯金具など一般集落址ではあまり例のない遺物が出土しており、官衙的品格をもつのではないかと推定されている。ほかに、奈良時代の木橋や車輪などの、豊富な種類の木製品が多量に出土している。

### 3 西区伊川谷地区の遺跡

#### 頭高山遺跡

頭高山遺跡は、明石川の支流である伊川の中流域左岸、標高一一七メートルを頂部とする丘陵上に立地している。ここからは、南西に明石平野、遠くに瀬戸内海を望むことができる。

この遺跡は、かつて磨製石剣の出土地としてその地名が伝えられたが、詳細は不明であった。昭和五十三年以降学園都市の建設に伴う調査が行われ、しだいに遺跡の様相が明らかになってきた。

これまでの範囲確認調査では、頭高山の頂部とそこから派生する尾根のほぼ全体に弥生時代中期の集落址が存在することが明らかになっている。遺跡は標高九〇～一一五メートル、比高にして約四五～六〇メートルの尾根上および斜面にあり、いわゆる高地性集落である。

昭和五十七、五十八年にかけて、遺跡の南東部分にあたる頂部から南に派生する尾根上で、約七〇〇〇平



写真 180 頭高山遺跡東斜面遺構

方メートルの発掘調査が行われた。調査地は、頭高山遺跡のなかで平野部側からは最も奥に位置する尾根にあたる。尾根上には幅約一〇メートルの平坦面がのびているが、斜面は三〇度の斜度を測るところも少ない急峻な地形である。この調査により、竪穴住居一六棟、段状遺構六カ所、土器棺墓二基などが検出された。

竪穴住居址は、尾根上の平坦面には一棟だけで、他はすべて斜面に営まれている。このため、残存状態はあまり良くなく、ほとんどの住居址は下半部が流失し、平面形は半月状を呈している。斜面に造られた住居址は、等高線に沿って斜面上方部の地山を掘り込み、その土を斜面下に盛土し平坦面をつくり出して建築されたと推定される。また、これら住居址の平面形は残存面から復元すると円形もしくは小判形や隅円長方形などになり、住居を建設する場合、立地に大きく左右されることがうかがえる。これらの住居址のいくつかは、床面からサヌカイトの剥片、破片が多量に出土し、住居内で石鏃などの石器製作が行われたことを物語っている。

住居址とほぼ同様の形状で、等高線に沿って斜面をL字状に掘り込んだ段状遺構は、長さ一〇メートル以上のものや、住居

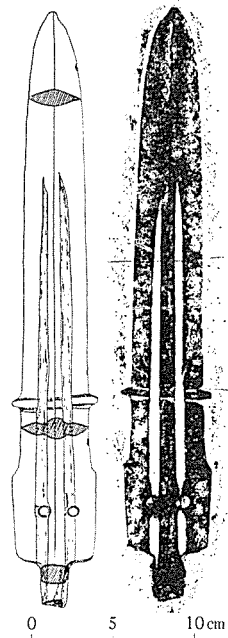


図 177 「垂水出土」  
石剣

土器棺は隣接し、いずれも壺を横にねかせた状態で埋納されていた。

遺物は、弥生土器と石器類が出土している。土器は弥生時代中期後半のもので、壺、甕、高坏、器台などがある。石器類には、打製石器の石鏃、石錐があり、磨製のものでは石剣、石鏃、石斧がある。磨製石剣は四個体分の破片が出土している。このうちの一点は、茎部が欠損しているが、残存長一五・五センチメートル、幅三・二センチメートルで基部付近に孔を二つうがっている。周辺遺跡からの磨製石剣の出土例には、青谷、新方、養田中の池などがあり、当遺跡と同様、中期の集落址からの出土が多い。

また、「垂水付近出土」といわれる、ほぼ完全な形の磨製石剣は、いわゆる銅剣型とよばれる有樋式で、全長三七・五センチメートル、最大幅五・三センチメートルを測り、その形状から市内出土の磨製石剣のなかでもとくに注目されている。

#### 柿谷古墳群

柿谷古墳群は、明石川の支流である伊川の上流左岸の丘陵上に立地する三基の古墳からなる古墳群である。柿谷1号墳は、標高七三メートルの尾根上に立地する直径一四メートル、高さ三メートルの円墳で、埴輪

址に続くかたちで設けられているものがある。これは斜面に営まれた住居に付帯する施設と考えられる。

墓址は、小児用と推定される土器棺墓が二基見つかっている。それぞれの

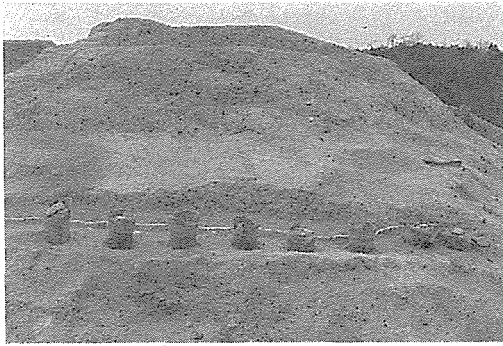


写真 181 柿谷 1号墳埴輪列

列が古墳の北側で検出され、一二本の埴輪が出土した。出土した埴輪から円筒埴輪・朝顔形埴輪・人物埴輪・家形埴輪などを周囲に巡らしていたと推定される。埋葬施設は礎床で木棺とみられ、棺内からは、鉄剣・鉄鏃が出土している。

また、墳丘裾からは須恵器甕片が出土した。古墳の築造時期は六世紀初頭と考えられる。

柿谷2号墳は、1号墳の北二〇メートル、標高五六メートルの尾根上に立地している。2号墳は直径一二メートル、高さ二メートルの円墳とみられ、古墳中央で上下二基の木棺が直交して発見された。1号木棺は長さ一・五メートル以上、幅〇・七メートル、2号木棺は長さ一・二メートル以上、幅〇・八メートルで、出土遺物は1号木棺から須恵器・刀子・金環、2号木棺からは須恵器・玉類・鉄鏃が発見された。古墳の築造時期は、六世紀後半と考えられる。

柿谷3号墳は、1号墳の東一二〇メートル、標高八二メートルの尾根上に立地した古墳で、直径は約一〇メートルと推定される。埋葬施設は木棺で、須恵器が出土した。古墳の築造時期は六世紀前半代と考えられる。

#### 池上口ノ池遺跡

池上口ノ池遺跡は、明石川の支流である伊川の中流左岸に位置し、伊川によって形成された沖積地を見下ろす標高五〇～六〇メートルの

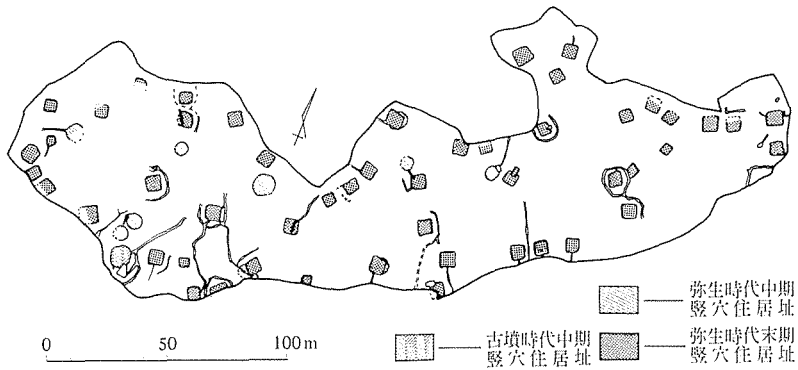


図 178 池上口ノ池遺跡遺構配置図

中位段丘上に立地している。沖積地からの比高は約三〇メートルである。海岸からは川沿いで約六キロメートル、直線距離で約三キロメートルである。

昭和五十一、五十二年と六十二年に調査が実施され、弥生時代中期後半と弥生時代末期の竪穴住居を中心とした集落址が見つかっている。

弥生時代中期の竪穴住居址は遺跡の中央から東にかけて一〇棟検出された。その形状は直径約五〜九メートルの円形で、四本柱と七本柱のものがある。出土遺物には、土器類のほかに石鏃・石剣・石庖丁などがある。

弥生時代末期の竪穴住居址は遺跡全域で五四棟が検出された。形は一辺約四〜七メートルの隅円方形のもの、約三×四メートルの隅円長方形のものがある。隅円方形の方はすべて四本柱で四辺にベッド状遺構をもつものが多い。また住居址内から外に排水溝をもつものも多くみられ、建物の周囲に溝を巡らすものもある。隅円長方形の方は二本柱の小型の建物で、軒数は少ない。この時期の遺物としては、壺、甕、高坏などの土器類の他に鉄鏃、砥石、製塩土器



写真 182 池上北遺跡の焼失住居

などが出土している。

検出されたほとんどの住居址が焼失しており、両時期とも村全体が一時に火災にあって村が廃絶したものと考えられる。

#### 池上北遺跡

池上北遺跡は、土地区画整理事業に伴い、昭和五十四年度の試掘調査により発見された弥生時代および中世の遺跡である。伊川の中流域右岸に位置し、標高約三〇メートル前後の河岸段丘上に立地する。

トレンチ1では、竪穴住居三棟、ピット、土坑などが検出された。住居址1は、トレンチ西南隅で検出されたため、規模など不明な点があるが、方形住居址で、柱穴内から小形鉢が出土した。住居址2も南半部は、調査できなかったが、復元径八・五メートルの大形円形住居址である。住居址3は、一辺六メートルの隅円方形の住居址である。この住居址は、火災にあつたらしく、柱や梁・桁・垂木などが炭化して検出され、当時の家の構造を知る重要な手掛かりがえられた。三棟の住居址から出土した遺物によって弥生時代後期後半ころのものと考えられる。

トレンチ2では、木棺墓五基とピット、溝が検出された。溝は幅

一・五メートル、深さ〇・四メートル、断面V字形で、約一一メートル検出された。中期のものと考えられる。トレンチ4は、段丘の南端で、伊川に最も近接する。弥生時代の遺物を含む砂利層に覆われていたが、自然流路・土坑・ピットが検出された。柱穴と考えられるものもあり、住居址の存在が想定される。遺構は出土遺物から弥生時代中期末葉と考えられる。

トレンチ5では、竪穴住居一棟、土坑などが検出された。住居址は、直径八・五メートルの円形で、七個の柱穴と中央土坑を有している。遺物では壺、甕、砥石、粘土塊が出土した。出土土器から弥生時代中期末ころと考えられる。

トレンチ6では、自然流路一条が検出された。出土遺物は微量であったが、トレンチ5と同様の時期と考えられる。

トレンチ7では、竪穴住居二棟、壺棺墓一基などが検出された。住居址1は、復元径一〇メートルの円形で、床面より一段高く造られたベッド状遺構をもつ。壺棺墓は、壺を掘形内に直立させ、壺の胴部に高坏の坏部で蓋をしたものである。大きさから乳幼児用と推定される。河道では、上層から古墳時代前期の甕と小形丸底壺が、下層から弥生時代前期の壺が出土した。

以上の調査結果より、弥生時代の遺跡の範囲は、東西五〇〇メートル、南北二五〇メートルの規模で、前期から後期にかけて営まれた集落址であると推定される。

#### 鬼神山古墳

鬼神山古墳は伊川中流右岸の平野部に面する丘陵上に位置する。標高は六〇メートルを測り、麓の平地と



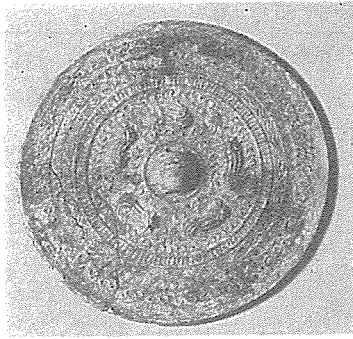


写真 183 鬼神山古墳出土変形五獣鏡

の比高はおよそ三〇メートルである。永井谷川をはさんで西の丘陵には天王山古墳群、瓢塚古墳が存在する。昭和四十一年に盗掘され、これを契機として発掘調査が行われた。

古墳は径一四メートル、高さ一・五メートルの円墳である。葺石は存在しないが、墳丘裾には円筒埴輪がめぐらされている。墳丘は地形の高まりを利用したものではなく、すべて盛土によって築造されている。

埋葬施設は、東西方向に主軸をもつ礎床二基が並列して存在するのが確認された。北埋葬施設の副葬品は盗掘の際にすべて持ち去られていたが、ハート形鉄地金胴張杵葉、楕円鉄地金胴張鏡板などの馬具、鉄鍬、須恵器、玉類などが回収されている。南埋葬施設では盗掘をまぬかれた副葬品として変形五獣鏡や玉類があり、銅釧、鉄刀なども出土している。鏡の出土位置からすると、この被葬者は東枕で葬られたようである。

出土した須恵器の年代から、北埋葬施設は六世紀前半に営まれたものだろうと推定される。南埋葬施設は墓壙も北より深く、副葬品も古い様相を示すのでこれに先立って営まれたものであろう。

#### 天王山古墳群

天王山古墳群は、伊川中流域西方の丘陵上に位置し、付近には瓢塚古墳、延命寺古墳などがある。昭和四十七年から六十二年の間に四次にわたって調査が行われた。

この古墳群は前期古墳二基、後期古墳四基の計六基からなっている。4号墳と5号墳は方墳で、出土した土器から古墳時代前期でも古い時

表 53 天王山古墳群古墳一覽

古墳名	墳 丘	墳丘面出土遺物	埋葬施設	副 葬 品	時 代
1号墳	円墳 径10m, 高さ1.2m	円筒埴輪	—	—	6世紀前半
1-2号墳	円墳 径10m, 高さ0.6m	—	—	—	6世紀?
2号墳	円墳 径14.5m高さ1.3m	円筒埴輪	—	—	6世紀前半
3号墳	2段築成帆立貝式古墳 径20m, 高さ2.5m, 幅10m, 長さ5mの造り出し	円筒・盾・馬・人物埴輪・須恵器蓋坏など	—	—	6世紀前半
4号墳	方墳 南北19m, 東西16m, 高さ3.3m	土師器壺・手焙形土器など	(1号棺) 割竹形木棺 長さ4.5m 最大幅0.6m  (2号棺) 割竹形木棺 長さ3.4m 最大幅0.5m  (3号棺) 合わせ口壺棺	管玉2, ガラス小玉5, 鉄刀2, 鉞1, 鋤先1, 鉄斧1  八禽鏡1, 管玉5, 鉞1, 鋤先1, ガラス小玉16  なし	4世紀  4世紀  4世紀
5号墳	方墳 一辺約20m, 高さ約2.0m	土師器小型丸底土器など	(東棺) 組合式石棺 長さ2.7m 最大幅0.6m  (中央棺) 割竹形木棺 長さ5.2m 最大幅0.6m  (北棺) 割竹形木棺? 長さ4.2m以上 最大幅0.5m  (南棺) 割竹形木棺 長さ4.2m以上 最大幅0.5m	?  鉄剣1, 土師器片1, 他は不明  針状鉄器1, ガラス小玉6  ガラス小玉3	4世紀  4世紀  4世紀
6号墳	方墳 一辺約8m 高さは墳丘流失のため不明 周溝	袋状鉄斧1, 耳環1(周溝) 須恵器蓋坏など	(南棺) 箱形木棺 長さ2.3m 最大幅0.6m  (北棺) 箱形木棺 長さ1.8m 最大幅0.6m	須恵器坏蓋2, 鉄鍬13, 刀子1, 鹿角装刀子1  須恵器坏身1, 耳環1	6世紀後半  6世紀後半

の円筒埴輪が混じっている。また、古墳の周囲には一〇〇基にもおよぶ合口式の埴輪円筒棺が存在すると推定されている。

昭和六十二年度に、瓢塚古墳の南側の丘陵斜面地で宅地造成が計画され、この計画に先立って、瓢塚古墳



写真 184 天王山5号墳木棺

期にあいついで築造されたものと確認された。これに続く古墳がこの西にある全長五七メートルの前方後円墳瓢塚古墳であろう。周辺では、これ以外に古墳時代中期の古墳は確認されていない。ついで、古墳時代後期に至り、ふたたび丘陵上における古墳の築造がさかんとなり、1〜3号墳、6号墳などが築造されたと考えられる。

#### 瓢塚古墳

瓢塚古墳は白水夫婦塚・白水妻塚とも呼ばれ、古くから知られた明石川流域で最古の前方後円墳である。伊川右岸の標高約六〇メートルのシンド山山頂に位置し、前方部を西に向けている。尾根続きのすぐ西側の薬師山山頂には夫婦古墳がある。

この古墳は昭和時代初期に踏査した直良信夫によると、墳丘に三段の円筒埴輪列があり、その埴輪列の中に楕円形

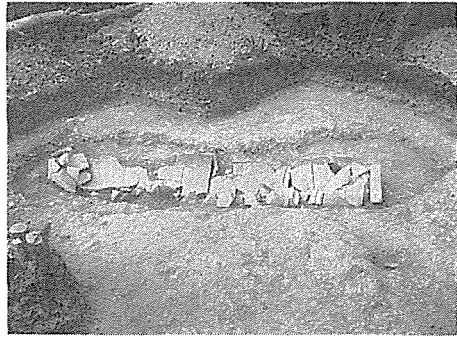


写真 185 瓢塚古墳埴輪円筒棺

の範囲を確認するための発掘調査が実施された。その結果次のことが明らかになった。瓢塚古墳の規模は全長五七メートル、後円部径三メートル、後円部高さ五メートル、前方部長さ二八メートル、前方部幅一六メートル、前方部高さ二メートルである。埴形は、やや歪んだ後円部に、まっすぐ延びる前方部をもつ柄鏡形の前方後円墳である。墳丘には少なくとも二段の円筒埴輪列が巡り、葺石・周溝などの外部施設はない。なお、埋葬施設は調査されなかった。直良信夫は埴輪円筒棺と推定している。

また、埴輪円筒棺が二基確認された。一つは北側くびれ部の埴裾から北約九メートルの地点(埴輪円筒棺1)にあり、長径四五センチメートル、器高八五センチメートルの楕円形円筒埴輪二本の口縁部を合口とするものである。

他の一つは、後円部の埴裾から南東一八メートルの地点(埴輪円筒棺2)にあり、直径四五センチメートル、器高一〇センチメートルの朝顔形埴輪二本を使っている。基底部を合口としており、打ち欠いた口縁部の破片を使って両側の小口を閉塞している。棺の外側に鉄製品が副葬されていた。

瓢塚古墳の築造時期は、埴形や埴輪の特徴から古墳時代前期後半と考えられる。この古墳が明石川流域で最古の前方後円墳であることは、明石川流域の集団がこの時期になって初めて畿内的な形態の古墳を築造することを許された証ともいえる。

4 西区櫛谷地区の遺跡

西神ニュータウン内第65号地点遺跡

明石川中流域と櫛谷川はまたにはさまれた丘陵上には多くの遺跡がある。西神ニュータウンの建設に伴い、昭和四十九年から調査が行われてきた。

当遺跡はそのうち櫛谷川寄りの丘陵上に位置する唯一の弥生時代中期後半の集落址である。この地点からは、下流域や明石海峡あるいは他の丘陵上に眺望が開けている。

遺跡の範囲は五ヘクタールを超える。遺跡の立地する丘陵からいくつかの尾根が派生しており、その全域が調査されているわけではないが、これまでの調査によって、標高七五メートルから九七メートルの間で竪穴住居六棟や土坑、道などが検出されている。高地性集落の一つとみられる。

竪穴住居址は斜面にあるものと、平坦面にあるものとにわけられる。その形は円形もしくは楕円形である。直径約四メートルから六メートルの規模を測る。斜面に築かれている住居址は、地山を削り込んだ部分だけが残っており、盛土部分は、すでに流失している。

平坦面にある住居址からはサヌカイトの破片が合計約三キログラム出土している。未製品の石鏃も出土しており、住居内で石器の製作・加工が行われていたことを物語っている。

一方、住居址の周囲には、斜面を切り込んだ地山整形遺構を数カ所検出している。この床面からも、サヌ



写真 186 西神第65号遺跡B地区遺構

カイトの破片が出土している。屋外でも石器の製作・加工が行われていたようである。

また、床面に炭化層が薄く広がっている住居址があり、火災のために家屋が消失した可能性もある。

なお、住居址を取り囲むように、尾根の縁辺部の斜面を切り込んだ幅一メートルまでの平坦面を検出しているが、この遺構は道として機能していたと考えられる。

#### 西神ニュータウン内第62号地点遺跡

明石川の支流である櫛谷川の中流域右岸に位置し、櫛谷川にそそぐ小河川、菅野谷川の河岸段丘上に立地している。

遺跡の範囲は、この比較的狭い段丘上に限られている。これまでの発掘調査では、弥生時代中期と古墳時代後期の建物址が確認されている。

弥生時代の建物址は竪穴住居で、一棟検出されたが、それ以外の遺構、遺物も少なく、この時代では



写真 187 西神第62号遺跡調査地全景

規模の小さな集落であったと考えられる。

この遺跡の特徴は古墳時代後期の集落址にみられる。集落の規模は大きくはないが、検出された建物八棟のうち、掘立柱建物が五棟を占め、竪穴住居数を上回っている。掘立柱建物はいずれも総柱の建物で、規模は二間四方の正方形のものと、二間あるいは一間×三間の長方形のものがある。これらの建物は倉庫的な役目をしていたと考えられ、竪穴住居に付帯して集落を構成している。

竪穴住居址は方形で六世紀前半のもの一棟、中ごろのもの二棟があり、後者は竈が設けられている。

他の遺構では、柵と思われる杭列を両側に巡らせた溝があり、集落内の施設と考えられる。

古墳時代の集落は六世紀前半から中ごろまで存続しており、掘立柱建物と竪穴住居の时期的な構成は不明であるが、掘立柱建物の多く存在する集落として、同時期の周辺の集落址とは異なった様相を見せている。

### 青谷遺跡

青谷遺跡は、櫛谷川と永井谷川に挟まれた、標高一〇〇メートル前後の四方に眺望のきく丘陵地に立地している。

出陵の尾根は北東から南へ伸び西側には、数個の支尾根が伸びる。遺跡の規模は、少なくとも直径約五〇メートル以上の規模をもつものと考えられる。

この遺跡は、昭和四十二年に発見され、昭和四十六年ころ開発のため、遺跡を含む付近一帯が伐採され、ブルドーザーによって表土が取り去られた。この時弥生土器とともに石戈などが採集された。

その後分布調査が重ねられ、採集された遺物には、旧石器(サヌカイト製有茎尖頭器)、縄文土器、弥生土器、石戈、磨製石剣、大型蛤刃石斧、柱状片刃石斧、石鏃、石錐、古墳時代〜平安時代須恵器などがある。さらに昭和五十七年には鏡が採集されている。

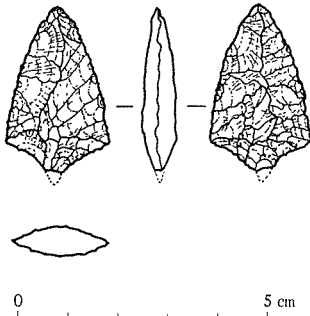


図 179 青谷遺跡出土  
有茎尖頭器

この鏡について、松岡秀人は『中』状図文を有する近畿系弥生小型仿製鏡で、現状では、鏡と共伴する弥生時代中期の土器から類例中最も古くなる可能性があり、この鏡を中心とする類例は、北部九州地方とは異なる近畿地方独自の文化の所産ではないだろうかとしている。遺跡の現状は、開発が途中で中止され放置されたままとなっている。



第二節 明石川流域とその周辺地域の遺跡

5 西区押部谷・平野地区の遺跡

道心山1号墳

道心山1号墳は、明石川の上流左岸、標高九四メートルの丘陵上に立地している。古墳のある丘陵上からは、明石川をはじめ、雄岡山・雌岡山を望むことができる。

道心山1号墳は、盗掘にあっているが明石川流域では墳丘、埋葬施設ともその外形が良好な状態で残されていた代表的な古墳である。調査は、昭和五十三年以降、神戸古代史研究会によって行われてきた。

古墳は、直径約二〇メートル、高さ約三・五メートルの長円墳で、北側、東側、南側に幅四〜七メートルの濠が巡っている。

埋葬施設は南西に開口する左片袖式の横穴式石

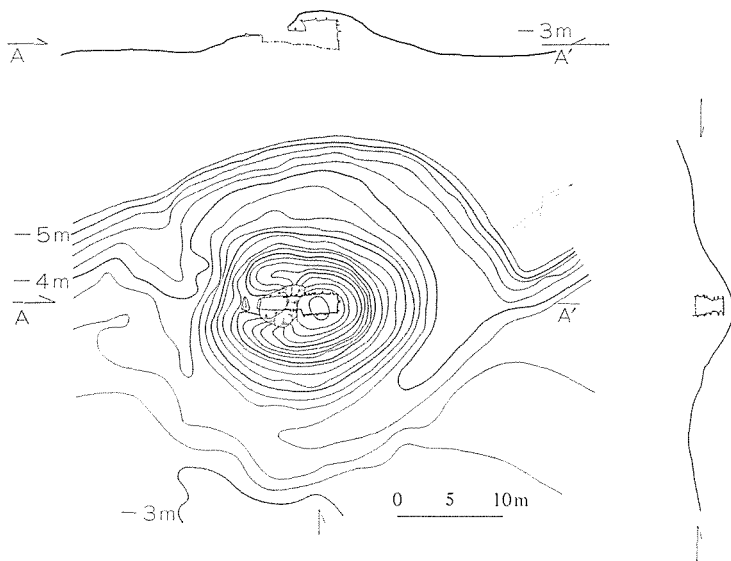


図 180 道心山1号墳墳丘実測図

室で、羨道長一・九メートル、羨道幅一・二メートル、羨道高一・二メートル、玄室長三・六メートル、玄室幅一・八メートル、玄室高二・八メートル、袖幅〇・五メートルを測り、奥壁は四段積み、側壁は五段積みで持ち送りがみられる。石室内は盗掘のため、出土品はなく、石室の形態から六世紀後半の古墳と考えられる。

道心山1号墳に近接して、かつて2号墳・3号墳が存在し、須恵器が採集されているが、いずれも木棺を直葬する六世紀初頭の古墳と考えられている。

#### 元住吉山遺跡

明石川中流域の東岸、標高約四〇メートルの段丘裾部に立地している。

昭和三年（一九二八）、直良信夫の調査によって遺跡の存在が明らかになり、採集された土器は整理され、西日本における縄文時代後期後半の標式遺跡となっている。

その報告によると、表土下約一メートルのところ、直径約五〇センチメートルの石囲炉が検出されている。石囲炉は、十数個の石をやや楕円形に並べており、北隅には、角ばった棒状

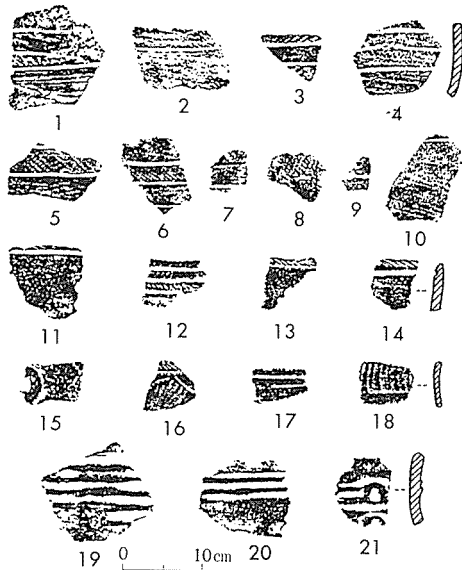


図 181 元住吉山遺跡出土縄文土器

の立石が検出された。石罏の内径は、東西三四センチメートル、南北二八センチメートルで、罏内の一部より灰が確認された。また、表土下約八〇センチメートルから八五センチメートルの遺物包含層から、縄文時代後期後半の土器が出土している。昭和五十年の道路建設に伴う調査では、縄文時代の遺構は発見されなかったが、頂上平坦部より弥生時代中期から後期にかけての土壙墓と考えられる遺構が検出された。ついで昭和五十八年の調査では、縄文時代後期後半の土器が出土している。

#### 藤原橋古窯跡

藤原橋古窯跡は、明石川上流域右岸で通称「七曲り」と呼ばれる西区神出町へ向かう市道脇にある。発掘調査が行われていないため、その状態ははっきりしないが、須恵器の破片が散布している。採集された須恵器には坏・甕などがあり、これらの形態から林山古窯跡と同様、六世紀後半に操業した古窯跡と考えられる。

#### 養田中の池遺跡

明石川中流域の東岸、東から西に延びる標高約九〇メートルの丘陵上に営まれた弥生時代中期の集落址で、遺跡からは明石川中流域を広く眺望することができる。西方の沖積地との比高は約四〇メートルである。ニュータウン造成に伴う発掘調査によって確認された遺跡である。

遺跡は、以前のダム工事によって一部削平を受けていたが、丘陵上の平坦部を中心に、直径約五〇～五メートルの円形堅穴住居四棟と、一辺約五メートルの隅円方形堅穴住居四棟、斜面に作られたテラス状の平坦部からは二棟の堅穴住居址が検出されている。その他周壁溝の一部だけが残存しているものもあり、もとはより多くの住居が存在していたものと思われる。



写真 188 養田中の池遺跡弥生時代住居址

この丘陵の南方約九〇メートルの丘陵上からも同時期の竪穴住居址（直径約一〇メートル）が発見されており遺跡がかなり広範囲に広がっていることは明らかである。

出土した遺物は、畿内第Ⅳ様式に属する多量の土器と太型蛤刃石斧・石鏃などの石器である。なかでも特筆すべきものとしては、有樋式の磨製石剣がある。上半部分を欠いているが、市内でも数少ない出土例である。

なお、遺跡の西端に当たる丘陵先端部分には一辺約一〇メートルの方形墳が築造されていた。東半部分を山道によって破壊されていたが、二基以上の割竹形木棺と土器棺一基を埋葬施設とする前期の古墳であることが確認されている。

この遺跡の西方約三〇〇メートルの丘陵下の段丘上には、弥生時代後期から平安時代まで続く養田遺跡がある。弥生時代後期のものとしては直径約一〇・二メートルの竪穴住居一棟と、甕棺二基などが、古墳時代後期のものとしては掘立柱建物二棟（四間×三間、二間×二間）などが発見されている。

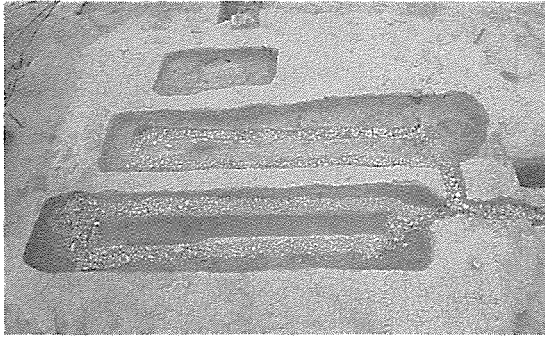


写真 189 堅田神社境内1号墳埋葬施設

堅田古墳群は明石川中流域左岸の沖積地を望む丘陵上に形成された四つの支群（堅田神社境内、西神第29・30号地点、西神第32号地点、西神第33号地点）からなる古墳群である。堅田神社境内支群はそのなかでも最も平野部に近く、丘陵の頂部と堅田神社の境内となっている丘陵の西側緩斜面に築造されている。河川改修工事に伴い二基の古墳が発掘調査された。

1号墳は丘陵の先端部近くに位置する古墳時代前期の方墳である。谷を隔てた北方には、割竹形木棺を埋葬施設とする直径約一一メートルの西神ニュータウン内第9号地点古墳（古墳時代中期）が相対している。

墳丘は東西約一四メートル、南北約一八メートルを測り、約一メートルの盛土が確認されている。埋葬施設は、割竹形木棺を埋納した第一・二主体と、箱形木棺を埋納した第三主体の三基が検出された。第一・二主体の木棺の長さは五・四五メートル、四・九メートルと長大なもので、明石川流域の古墳では最大級である。また、両主体には隙を充填した排水施設が設けられていた。

第一主体からは鉄剣が出土している。第二主体からは小形鏡、鉄剣、槍<sup>やぶがな</sup>、ガラス小玉、碧玉製管玉が出土している。また、墳丘の裾部分からは口縁部に円形浮文を貼りつけた複合口縁の壺が出土している。

1号墳以外にも、丘陵頂部には、直径一〇メートルにも達しない円

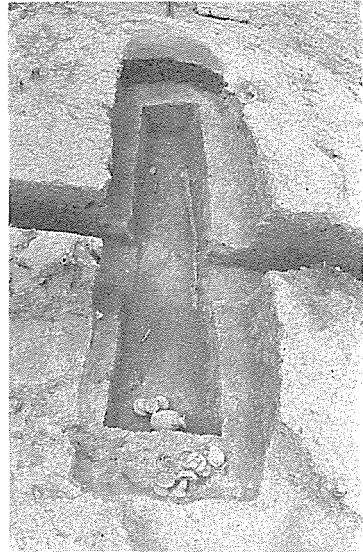


写真 190 堅田神社境内 3 号墳埋葬施設

墳をはじめ四基の古墳が存在しているが、発掘調査が実施されておらず詳細は不明である。

3号墳は、丘陵西側緩斜面の北端に位置する直径約一七メートル、高さ約二・五メートルの古墳時代後期の円墳である。斜面の上方側には幅約一・五メートルの溝が巡らされていた。

南西部以外は土取りによって墳丘がほとんど削平されていたが、残存していた部分から埋葬

施設が発見された。長さ約三・四メートル、幅約〇・六メートルの箱形木棺を埋納したもので、棺内には鉄刀、刀子、鉄鏃などの鉄製品と、須恵器（長頸壺、蓋付短頸壺、提瓶）が副葬され、棺外にも須恵器（有蓋高坏、坏、埴）が置かれていた。

この埋葬施設は副葬されていた須恵器から六世紀半ばごろのものとも考えられるが、削平を受けた墳丘中央部からはもう一時期古い須恵器片が出土しており、3号墳の築造時期は六世紀初めごろと考えられる。

3号墳のほか、境内には同規模の木棺直葬を埋葬施設とする円墳が三基存在しているが、いずれも土取りなどによる破壊を受けており、鉄製品や須恵器が出土している。このほかにも堅田古墳群では唯一の横穴石室墳がかつて存在していたようで、この古墳から出土した六世紀後半の須恵器が近くの寺に保管されている。

## 第二節 明石川流域とその周辺地域の遺跡



写真 191 西神第30号遺跡古墳埋葬施設

### 西神ニュータウン内第30号地点遺跡

第30号遺跡は、明石川中流域左岸丘陵陵上の堅田古墳群の一支群で、古墳群のうち平野部からやや奥に入った標高約一〇メートルの尾根上の高所に位置している。

墳丘は、南西部が崩れ約半分が失われていたが、直径一六メートル、高さ二・二メートルの円墳である。

埋葬施設は、墳丘のほぼ中央に一基の割竹形木棺を納めていたが、さらにこの木棺の外側四周には木板を組んで棺を覆う施設、木槨が設けられていた。このような木槨をもつ埋葬施設は、同時期の古墳において近隣

地域でも例がなく特異な構造である。また、木槨部分には板材を固定するための溝、杭穴が見つかっている。棺は木槨内に粘土を敷き（粘土床）その上に置かれ、棺側にはさらに礫を敷いた礫床が設けられていた。

副葬品は棺の両側礫床上に置かれていた。南側には鉄剣と束ねられた鉄鏃が棺と平行に置かれ、北側には束ねられた鉄鏃二八本が置かれていた。遺物は、これら鉄器以外は全く出土していない。

この古墳は、出土遺物から五世紀代に築造されたと考えられる。

### 西神ニュータウン内第32号地点遺跡

この遺跡は、堅田古墳群の一支群で第30号地点から続く北にのびる尾根の標高約一〇〇メートルの頂部にあり、隣接する二基の古墳

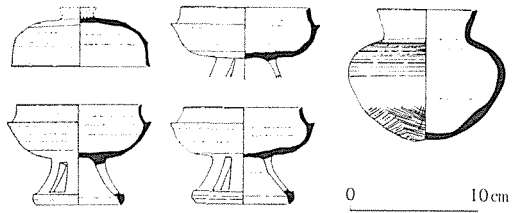


図 182 西神第32号遺跡出土須恵器

からなっている。

1号墳は墳形をうかがい知ることができないほど墳丘が流失しており、わずかに遺物の散布状態から古墳の存在が認められるだけである。2号墳もその墳丘は大きく流失していたが、尾根の高所にあたる墳丘裾部周溝が残存していたためその規模を知ることができる。

2号墳の周溝は、尾根の高所である南側を切って墳丘を造りだすために設けられ、この周溝内より須恵器の有蓋高坏、壺が出土している。墳形は、直径一〇メートル、現存高〇・七メートルの円墳である。

築造時期は、古墳時代後期の五世紀末ころである。

#### 西神ニュータウン内第33号地点遺跡

第33号遺跡は、堅田古墳群の一支群で、第32号地点に続く標高九〇〜一〇〇メートルの丘陵尾根上にあり、五基の円墳よりなっている。これらの古墳は、いずれも六世紀初頭から中ごろにかけて築かれたものとみられる。

1号墳は、第33号地点の古墳の中心に位置し、墳丘規模は直径一四メートルで、最大である。埋葬施設は箱形の木棺を使用し、棺の東端には一群の須恵器坏、高坏が置かれていた。

2号墳は、直径約九メートルで、大部分盛土により造られていた。埋葬施設は盗掘によりほとんど破壊されていたが、北西の墳丘裾部には、墳丘を約二メートル削った平坦面があり、そこから二群に分れて計三〇



第二節 明石川流域とその周辺地域の遺跡

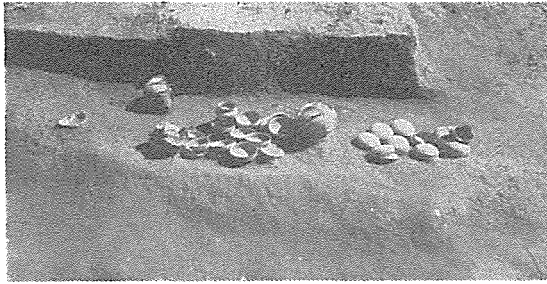


写真 192 西神第33号遺跡 2号墳麓の土器群

個の土器が出土した。これらの土器は、おそらく埋葬に伴う祭祀の際に埋置されたと考えられる。  
 3 A号墳、3 B号墳は隣接しており、いずれも墳丘の流失が著しい。3 A号墳の周溝内には鉄鏝と二六個の土器が埋置された状態で出土した。このうち、須恵器の蓋杯のセットのなかに巻貝を入れているものがあった。

5号墳の埋葬施設は木棺直葬で、棺の両長側に沿って径二〇センチメートルの河原石が積まれていた。棺底よりガラス小玉が出土している。

西神ニュータウン内

第38号地点遺跡

第38号遺跡は、明石川中流右岸の丘陵上に立地し東西に延びる尾根の南北両斜面に存在している。この地は明石川の下流域まで眺望

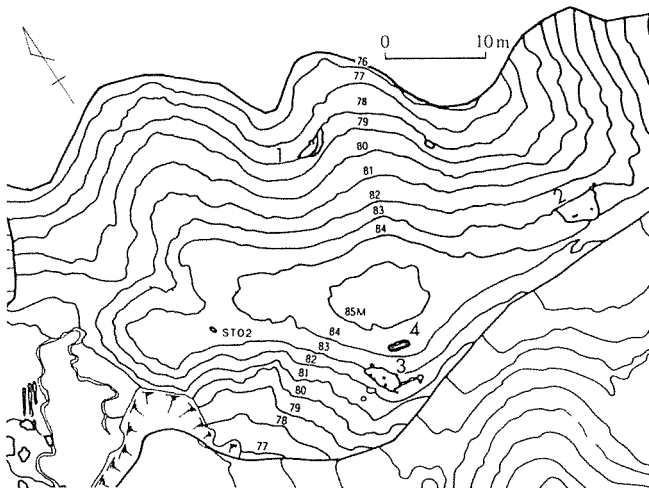


図 183 西神第38号遺跡遺構平面図

1～3 弥生時代住居址, 4 古墳時代木棺直葬墓

のきく場所である。

この遺跡は、西神ニュータウン建設事業に伴う分布調査により発見され、昭和四十五、五十八、五十九年の三回にわたる調査で、弥生時代中期の竪穴住居三棟、住居址に付随する土坑やピット、古墳時代後期の木棺直葬墓一基、鎌倉時代の土坑一基、近世の土坑五基、時期不明の火葬墓溝、土坑を検出した。

弥生時代中期の竪穴住居址は、尾根の稜線からやや下った斜面上に造られており、後世にその遺構の大半が流失しているため、その構造、規模は明確でない。なお、住居址の下方斜面から有樋式石剣（粘板岩製）の破片一点が出土した。

調査範囲の中では、三棟の住居址を確認したが、これらの住居址のあり方は散在的であり集落と呼ぶには小規模である。また土器の出土量も調査面積に比して少なく、その出土量と消費量は比例関係にあると推定できることから、この集落は恒常的な集落でなかったと考えられる。なお、同じ尾根の先端部には、同時代となる弥生時代中期の墓址（方形台状墓）である西神第40号地点遺跡がある。

#### 西神ニュータウン内第40号地点遺跡

明石川中流域の左岸、東から西に延びる標高約七六メートルの丘陵先端近くに築造された弥生時代の墳墓遺跡である。ニュータウン造成工事に伴い発掘調査が行われた。

墳墓は、地山を整形したうえに若干の盛土を行った方形台状墓である。1号墓墳は一辺約九メートル、2号墳墓は一辺約六メートルである。両墳墓とも三基の埋葬施設が発見されている。

東側の1号墳墓からは、箱形木棺の痕跡が確認された二基の墓壙（長さ約一・六メートル・幅約〇・四メートル、

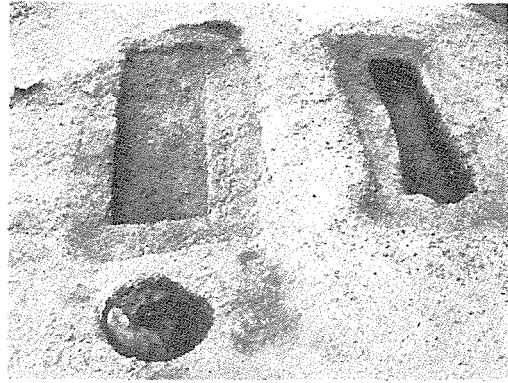


写真 193 西神第40号遺跡 2号墳墓埋葬施設

長さ約二・三メートル・幅約〇・四メートル)と、長さ約〇・七五メートルの小さな墓壙が検出されている。また、西側の2号墳墓からも箱形木棺の痕跡を残す二基の墓壙(長さ約一・九メートル・幅約〇・四メートル、長さ約二・三メートル・幅約〇・六メートル)と、甕棺墓一基が検出されている。甕棺墓は長径約〇・五メートルの掘形に、脚部を欠いた木器形高坏で蓋をした甕(畿内第Ⅴ様式)を埋納していた。

第40号地点の南東約一二〇メートルの丘陵上からは同時期の三棟の竪穴住居址が発見されているが、集落としては小規模であり、この墳墓を築造した集団とは考えにくく、明石川中流域唯一の方形台状墓の造営集団は未発見といえる。

なお同時期の墓址としては、第40号地点の南西約二二〇メートルの丘陵上に築造された後期古墳(西神第42号地点)の墳丘斜面から、壺棺墓(第Ⅴ様式)が一基発見されている。

#### 西神ニュータウン内第50号地点遺跡

第50号遺跡は、明石川中流右岸の丘陵上馬蹄形にのびる尾根に立地する。当初その両端を別遺跡(第50号地点・第89号地点)としたが、調査の結果存続時期も同じで、同一遺跡と考えられることから、第50号地点にまとめられた。

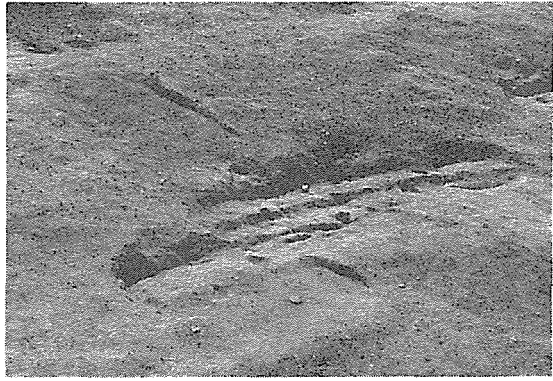


写真 194 西神第50号遺跡斜面の竪穴住居址

遺跡の存在する尾根は、最高所で標高一一一メートル、付近水田面との比高は六四メートルを測る、いわゆる高地性集落である。遺構は、尾根上の平坦面、斜面および傾斜の緩やかな浅い谷部に存在する。竪穴住居址と確認できるものが二〇基、同様の形態を示しながら柱穴を持たないものが一四基検出された。これらの竪穴住居址は、平面形が円形と長方形の二種あり、円形のもの尾根筋の平坦面にあり、低地における住居址と何ら異なる点はないが、長方形のものはすべて斜面に存在し、長辺が六〜八メートルと長い。これは、平均的な床面積二〇〜三〇平方メートルを得るために、斜面に直角方向に長く、平行する方向に短くし、切土・盛土の量をできる限り少なくしようとした結果であろう。また、柱穴の位置も平地の住居址とはことなり、周壁近く(斜面上方)に三〜五本が直列し、それに対応するもの(斜面下方)は存在しない。したがって、屋根は直列する柱によって支えられた棟から、斜面上方・下方へと葺き下ろされたと考えられる。

竪穴住居二〇棟のうち、石器製作に関連すると考えられるものが四棟存在した。その内三棟からは、サヌカイトの原石は出土したが、フレイク・チップなどは出土しなかった。残る一棟には、床面にフレイク・チップが多量に散乱しており、石器を製作していたようで、原石を保有する所と石器を製作する所とは異なっ



写真 195 西神第47号遺跡土壙墓群

ていたと考えられる。  
打製石器を製作する点では、低地の同時期の集落と変わらないが、大きく異なる点は、石庖丁が一点だけしか出土していないことである。このことは、当集落の性格を考える上で、その立地とともに重要な要素であろう。  
土器は遺構内からの出土は少なく、大部分は谷底に堆積していたものである。これらの土器は弥生時代中期後半のものであるが、一部に中期初頭のものも含まれ、当遺跡の成立時期を示している。明石川流域は、東播磨地域に属するが、これら中期後半の土器は、むしろ西摂地域の特徴を有するものが多い。

西神ニュータウン内第47号地点遺跡

明石川中流域の左岸に位置しており、南から北へ延びる標高約八七メートルの丘陵上に営まれた弥生時代中期の墓壙群である。

狭い丘陵平坦部で発見された墓壙は一一基で、すべて丘陵とほぼ直交する方向に長軸をもっている。分布状態から南北二群に分けられる。北側の一群は八基の墓壙からなり、最大のもの長さ二・五メートル、幅一メートルで箱形木棺の痕跡が確認されている。木棺墓はもう一基あるが、他はすべて土壙墓であり、最小のものは長さ一・〇メートル、幅〇・四メートルである。

南側の一群は三基の墓壙からなり、そのうちの一基はこの墓壙

群中最大のもので長さ二・六メートル、幅一・四メートル墓壙内から木棺の痕跡が確認されている。他の二基は土壙墓で、部分的に重なっていたが、その埋土より畿内第Ⅲ様式の壺形土器の破片が出土している。

この墓壙群は、長軸方向をそろえていることや、数が少ないことから、比較的短時間に形成された集団墓と考えられる。また、木棺墓と土壙墓が混在していることは被葬者の集団内における格差が大きいことを示している。丘陵上に営まれたこのような弥生時代の集団墓は市内でも類例がない。

#### 西神ニュータウン内第41号地点遺跡

第41号地点遺跡は明石川中流左岸丘陵、標高八六メートルの尾根上に存在する直径約一二メートルの円墳である。墳丘上に立つと眼下に明石川に沿う沖積地を一望にすることができる。

墳丘は、南北端に溝を掘りその中央に炭混じりの土を平均二・五センチメートルの厚さで敷き詰め、さらにその上に盛土をのせていた。調査時には、墳丘の頂部で約〇・八メートルの盛土が確認できた。

埋葬施設は、墳丘の中央部にほぼ東西方向を主軸にした東西八・四メートル、南北二・九メートル、深さ一・四メートルの土壙を掘り、その中央部に東西五・七メートル、南北一メートルの



写真 196 西神第41号遺跡円墳

棺を納めていた。副葬品は棺外に矢柄を装着した鉄鏃三点が出土したのみである。この古墳の埋葬施設の特徴は、棺の上と土壙全体に、こぶし大以下の円礫を厚さ二〇センチメートルほどのせ、その上に土を盛っていること、棺は墳頂下約二メートルに埋葬されており、西神地域周辺ではほかに例を見ないこと、などの点があげられる。

墳丘の南東斜面には直径一メートルの焼土面があり、そこに土師器と須恵器の甕が各一点破片の状態で出土しており、墓上祭祀の跡と考えられる。また、北東斜面の土坑からは須恵器蓋坏三点が、流土中からは須恵器・土師器の破片や鉄刀の小破片とともに刃部の長さ二六センチメートル、幅五センチメートル、厚さ〇・五センチメートルのほぼ完形のU字形鋤先などが出土している。

この古墳の築造時期は、棺内外の遺物が鉄鏃のみで明確にいけないが、墳丘や周辺の出土遺物から古墳時代後期の六世紀初頭と考えてさしつかえないであろう。

#### 西神ニュータウン内第55号地点遺跡

西神第55号地点遺跡は、明石川中流域左岸の宮前付近の丘陵尾根上、標高約六〇〜八〇メートルに存在する古墳群である。昭和六十年に行った調査の結果三基の古墳が発見された。このうち1号墳と2号墳は同一尾根上に隣接し、3号墳は隣の尾根上に存在する。

1号墳と3号墳は墳丘の流出がはなはだしく、埋葬施設はほとんど残っていなかった。1号墳は一三・四×一一・五メートルの楕円形で、3号墳は一三・五×一六・五メートルの方墳である。両墳とも埋葬施設は木棺直葬と考えられる。1号墳は墳丘裾から出土した須恵器より古墳時代後半の築造、3号墳はほとんど遺

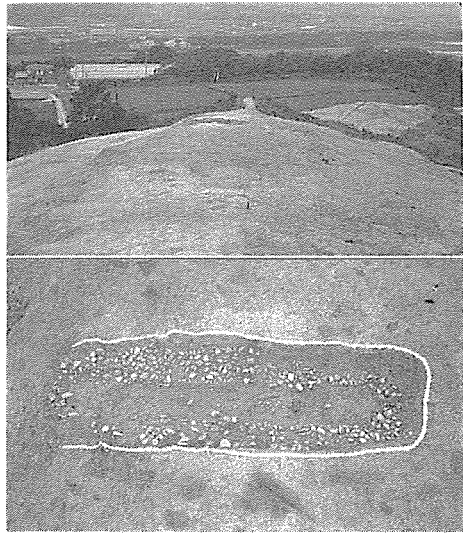


写真 197 上 西神第55号遺跡2号墳全景  
下 同埋葬施設

物が出土せず時期の確定はできないが、古墳時代中期の築造と考えられる。

2号墳は一部後世の土取りによって削られていたが、墳形は一三・三×一七・五メートルの長方形もしくは楕円形で、埋葬施設も、一部を欠いていたが割竹形木棺の痕跡が見つかり、棺の内部には朱が塗布されていた。掘形内には、こぶし大以下の円礫を木棺の周りに充填している。現存する掘形の大きさは、長さ三・六メートル、幅一・二メートル、木棺は長さ二・五メートル、幅〇・四

メートルである。方向はほぼ東西を向いており、棺の幅は東の方が広く、床面も西に傾斜していることから、頭は東に向いていたと考えられる。棺内からは、袋状鉄斧・鉄剣・<sup>た</sup>鉈状鉄器が出土している。これら鉄器は三点とも棺内東半から出土しており、遺体の上半身の付近に副葬されていたようである。これらの鉄器以外に出土品がないため築造時期の確定はできないが、古墳時代中期に造られたものと考えられる。

#### 鍋谷池遺跡

鍋谷池遺跡は、明石川中流域右岸の丘陵上に立地している。最高所は標高約一一三メートルで、明石川の沖積地との比高は約五〇メートルを測る。



## 第二節 明石川流域とその周辺地域の遺跡

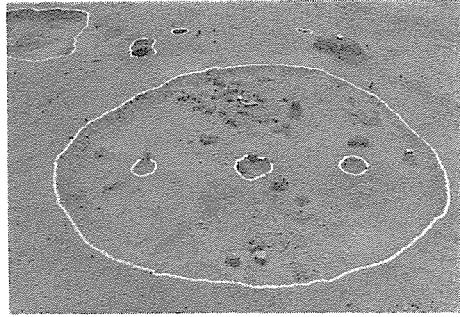


写真 198 鍋谷池遺跡弥生時代住居址

も考慮して弥生時代中期中葉～後半と考えられる。

### 黒田遺跡

黒田遺跡は、明石川中流域の右岸、明石川とその支流鍋谷川に挟まれた標高約六〇メートルの段丘上に立地している。遺跡はこの段丘の南半部、比高約一〇メートルの限られた範囲と推定できる。

昭和五十三年度から行われた圃場整備事業に伴う発掘調査により、弥生時代の土坑、古墳時代の堅穴住居址・土坑・溝などが発見され、

現在までに堅穴住居址、甕棺墓、土坑、ピットなどが検出された。住居址は、ゆるやかな斜面に造られており、直径約五メートルの円形で、中央土坑と、三カ所の主柱穴がある。床面の高所側には、長さ二メートル、高さ一〇センチメートルを測る階段状施設が造り出されていた。甕棺墓は、径六〇センチメートル程の土壇内に口縁部を東に向けた甕を置いたもので、蓋となるべきものは出土しなかった。このほか土坑、ピットなどが検出されたが、埋土に炭、焼土を含んでいる場合が多かった。

出土の遺物は乏しく、これらの時期を決めることは困難であるが、流出土中から出土した土器

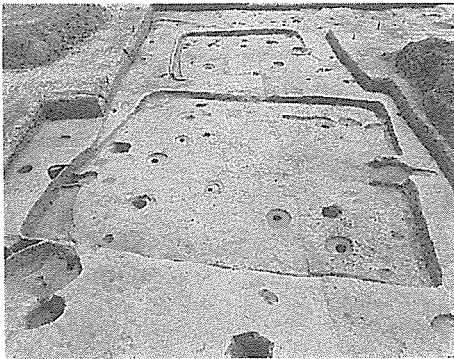


写真 199 黒田遺跡古墳時代堅穴住居址

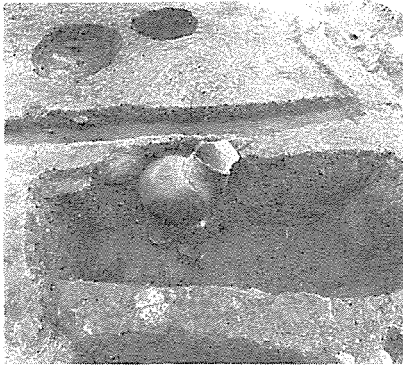


写真 200 常本遺跡土器出土状況

弥生時代中期後半と古墳時代後期の集落址であることが明らかになった。弥生時代の遺物では中期後半の壺、甕などの土器類、石鏃などの石器が出土した。古墳時代後期の竪穴住居址は二棟検出されており、いずれも西辺に竈を設ける方形の住居である。また、遺物には、六世紀後半ごろの須恵器、土師器のほか、土坑より須恵器環とともに鉄滓、ふいご羽口が出土しており、鍛冶が行われていたと推定される。

#### 常本遺跡

常本遺跡は、明石川中流右岸の河岸段丘上に立地している。昭和五十一年（一九七六）土地改良事業に伴う分布調査において、中世土器片および石鏃片が採取され、翌年、本格的な発掘調査により、北側の段丘上で、まず平安時代後期の建物二棟が発見された。

ついで昭和五十三年西側段丘下部の調査が実施され、弥生時代前期から古墳時代、平安時代後期にいたる集落址が検出された。

この遺跡を特徴づけているのは、弥生時代の前期後葉と考えられる竪穴住居二棟の発見である。検出された住居址はいずれも楕円形で、一つは長径約三メートル、他方は約五メートルあり、周辺部に柱穴をめぐらせた簡素な構造をとっている。二棟のうち大きい住居址のやや南より中央の床面には焼土がみられ、炉の存在が確認された。弥生時代前期の住居址は発見例が少なく、この明石川中流域における弥生時代前期集落の発見は、明石川流域での稲作普及を示す

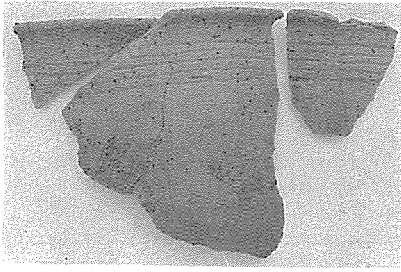


写真 201 西戸田遺跡出土土器片

ものとして、意義深い。

このほか弥生時代前期に属す遺構として、木棺墓三、土坑二が検出され、遺物では石鏃や扁平片刃石斧、多数の土器などが出土した。

また、弥生時代後期に属す溝や古墳時代中期後葉から後期中葉にいたる竪穴住居址が一三棟検出されている。

#### 西戸田遺跡

西戸田遺跡は、明石川の河口より約八キロメートル、中流右岸、標高約三三メートルの河岸段丘上に位置する。昭和五十四年から昭和五十七年にかけて行われた圃場整備事業に伴う発掘調査で発見された遺跡である。各年度の調査で、弥生時代前期・後期、古墳時代、中世の遺構・遺物が検出された。

弥生時代前期では中葉の壺・甕・鉢などが土坑内から出土している。  
弥生時代後期では後半と考えられる竪穴住居一棟が検出された。住居址は一辺約六・八メートルの方形で、周壁溝、中央土坑をもち、西北部にはベッド状遺構がある。検出された柱穴の組合せにより一回の建替えがあったと推定される。

このほか壺、甕、鉢、製塩土器などが出土した。古墳時代では、溝状遺構、土坑、ピットなどが検出されている。

## 中村古墳群

中村古墳群は、明石川右岸の丘陵尾根上に位置し、五基の古墳で構成されている。その南端に位置する4号墳・5号墳は、昭和四十三年、第二神明道路の建設に伴って、発掘調査が実施された。

5号墳は、全長約一七メートルを測る帆立貝式古墳と考えられ、直径一四メートル、高さ一・五メートルの円丘部の南南東に、長さ四・七メートル、幅二・三メートルの造り出し部を備えている。

埋葬施設は、主軸に平行する第一施設と、それに直交する第二施設とが検出されている。いずれも、割竹型木棺を直葬し、棺内には酸化第二鉄が塗布されていた。

第一埋葬施設の棺内からは、直刀片、鉄鏃一八、帯金具などが、第二埋葬施設の棺内からは、鹿角装大刀、刀子、竹製堅櫛、人骨、歯などが出土している。

5号墳の外表施設は、円丘部周縁に溝を巡らせ、円筒埴輪を周囲に立て並べられていたと考えられる。また、墳丘裾部から、須恵器蓋坏・有蓋高坏・甕・甕口縁部・器台などが多数出土しており、墓前祭祀の一端をうかがうことができる。

4号墳の調査では、埋葬施設は確認できなかったが、直径一四メートル前後、高さ一・五メートル前後の規模を有する円墳と推定される。墳丘裾部からは、円筒埴輪片が多量に出土していることから、外表施設と



写真 202 中村古墳群 5号墳埋葬施設

して、円筒埴輪が立て並べられていたと考えられる。また、墳丘裾部から、須恵器甕・土師器壺・滑石製紡錘車が出土している。

4号墳・5号墳とも、出土須恵器の形態から、古墳時代後期初頭の築造とみられる。

なお、中村1号墳・2号墳はすでに消滅してしまっているが、中村集落西側の良勝寺裏山で、組合式石棺材が発見されており、両古墳のいずれかに用いられていたものと推定されている。

## 6 西区神出地区の遺跡

### 新内古墳

新内古墳の位置する神出町かんでは、かつて印南野と呼ばれた広い高位段丘上の北東端に位置している。付近は、雌岡山とそれに連なる起伏扇状地からなり、小河川による浸食によって東西に谷が入り込む地形になっている。古墳は、そのような谷にはさまれた小尾根上に立地している。

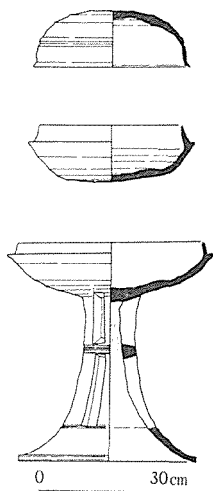


図 184 新内古墳出土  
遺物実測図

この古墳は、これまでその存在は全く知られていなかったが、圃場整備事業に伴う遺跡確認のための調査によってその存在が知られ、昭和六十一年に発掘調査が実施された。

調査の結果、古墳の盛土はすでに削平されており、

埋葬施設などは検出されなかったが、古墳をめぐる周溝が遺存しており、それから復元すると直径一七メートル(周溝を加えると直径二五メートル)の円墳であったと推定される。

遺物の多くは周溝内から出土したもので、埴輪・須恵器を主体としている。埴輪には円筒埴輪・朝顔形埴輪のほかに人物埴輪片など形象埴輪片の出土もみられる。須恵器では甕・坏蓋・坏身・器台などがみられ、子持壺と考えられる土器片も出土している。これらの遺物は、古墳時代後期に属するものであるが、若干の時期差が認められ、古墳築造後しばらくの間は、追葬あるいは祭祀が継続されていたものと推察される。

#### 雌岡山周辺の遺跡

雌岡山周辺の遺跡は、印南野の高位段丘上の北東端に位置している。付近は、標高約二五〇メートルの雌岡山と標高約二四一メートルの雄岡山という二つの独立丘とそれに連なる扇状地からなり、小河川による浸食により、谷が東西に入り込んでいる。

この付近では、旧石器時代の遺物が、高位段丘上の小浸食谷を利用して築かれた農業用溜池で多く発見されている。

雌岡山北麓の青池南岸にある青池遺跡では、旧石器時代の国府型ナイフ形石器が数点と、縄文時代に属すると考えられる石鏃が数点採集されている。いずれもサヌカイト製である。

雌岡山南麓でも、拍子ヶ池、笹ヶ池周辺で、旧石器時代の国府型石器をはじめ、翼状剥片石核のほか、縄文時代に属する石鏃、サヌカイト片、チャート片が採集されている。なお、旧石器時代の遺物は、いずれもサヌカイト製である。

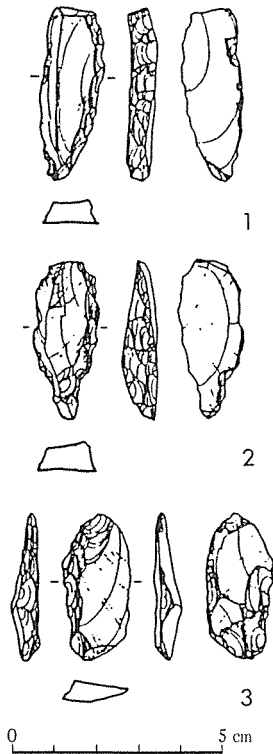


図 185 雌岡山周辺出土  
旧石器  
1 金棒池北地点  
2 拍子ヶ池北地点  
3 笹ヶ池遺跡

また圃場整備に伴う調査によって、雌岡山南麓で三基の円墳が発見されている。うち二基は、埋葬施設が横穴式石室で出土遺物から七世紀に築造されたものとされている。

雌岡山東麓では、金棒池北岸において、サヌカイト製の国府型ナイフ形石器や縄文時代の石鏃とサヌカイト片、チャート片が採集されている。金棒池南東岸一帯でも、旧石器時代から縄文時代の遺物が散布しており、ナイフ形石器をはじめ、小形の有茎尖頭器や搔器、剥片のほか、縄文時代の石鏃などが採集されている。また金棒池中にある金棒池一号墳は、全長三一メートルの小形の前方後円墳で、採集された須恵器片から後期古墳と考えられ、明石川流域では最後の前方後円墳といえよう。

大皿池東岸でも、旧石器時代から縄文時代の遺物が散布しており、ナイフ形石器をはじめ、搔器、剥片のほか、縄文時代の石器、サヌカイト片やチャート片が採集されている。ナイフ形石器と搔器は、ほとんどがサヌカイト製であるが、一部チャート製のものもみられる。

このほか古墳群としては、日吉谷群集墳・池谷群集墳・寺谷群集墳が存在し、その西方には緑ヶ丘群集墳

がある。

#### 西区のその他の遺跡

明石川流域では、平野町中津の上喰池遺跡で、旧石器時代のナイフ形石器が採集されている。また昭和五十九年度の新方遺跡調査でも、弥生時代中期の河道から旧石器時代のサスカイト製の翼状剥片石核が出土している。

明石川中流域の大畑遺跡は縄文晩期の遺跡、下流の片山遺跡は縄文後期の遺跡として知られる。

押部遺跡では、弥生時代後期の幅約七メートル、深さ約一・四メートルの大きな溝と一辺六・四メートルの隅円方形堅穴住居一棟が検出されている。また、河岸段丘を取り囲むような古墳時代中期の断面がV字状を呈する溝と、これに囲まれた段丘上に、同時期の堅穴住居址が検出されている。またこのV字溝内より滑石製双孔円盤などが出土した。

さらに栄さかよには栄弥生墳墓遺跡がある。

明石川中流左岸の宮前遺跡では、弥生時代後期の溝・土坑より土器が集中して出土している。右岸の印路遺跡では、弥生時代前期の落ち込み状遺構が検出されている。

明石川上流左岸に道心山群集墳・元住吉山群集墳が存在し、右岸には、押部群集墳・八丁池群集墳が存在する。

また、中流域右岸の丘陵には、七曲り群集墳・内の池群集墳・古野池群集墳・鍋谷池群集墳・常本群集墳・少年保養所裏山群集墳・印路群集墳・矢の谷群集墳・中村群集墳がある。中流域左岸には春日神社裏山





写真 203 久留主谷遺跡の弥生中期  
竪穴住居址

群集墳・下村群集墳がある。

伊川流域では、伊川谷町上脇で旧石器時代のナイフ形石器が採集されている。また池上口ノ池遺跡での調査では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落址から二次的な出土遺物として旧石器時代のナイフ形石器とサヌカイト片が出土している。

長坂遺跡では遺物包含層から縄文後期の遺物が出土したほか古墳時代の集落址も検出されている。南別府遺跡も縄文後期の遺跡として知られる。

伊川中流域右岸の前開遺跡では、少量の弥生土器と石器が出土し、右岸の久留主谷遺跡では、標高約一四〇メートルの丘陵頂部で弥生時代中期の方形竪穴住居址が一棟検出されている。単独の検出例で、対岸の頭高山遺跡(中期)との対比で、今後検討されるべきであろう。

永井谷川右岸丘陵には、古墳時代の鎌谷群集墳・サブカゼ古墳・延命寺古墳が存在し、左岸では、小寺遺跡で古墳時代の集落址が検出されている。また右岸丘陵上には、谷ノ上群集墳・中ノ谷群集墳・水呑谷群集墳・池ノ内群集墳・柏ヶ谷群集墳が存在する。

楯谷川中流域の長谷遺跡では、弥生時代後期の落ち込み状遺構が検出され、栃木遺跡では、弥生時代中期の土坑などが検出されている。また如意寺裏山遺跡も弥生時代中期の遺跡として知られ、池谷

遺跡で古墳時代後期の竪穴住居一棟が検出されており、ほかに池谷群集墳、銅鏡を出土したという光松古墳や九尾谷古墳、松本古墳が存在する。

楯谷川と明石川が合流する北側の斜面には、西の谷群集墳・慶明群集墳が存在する。

西端部では、岩岡町の印籠池、神出町宝勢の木屋池・白蛇池、神出町東の青池などで旧石器時代の遺物が採集されている。また神出町の二基の古墳から出土した遺物が東京国立博物館に保管されており、このうちの一基より杏葉が出土したとされている。

### 第三節 六甲山地北部地域の遺跡

六甲山地の北側斜面は、南側に比してやや緩やかであるが、その北西側には五〇〇メートル級の丹生（帝釈）山地が接し、その北東側には三田盆地へかけての丘陵が続いていて、この地域（北区）は、一帯が山地である。

この地域の中央部は河流の分水嶺をなし、東部では有馬川・有野川・八多川が北流、長尾川が東流して、いずれも流域に平地を形成し、合流したあと武庫川中流に注いでいる。その合流部付近の道場・塩田・宅原地区には遺跡が多い。

一方六甲・丹生両山地の谷を西に流れて加古川に合流する志染川（旧山田川）と、丹生山地の北側を西流して志染川に合流する淡河川の両流域は小盆地状をなし、ともにその流域に河岸段丘が発達している。しかし両流域とも現在のところ遺跡の発見数は少ない。

## 1 北区道場・長尾地区の遺跡

### 中野古墳群

中野古墳群は、鐮射山の南へ西麓部に位置し、四支群に分けられる。

まず、J R 福知山線道場駅の北に位置する駅北支群は、鐮射山裾部の傾斜の変わりめに沿って、東西方向に弧状に並んで位置し、今までに五基の古墳が確認されている。

その東端に位置している1号墳の墳丘は、西側を倉庫、北東側を人家、南側をJ R 線側道で削られ、平面形は、現在三角形になっている。このため、墳形および墳丘の正確な規模を明らかにすることはできないが、径一五メートル、高さ四メートル程度の円墳であったと推定される。

石室は、南西方向に開口する左片袖の横穴式石室で、羨道部分は、道路によって削られている可能性が高い。現存石室は、全長七・五八メートル、玄室長四・一八メートル、玄室幅奥壁部で二・〇四メートル、玄門部で二・三六メートル、玄室高二・九二メートル、羨道長三・四メートル、羨道幅玄門部で一・五メートル、羨門部で一・一九メートル、羨道部高一・五五メートルを測る。

石室の構築は、玄室・羨道とも第一段目の石材を縦積みし、第二段目以上をやや持ち送りながら横積みしている。主要石材は面取りがなされている。

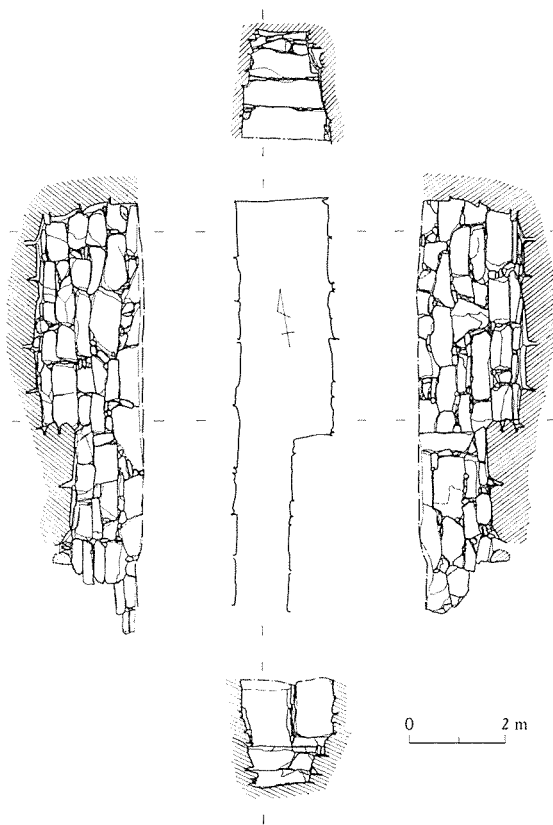


図 186 中野駅北4号墳石室実測図

2号墳は、人家によって墳丘の前半を削られているが、横穴式石室の玄室部と玄門部が残存している。玄室床面はすでに深く掘り込まれており、その際に、須恵器坏身・坏蓋・埴・埴、土師器埴、金環が出土している。現存する石室の規模は、玄室長三・七メートル、玄室幅一・三メートルを測る。石室の構築法は、1号墳に類似している。

3号墳の石室は、左片袖の横穴式で、石室全長五・八メートル、玄室長四メートル、玄室幅一・八メートル、羨道長一・八メートル、羨道幅二メートルである。石室の構築は、小型の割り石を小口積みにして急な持ち送りを行っている。

4号墳は、段丘傾斜面に位置している。墳丘の裾部は削平されているが、直径一九メートル、高さ四・五メートルの規模の円墳と考えられる。埋葬

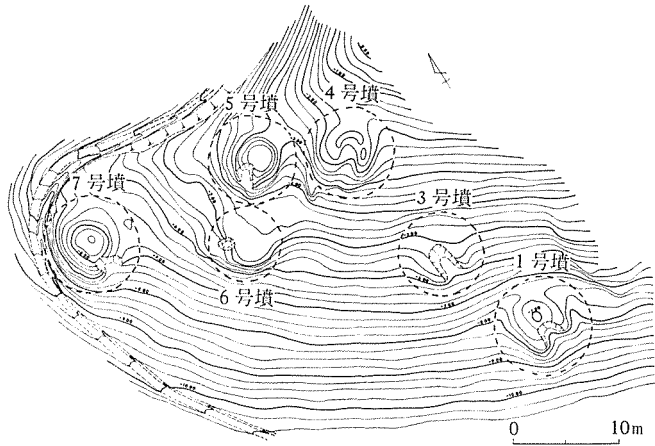


図 187 中野古墳群鐮射山西麓支群墳丘測量図

一・五メートルの円墳である。  
 鐮射山西麓の南側斜面裾に立地している支群は、七基の古墳からなり、いずれも八〜一〇メートルの円墳で、埋葬施設は小規模な横穴式石室であり、南に開口している。

施設は、ほぼ真南に開口する左片袖の横穴式石室で、石室全長八・七メートル、玄室長五メートル、玄室幅二メートル、羨道長三・七メートル、羨道幅一・五六メートルを測る。

石室の構築法は、一段目を縦積みにし、あと中間部まで垂直に横積みし、それより上部は急な持ち送りを行っている。

石室内からは、平瓶が出土した。

5号墳は、段丘の西端に築かれた直径一一メートル、高さ二・五メートルを測る円墳である。埋葬施設は横穴式石室と考えられる。

これらの古墳は、出土遺物より古墳時代後期中葉から後葉にかけて築造されたと推定される。

ついで鐮射山南麓の裾に位置する支群は、四基の古墳からなり、うち三基は舌状に伸びるゆるやかな丘陵上に立地している。四基とも南に開口する横穴式石室をもつ、直径八〜一

### 第三節 六甲山地北部地域の遺跡

鑄射山南麓斜面中腹の尾根上に立地している支群は、五基の古墳からなり、墳丘は八・五〇一四・五メートルの円墳とやや大きく、横穴式石室も群中では比較的大きい部類に入っている。

これら古墳の築造時期をきめることはむづかしいが、おそらく六世紀中ごろを中心に順次築かれたものとみられる。被葬者の性格も不明である。

#### 塩田遺跡

塩田遺跡は武庫川の支流である有馬・有野・長尾の三河川が合流する地点から東南方に拡がる沖積地にある弥生時代～室町時代に至る集落址である。

この遺跡は昭和五十六年以來の圃場整備事業に伴い、その内容が明らかにされてきており、東方の丘陵裾部にも拡がっている事が知られた。調査面積が狭く、全体がうかがえる遺構は少ないが、弥生時代中期中葉の小形竪穴住居一棟、中期中葉～後葉の大形円形竪穴住居二棟、後期後葉～末の方形竪穴住居一棟のほか、弥生時代のピット・土坑などが検出されている。

弥生時代中期中葉の小型住居址は、東西二・八メートル、南北二・二メートルで中央に炉があり、石庖丁、石鏃、砥石などが出土した。大形住居址は直径九・二メートルのものと、これの一部



写真 204 塩田遺跡の弥生時代円形住居址

を破壊して造られた直径八・二メートルのものがあり、いずれも中央に土坑が検出された。前者は一二本、後者は一四本の柱で屋根を支えたものと考えられる。後者からは、鉄剣型と思われる磨製石剣が出土している。なお、近くの鎬射山の中腹からは銅剣型石剣が出土している。

後期後々末葉の住居址は、東方山裾部にあり南北四メートルを測る。

遺物中、重要なものに石庖丁の製品及び未製品がある。総数は両者合わせて五〇前後を数える。大部分、弥生時代前期後葉〜中期中葉までの土器を含む包含層から出土した。調査面積の狭さに比べ量的に多く、他の集落へ供給した可能性も考えられる。土器の中には、播磨との交流を考えさせるものもある。

#### 稲荷神社裏山古墳群

有馬川右岸の丘陵上に立地するこの古墳群は、三基の円墳から構成される。標高二二〇メートルの尾根の最高所に2号墳（直径一九メートルの円墳）が位置し、ここから北東へ派生する尾根の先端（標高二二〇メートル）に1号墳、南西に派生する尾根の先

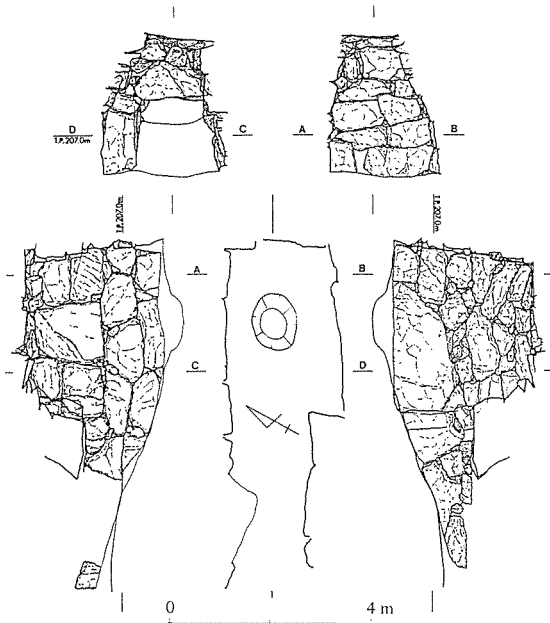


図 188 稲荷神社裏山1号墳横穴式石室実測図



端に3号墳(直径二メートルの円墳)が位置する。

1号墳は直径一七メートル、高さ約五メートルの円墳である。埋葬施設は西南西方向に開口する左片袖式の横穴式石室で、石室内には羨道を中心に土砂が堆積している。現状での規模は石室の全長七・一二メートル、玄室長三・五二メートル、同幅一・九八メートル、同高さ二・八二メートル、羨道長三・六〇メートル、同幅一・五六メートル、同高さ一・五一メートルを測る。玄室の左側壁の三段目以上で石材の持ち送りが顕著である。

1号墳の築造時期は羨道入口付近で採集した須恵器坏蓋の特徴から、古墳時代後期中葉を前後するものと考えられる。

#### 尼崎学園内古墳群

有馬川が武庫川に合流する地点の西側、北に突き出た丘陵の先端部に位置する六基の円墳からなる古墳群である。古墳はそれぞれ墳丘の裾を接した形で密集して存在する。

1号墳は直径一二メートル、高さ一・二メートルの円墳で、埋葬施設は横穴式石室である。道路によって墳丘の二分の一以上が削られている。削られた部分に石室の石材らしき石が存在し、石室の掘形が確認できると。

2号墳は直径一二メートル、高さ一・三メートルの円墳で埋葬施設は木棺直葬の可能性が高い。墳丘は比較的良好に残っている。

3号墳は直径六メートル、高さ一・三メートルの円墳で、埋葬施設は小形の横穴式石室である。墳丘はか

受け、石室の石材が抜き取られた跡が四×一〇メートルの長方形範囲で落ち込んでいる。この落ち込みから、開口方向は南南西と想定される。

6号墳は直径六メートル、高さ〇・五メートルで、埋葬施設は木棺直葬の可能性が高い。墳丘はかなり削

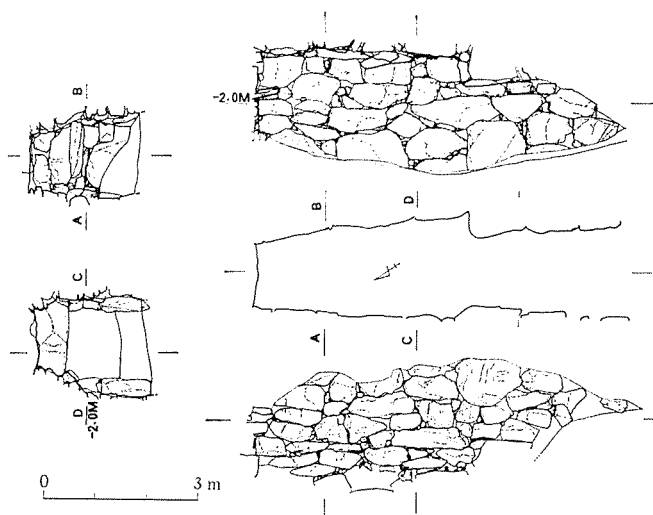


図 189 尼崎学園内 4号墳石室実測図

なり削られており、石材を抜き取った跡が三×五メートルの長方形の範囲で落ち込んでいる。この落ち込みから想定できる石室の開口方向はほぼ南西である。

4号墳は直径一三メートル、高さ二・五メートルの円墳で、埋葬施設は両袖式の横穴式石室である。石室の規模は玄室長四・二メートル、玄室高二・二五メートル、奥壁幅一・三メートル、羨道長二・二メートル、羨道幅一・八メートル、右袖幅〇・二五メートル、左袖幅〇・三五メートルである。石室の開口方向はほぼ南南西である。この石室は神戸市内で唯一の石柵を持つ横穴式石室である。石柵は天井石から〇・七五メートル下のところに突き出して二石で造られている。

5号墳は直径一二メートル、高さ二メートルの円墳で、埋葬施設は横穴式石室である。墳丘上面は削平を

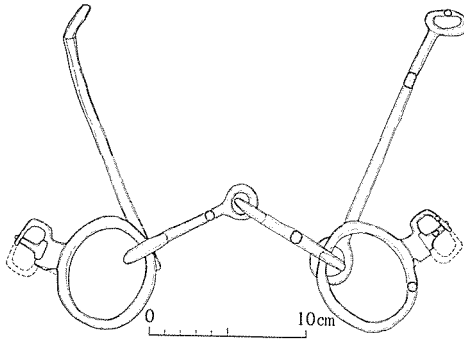


図 190 オキダ古墳群 2号墳出土轡

られている。

オキダ古墳群

オキダ古墳群は、有野川の右岸河岸段丘上に立地している。

昭和五十八年（一九八三）一月、日下部地区土地改良事業に伴って実施した試掘調査において発見された。

その後の調査によって、墳丘は完全に削平されているが、現在水田となっている段丘部に三基、祠がある残丘部に一基、東側丘陵中腹に一基合計五基の横穴式石室が確認され、古墳群であることが判明した。

本格的な調査を実施したオキダ2号墳の石室は、西南西に開口する無袖の横穴式で、全長八・五メートル、玄室の長さは五・四五メートル、幅は中央部で一・六五メートル、玄門部で一メートル、羨道部は長さ二・五メートル、幅は羨門部で一・〇メートルを測る。石材は奥壁部の一石を残すのみで、側部には残っていない。しかし、石室床面の残存状態はよく、玄室部では、石が敷き重ねられていて、床面から、須恵器、土師器、直刀三振、刀子一振、鉄鏃四点、鋤先、鎌状鉄製品、馬具（素環鏡板付轡<sup>くわ</sup>・三點・革金具・飾金具・鍔具、釘、鍔、金環<sup>かすまひ</sup>など）が出土した。一方、羨門部では、直径一メートル前後の浅い土坑状の落ち込みが検出され、須恵器甕一個体分の破片が出土し、墓前祭祀もしくは埋葬後の祭祀に用いられたと考えられる。

出土した遺物から、築造時期は、古墳時代後期中葉と推定され、後期後葉まで、石室で墓前祭祀が行われたと考えられる。また、大形の鉄釘と鏝が玄室奥壁部付近で出土している点から、第一次の埋葬時には、大形の組合せ式木棺を用いていたとみられる。とくに出土馬具は、雲珠・杏葉を欠くものの、素環鏡板付轡・鍍金飾金具・鉸具を一括して副葬品の中に含んでおり、おそらく乗馬に必要な馬具一式を備えていたものと考えられる。

#### 北神ニュータウン内第2・3号地点遺跡

北神2・3号地点遺跡は、有野川長尾川合流部西側の標高八〇メートル前後の丘陵上に、二基あい接して並んでいる古墳である。すぐ東側に神戸電鉄道場川原駅がある。両古墳と平野部との比高は約二〇メートルほどになる。古墳は、現地で永久保存されるため、本格調査は実施されていないが、墳丘の規模を確かめるため、トレンチ（溝掘り）調査が実施された。

2号地点古墳は、直径二メートル、高さ二メートルの円墳で、片袖の横穴式石室が露出している。玄室の長さ四・二メートル、幅二・一メートル、高さは現存高で一・九メートルを測る。羨道部は長さ四・五メートル、幅一・一メートルで高さは流土で埋まっているため不明である。石室の側壁は持ち送りで、天井部はかなり狭くなっているが、天井石は残存しない。

3号地点古墳は、2号地点古墳の南約二〇メートルにあり、全長二九メ



写真 205 北神2・3号地点古墳遠景

トトル、後円部径一五メートル、後円部高さ二メートル、前方部幅一二メートル、前方部高さ一・五メートルの小型前方後円墳で、前方部は北東に向いている。埋葬施設は片袖の横穴式石室で、玄室の長さ四・六メートル、幅一・五メートル、高さは天井石が落ち込んで流土で埋まっているが現存高で二・四メートルを測る。羨道部は長さ約三・五メートル、幅〇・七メートルで高さは不明である。石室中央部は、かなり膨らみをもった胴張りである。

両石室とも石材は凝灰質砂岩を使用している。周辺部で採集した須恵器からみて、どちらも六世紀後半の築造と考えられる。

北神ニュータウン内第4号地点遺跡

第4号遺跡は、長尾川有野川の合流部西側、標高約二〇〇メートル、現水田面との比高約四〇メートル前後の、北へ伸びた丘陵端の尾根筋や斜面地に位置している。昭和五十三年（一九八三）以来の宅地造成工事に伴う発掘調査によって、丘陵北端部の二つに分かれた尾根上で弥生時代中期末と後期初頭の集落址・箱式石棺などが検出され、奈良時代の蔵骨器が出土した。

中期末の遺構が存在する部分は、試掘調査を実施したのみで、原状のまま保存されている。尾根筋には円形の堅穴住居、斜面には方形ないしは長方形の堅穴住居が築かれていた。土器・石器の他に、鉄製の鎌・斧が出土している。

尾根先端の比較的平坦面の広い部分で、等間隔に並んだ弥生時代後期初頭の三棟の円形堅穴住居址と二基の箱式石棺を埋葬施設とする台状墓一基が検出された。



写真 206 北神第4号遺跡の弥生後期集落

これらの竪穴住居址は径四・五〜五・三メートルで、いずれも中央土坑から斜面に向けて排水用と考えられる溝を設けている。また、竪穴住居址の一つの床面には、多量のサヌカイト片や石鏃の未製品が散乱しており、石器を製作していたことが明らかである。ほかにこの住居址内からは、ガラス玉四点が出土している。

台状墓は斜面にあり、流出が著しいため全体規模は明らかでないが、およそ三〜四メートルの方形であったと考えられる。周囲に溝が巡らされているが、やや小型である。二基の箱式石棺は平行に築かれ、一つは長さ一・六五メートル以上、いま一つは長さ一・〇五メートルで、石棺の石材は、周辺に多く存在する凝灰質砂岩で、付近の横穴式石室の石材にも利用されている。石棺内から遺物は出土しなかったが、周溝からは、弥生時代後期の土

器片が出土した。

北神ニュータウン内第9号地点遺跡

第9号遺跡は、有野川長尾川の合流部西側の、丘陵上に立地し、古墳二基と礫石経塚五基（江戸時代）が確

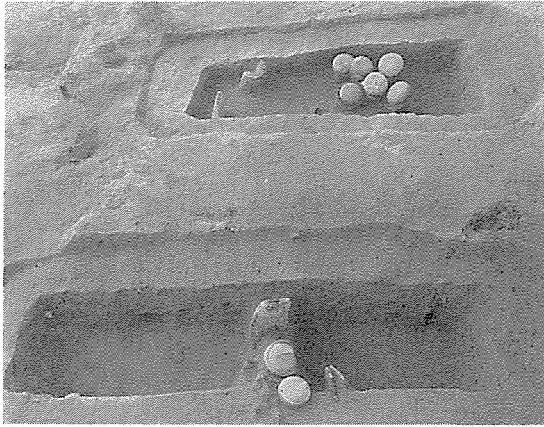


写真 207 北神第9号遺跡2号墳埋葬施設

認された。

第1号墳は、一四×一一メートルの長方形墳である。第2号墳との境になる尾根筋は、一メートル前後岩盤を切り込み、墳形を整えている。また、北辺には小段を設け、それからの墳丘の高さは、現状で二・五メートルである。埋葬施設は、墳丘長軸に平行に長さ三・六メートルの割竹形木棺を直葬している。棺内から遺物は出土していないが、北側小段や墳丘南斜面から土師器片が出土している。それらから、古墳の築造は

五世紀前半代に行われたとみられる。

第2号墳は、尾根の先端で最高所に位置する。後世の削刻により墳丘が原状を止める部分は少ないが、傾斜変換点をつなぐと、径一五メートルの円墳に復元できる。第1号墳のような小段はないが、傾斜変換点からの高さは二・五メートルである。埋葬施設は、南北方向を主軸にする三基の箱式木棺である。

東の埋葬施設は、三基の内最も大きく、長さ三・二メートルの木棺を納めている。掘形中央部には、主軸に平行に岩盤を掘り抜き、排水溝を設けている。掘形の外へ出た排水溝は、屈曲しながら墳丘の中心に開口している。掘形の北端肩部には、須恵器杯の蓋・身が伏せて置かれ、棺外南木口には須恵器杯四セット、壺二点、皮袋形提瓶一点がまとめて置かれていた。また、

棺内からは、三〇〇点を越える土玉や碧玉製管玉三点、鉄製品などが含まれていたが、埋葬時には棺蓋上に置かれていたものが、棺蓋の腐朽とともに落ち込んだと考えられる。また、掘形外の排水溝からは、ほぼ完形の鉄剣が出土している。

中央の埋葬施設は、長さ二・四メートルの木棺で、棺内から須恵器環一セット、管玉六点、ガラス小玉二点が酸化鉄とともに出土しているが、これらは棺蓋の腐朽とともに落ち込んだようである。

西の埋葬施設は最も小さく、長さ一・七メートルの木棺で、棺内から須恵器環六セットと蓋二点・身一点、鉄製鋤先、鉄鏃、鉄刀子などが出土しているが、これらもまた、棺蓋の腐朽とともに落ち込んだようである。当古墳群北方の三田市貴志古墳群は、「吉土」に関連すると考えられ、金銅製冠や異形須恵器が出土している。そして、当古墳は日下部に所在し、「草香部吉土」に通じると考えられ、皮袋形提瓶を出土した。このことは、武庫川中流域の六世紀代を考える上で重要であろう。

#### 北神ニュータウン内第13号地点遺跡

北神第13号遺跡は、有野川長尾川合流部西側、道場町を見下ろす標高二〇八メートルの丘陵尾根上に位置する古墳である。墳頂部はかなり削平されているが、現存径一五メートルの円墳と推定される。墳頂中心部に東西三・七メートル、南北二・五メートルの長方形をした掘り形が検出され、約三〇センチメートルの河原石を規則ただしく積んだ小型の竪穴式石室が発見された。

石室の大きさは、長さ二・四メートル、幅〇・七メートル、深さ〇・八メートルを測る。構築方法は、南北西の三側壁は下二段を比較的大きな河原石を横積みに置き、上三〜四段を小口積みにしている。東小口壁





写真 208 北神第13号地点古墳堅穴式石室

のみ下二段分地山の泥岩を利用し上段に河原石を載せている。天井石は付近で露出する砂岩系の板石を利用してはいるが、割れて石室内に落ち込んでいた。南側壁は盗掘にあつたらしく一部河原石が抜き取られていたが、もともと副葬されていた遺物は少なかったと思われる。天井石が落ち込んでいた下から、長さ一一センチメートル、幅一センチメートルの刀子一口が出土したのみである。刀子には鹿角が巻いてあつた痕跡が残っている。

盗掘坑東側の石室掘り形内に、須恵器の壺一点を中心に、坏蓋と坏身が三組と坏身二点がまとめて置かれていた。盗掘坑内や墳丘上からも須恵器の破片が多く出土しているが、これらは、盗掘の際に石室内から持ち出したものではなく、石室構築後墳丘上に供献したものと思われる。須恵器の出土状況からみて埋葬直後のものと思われ、古墳の築造時期は、六世紀前半初頭と考えられる。

#### 北神ニュータウン内第20号地点遺跡

第20号遺跡は古墳で、北神13号地点の北約一〇〇メートルに位置している。墳丘の盛土は流失していたが、西側で丘陵尾根部を切り込んだ溝部と、東側斜面上に三〇センチメートル程度の凝灰質砂岩を六石一列に並べて墓域を画している。これらから、径一〇メートルの方墳もしくは円墳と考えられる。



写真 209 北神第20号地点古墳横穴式石室

埋葬施設は、丘陵周辺に露頭している凝灰質砂岩の板石で築かれた無袖の横穴式石室で、長さ六・六メートル、幅一・二メートル、高さは残存良好な所で一・六メートルである。構築法は、長さ一・五メートル、幅二〇センチメートル程度の板石を、各長側壁に五〜六枚並べ、その上に比較的小さな石の小口を面にして積んでいる。古墳を斜面上に築いているため、石室もかなり傾斜しており、羨道部入口に近いほど床面に厚く盛土を敷いているが、なおかつ羨道部入口と玄室奥壁部の床面の高低差は一・三メートルもあり、一度の角度がついている。

当古墳は、昭和の初めころ地元で発掘されており、遺物は皆無に近い状態であったが、羨道部側壁横から土師器片数点と、

西側の墓域を画する溝底から須恵器坏身三個体分が出土している。須恵器の編年からみて、当古墳の築造時期は七世紀前半ころと考えられる。

#### 北神ニュータウン内第45号地点遺跡

第45号遺跡は北神12号地点から三〇〇メートル南東にあたる丘陵端に位置する。その丘陵端に、やや隆起した小マウンドがあり、表土の下は、すぐ地山となっていたが、弥生土器片が少量出土したため、全面的に調査がなされた。

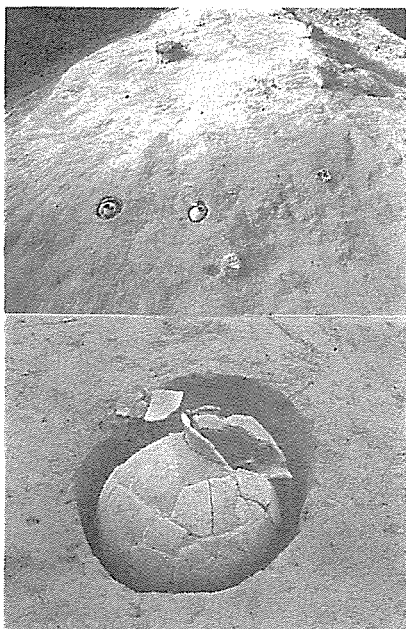


写真 210 上 北神第45号遺跡全景  
下 同土器棺出土状況

このマウンドは、径二メートル前後のいびつなかたちをした楕円形を呈しており、北側と西側はかなり削平されていたが、東側と南側斜面に弧を描くように土器棺三基と木棺墓一基が検出された。土器棺1は、五〇センチメートルの掘り形に、口縁部径三八センチメートル、現存高二二センチメートルの壺を置き、鉢なし壺の底部を蓋に転用している。土器棺2は、四四センチメートルの掘り形内に、口縁部径一六センチメートル、器高三一センチメートル、胴部最大径二五センチメートルの壺を入れ、やはり鉢なし壺の底部で蓋をしている。土器棺3はかなり削平をうけ、浅い掘り形内に壺の破片が少量出土したのみであった。木棺墓は、長さ一メートル、幅四五センチメートル、深さ二五センチメートルで、三隅に河原石が置かれ、埋土内からは弥生土器片が数点出土している。いずれも棺内からの副葬品や骨片はなく、被葬者については不明である。

墳頂部や周辺部からは、埋葬施設や人為的施設はまったく認められなかった。

おそらく弥生時代終末期の墳丘墓であった可能性が強く、墳頂部は削平され埋葬施設は消失したものと思われる。また、別個体の弥生土器片もかなり出土していることから、周辺部には土器棺がかなり埋葬されていたと考えられる。

土器棺は山陰系の土器が多く使用され

ており、日本海側との交流も見逃すことはできないであろう。

#### 宅原遺跡

宅原遺跡は、武庫川の支流長尾川が形成した沖積地と、その右岸丘陵の先端部に立地している。広さは、東西約二キロメートル、南北約一キロメートルにおよび、縄文時代から江戸時代にわたる遺跡である。

そのうちから主な遺構をとりあげる。

弥生時代後期中葉の住居址は、東側に方形の小突出部を持つ大形の円形竪穴住居で、当初径九・四メートル六本柱であったものを二度拡張し、一〇・四メートル八本柱、一一・五メートル一〇本柱としている。中央に炉をもち、その三方は土堤状の高まりがあった。土器類のほか、石庖丁片が出土した。この住居址の北には、同時期と思われる幅三メートル、深さ〇・七メートルの溝があり、底から長さ約三・八センチメートルの銅鏃が出土した。

弥生時代後期後半の二棟の住居址のうち、一方は小突出部をもつ方形竪穴住居で、南北四・一メートル、東西三・六メートルを測る。柱数は二本で、火災のため、柱・垂木材が炭化して残っていた。遺物は少なく、

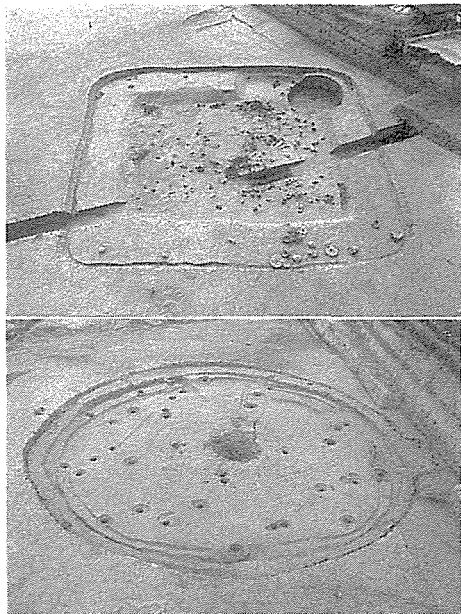


写真 211 上 宅原遺跡の弥生時代住居址  
下 同大形円形住居址

壺と鉢が各一個ずつ出土した。他方は南北七メートル、東西六・七メートルの方形竪穴住居で、壁沿いに幅一メートルのベッド状遺構が、中央には炉が設けられていた。そして、ベッド状遺構からは原形に近い土器、炉中からは砥石、床面からは割れた土器片が出土した。さらに、床面には、植物質のものが炭化して残っており、敷物であったことが判明した。特殊な遺物としては手焙形土器あびぎがあげられる。

古墳時代前期の住居址は、九棟検出されたが、完全なものはない。いずれも一辺五〜六メートルの方形竪穴住居で、壁にカマドまたはカマド状遺構を設けたものや、壁にL字形・逆L字形の幅一・二メートルのベッド状遺構を造り付けたものもあり、火災にあっているものもあった。

古墳時代中期の住居址は数少なく、三棟しか調査されていないが、内一棟では北辺中央にカマドが検出され、カマド焚口附近に甕と高坏が原位置を保って出土した。二棟目は、床面一面に炭化材があり焼失したことが知られた。三棟目は廃棄される時に投棄されらしい小形丸底壺九個、小形壺三個、高坏六個、甕四個が出土し、完形品を多く含むことから祭祀に関するものとも考えられる。

古墳時代後期では、竪穴住居址が一二棟、掘立柱建物が一棟確認されている。竪穴住居のうち一棟は、もと一辺六・五メートルであったものが、二度広げられ、東西七・八メートル、南北八・〇メートルの大型住居に拡張されたものがある。その床面中央やや北寄り、土器類とともに鉄滓及び扁平な台石が出土した。おそらくここで鍛冶が行われたと推定される。この時期の住居址のうち三棟は火災にあっていた。

#### 定塚墳墓群

定塚墳墓群は、武庫川の支流である長尾川左岸の東西に展開する丘陵の一支脈、標高一六〇メートルの南



写真 212 定塚墳墓群全景

北にのびる尾根上に位置している。墳墓群の最高所からは、長尾町宅原の平地を一望することができる。

昭和五十九年（一九八四）一月、道路建設に伴って試掘調査を実施し、丘陵尾根上から土器片を発見した。翌年九月、本格的な調査を実施した結果、五基の弥生時代終末期の墳丘墓が確認された。丘陵南端の尾根端部に1号墳、丘陵尾根頂部に2号墳、2号墳北側の尾根鞍部に3号墳、4号墳と並び、少し離れて、2号墳の東側の丘陵腹部に5号墳が位置している。

1号墳は南北七・三メートル、東西七・〇メートル、高さ一・二メートルを測る方形墳で、2号墳に接する東側と北側に幅一・五メートル前後、深さ〇・三メートル前後の溝を掘り、丘陵斜面側は幅〇・六メートル前後の平坦部を設けて墓域を画している。埋葬施設は、墳丘中央部に長さ一・八メートル、幅〇・八メートルの箱形木棺を埋納し、その後土器棺一基が埋納されていた。また、墳丘の南西部でも土器棺墓一基と、高環形土器・壺形土器を重ねて供えた跡が発見されている。

2号墳は、一辺一三・五メートル前後の不整形な隅円方形状を呈している。墳丘裾部は、幅〇・六メートル前後の平坦部が巡っている。墳丘は二段に築かれていて、一段目の台状部の上に一辺九メートルの方形台状部を築いて、やや南よりに埋葬施設を設けている。

埋葬施設は二時期にわたって設けられたと考えられる。第一回目の埋葬は不整楕円形の墓壇に、割竹形木棺を埋納したものである。木棺の全長は四・二メートル、西側棺小口幅〇・八メートル、東側棺小口幅一・一メートルを測る。この棺床中央部には酸化第二鉄が敷かれ、棺床西部に、鉄鏃二点、鉄斧一点、不明鉄器一点が副葬されていた。その後第二回目の埋葬では、長さ二・三メートル、幅一・一メートルの箱形木棺が埋納された。遺物は棺上から鉄鏃一点が出土したのみである。

埋葬施設の南側には、直径六〇センチメートルの円形掘形に、複合口縁の壺形土器を横倒しにして埋納した土器棺墓一基が発見され、一回目の埋葬施設の墓壇内からは、甕形土器が出土している。

定塚墳墓群は、出土土器の型式より弥生時代後期末葉に比定できる。とくに2号墳は墳丘が不整形で、上部平坦面が広く、墳丘斜面は急傾斜であり、埋葬施設の方向も、墳丘平面の型にあわさず任意の主軸方向をとる点で、弥生時代終末期の墳丘墓の諸特徴を備えるものと考えられる。さらに、墳丘上に台状部を設け、墳丘裾部に平坦面を造りだしている点は、古墳に近似する特徴であり、定塚墳丘墓群の歴史的位位置を示していると思われる。

## 2 北区山田・淡河地区の遺跡

### 山田・中遺跡

六甲山地と丹生山地に囲まれた志染川（旧山田川）南岸の河岸段丘上にこの遺跡は立地している。

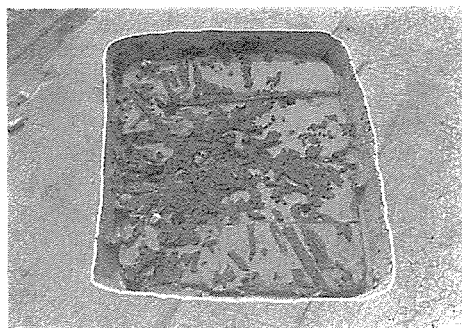


写真 213 山田・中遺跡の弥生時代  
焼失住居址

昭和五十八、五十九年度の山田小学校校舎改築工事に伴う発掘調査で新たに確認された遺跡である。その際飛鳥時代の竪穴住居址、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物や土墳墓などが発掘された。六十一年度には、小学校南側で県道三木・下谷上線改良工事に伴う調査が実施され、弥生時代末期の竪穴住居址、掘立柱建物各一棟と土坑、古墳時代中期末～後期初頭の竪穴住居一棟と土坑が検出された。

弥生時代末の住居址は、東西四・八メートル、南北四・二メートルの隅門長方形で、床面の東西両側に幅一メートル、高さ一〇センチメートルのベッド状遺構が設けられており、その上からガラス小玉三個が発見された。ベッド状部分は盛土で造られ、内側に面する段部には幅二〇センチメートル内外の板がたてられていた。床面中央には炉があり、南壁際には、東西〇・九メートル、南北〇・六メートルの土坑があり、周辺および内部から土器類が出土した。主柱は四本で、その南西隅の柱穴の北東部で粘土塊が上方から落下した状態で検出された。土器製作用の粘土とも考えられる。この住居址は火災にあったとみえ、垂木・屋根材が残存していた。

古墳時代の住居址は、東西四・五メートル、南北四・八メートルの方形竪穴住居址で、北壁中央にカマドを設けている。カマドは幅一メートル、南北現長一・二メートルで、内部には数センチメートルの厚さで灰が堆積していた。中央には支石が立ったままで、さらに内部及び周辺から土師器甕、須恵器蓋坏が出土した。





写真 214 淡河城下層遺跡の弥生時代住居址

淡河城下層遺跡

淡河町はまわりを山に囲まれた、東西約四キロメートル、南北約六〇〇メートルの小盆地を形成し、中央部に淡河川が蛇行している。この地は、中世では街道として利用され、山城も多い。

淡河城は、淡河川と支流僧尾川の合流部左岸、丹生(帝釈)山地北麓の段丘が舌状に突出した所に位置する。段丘の北、東西側は比高三〇メートルもある崖になっているが、南側は段丘面が張り出し、現在城の形状を残しているのは、その北東隅の本丸跡のみである。

本丸跡を除く段丘上が農業基盤整備事業で工事されるのに伴い、城跡の範囲確認調査が実施された。調査の結果、淡河城に関する明確な遺構は確認されなかったが、下層から竪穴式住居址が発見された。

住居址は東西六メートル、南北六・五メートルの隅円方形で、竪穴内にはベッド状遺構がめぐり、四本柱で、中央部に土坑が掘られている。出土遺物は少なく、わずかに土器の底部が出土しているのみである。これらから弥生時代最終末の時期と推定される。

発掘調査で発見された住居址は一棟のみであるが、工事周辺部からも焼土や土器片が出土しており、当時は数棟かたまっていたと推量される。

#### 北区のその他の遺跡

北区では旧石器、縄文時代の明確な遺構は発見されていない。しかし道場町目下部の北神ニュータウン内第9号地点遺跡と山田町下谷上の寿福寺付近で、旧石器時代の終わりから縄文時代初めごろの有茎尖頭器が出土している。

縄文時代の遺跡としては、淡河町野瀬の中山大柚池おおくまで前期、長尾町宅原の宅原遺跡内垣地区で後期、道場町塩田の塩田遺跡では晩期の土器が出土している。

また、宅原遺跡豊浦地区、有野町唐櫃の溝ノ下遺跡、山田町西下の六甲国際ゴルフ場内では、縄文時代の石鏃が見つかっており、大沢町善入の竜ヶ谷遺跡では石鏃や石匙などの石器とともにサヌカイトやチャートの剥片がまとまって出土しており、石器を製作した跡と考えられる。

古墳時代の遺跡は、既述の古墳群と集落址のほかに長尾町、有野町、道場町の丘陵上で古墳群が確認されており、そのほとんどが古墳時代後期の群集墳である。

長尾町には三田市との境の丘陵上に前記の定塚古墳群のほかに、四基の円墳からなる天皇山古墳群と円墳の奥田古墳が存在する。このうち埋葬施設のわかるものは、天皇山古墳群の横穴式石室一基のみである。

有野町二郎には、有野川右岸の丘陵上の二基の円墳からなる二郎古墳群と左岸の丘陵にある籠谷古墳が存在する。籠谷古墳は直径八メートルの円墳で埋葬施設は南東方向に開口する川原石を積んだ横穴式石室である。

道場町には先記のほかに、盆地縁辺の丘陵上に多くの古墳が存在する。

三田市との境の塩田の丘陵には八基の円墳からなる八景中学南古墳群、三基の円墳からなる川北古墳群、七基の円墳からなる八幡神社裏山古墳群が存在する。これらの古墳の埋葬施設は八幡神社裏山古墳群の木棺直葬墓一基を除いて、ほとんどが横穴式石室である。

平田の有馬川右岸の丘陵には既述の稲荷神社裏山古墳群のほか、平田古墳と二基の円墳からなるヨタノ池古墳群が存在する。これらはすべて横穴式石室を埋葬施設とする。南所には二基の円墳からなる南所古墳群が存在するが埋葬施設は明らかでない。